

特集1 とちぎ圏央まちづくり協議会  
「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム(2025年5月13日)  
～LRT西側延伸で新たな価値あるまちづくり～

特集2 とちぎ圏央まちづくり協議会  
第2回「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム(2026年2月27日)  
～江戸から日光へ 広域連携による歴史軸の物語～

宇都宮共和国  
大学

# 都市経済研究センター ――年報

第26号  
May. 2026

都市経済研究センター  
宇都宮城址公園のしだれ桜  
(提供:(一社)宇都宮観光コンベンション協会)

## 宇都宮共和大学の地域社会連携・地域貢献ポリシー

宇都宮共和大学は、須賀学園の教育理念を踏まえ、大学の目的として、「時代の潮流と社会の要請を見極め、常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし、さらに経済、教育、文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする」（学則第1条）と定めている。

宇都宮共和大学は、栃木県内に3つのキャンパスと活動拠点を有しており、学園の100年を超える伝統を生かしながら、絶えず「まち」、「ひと」に視点を当て栃木県央を中心とする北関東圏の「地域社会」の経済、教育、文化の向上と発展のために貢献することを目的とする大学である。

この目的を達成するために、本学は、「社会連携・社会貢献に関する方針」を次の通り定める。

### 1. 目的と使命

本学は、地域社会と連携し、時代の要請に応え、将来地元で地域社会の発展に貢献し、活躍できる人材を養成することに努める。

### 2. 産学官の連携

本学は、企業、自治体、各種団体・組織、市民等と積極的に連携し、地域社会の発展に貢献できるように努める。

### 3. 地域活動の拠点

本学は、本学の有する教育・研究資源を積極的に地域社会へ提供し、地域の教育・文化活動の拠点となるよう努める。

### 4. 地域貢献活動への支援

本学は、教職員・学生が、研究・教育の成果を地域社会に発信する活動及び教職員・学生が地域の活動や行政施策の助言者等として参画することを積極的に支援する。教職員は、「宇都宮共和大学コンプライアンス規程」の重要性を認識し、高い倫理観を持って行動する。

■特集1

とちぎ圏央まちづくり協議会「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム ～ LRT西側延伸で新たな価値あるまちづくり～ (2025年5月13日(火)実施)	1
---	---

■特集2

とちぎ圏央まちづくり協議会 第2回「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム ～ 江戸から日光へ 広域連携による歴史軸の物語～ (2026年2月27日(金)実施)	30
--	----

■研究ノート

那須烏山ジオパーク構想における地域活動団体と学校教育の連携構造 — 「なすからジオの会プチェーロ」の活動に着目して— 坂口 豪	79
---	----

■支援事業成果報告

大学コンソーシアムとちぎ 学生活動支援事業	90
栃木県 大学地域連携活動支援事業	92

■学生提案成果報告

大学生によるまちづくり提案 2025	
(1) 築瀬あったかリンク事業 ～地域をひらく、心をつなぐほっこり居場所ネットワーク構想～ 宇都宮共和大学シティライフ学部 三浦ゼミ (2年) × 「地域お助け隊」 連合研究会	94
(2) オリオン・ワンダーランド 宇都宮市創造都市研究センター魅力都市研究グループ	100
とちぎ学生アイデアピッチバトル	
(3) 飲んで楽しむ方言モクテル 宇都宮共和大学シティライフ学部 高丸ゼミ (3年)	106

■学生による地域連携活動	110
--------------	-----

■宇都宮共和大学都市経済研究センターの主な活動報告	117
---------------------------	-----

■専任教員の社会貢献活動一覧	122
----------------	-----

## 特 集 1

# とちぎ圏央まちづくり協議会「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム ～ L R T西側延伸で新たな価値あるまちづくり～

### …… 要 綱 ……

1. 日 時 2025年5月13日(火) 14:30～17:00

2. 会 場 宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室

3. 次 第

(1) 基調講演「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」

宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事 江田 郁夫 氏

(2) パネルディスカッション

パネリスト

宇都宮市総合政策部(前東京サテライトオフィス所長) 馬場 将広 氏

宇都宮観光コンベンション協会常務理事 鈴木 孝美 氏

壬生町東京サテライトオフィス所長 落合 正浩 氏

壬生町歴史民俗資料館学芸員 藤栄友里絵 氏

(前 掲) 江田 郁夫 氏

司 会

宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長 須賀 英之

主 催 | 一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会

共 催 | 宇都宮まちづくり推進機構

### ■主催者挨拶

一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会 常務理事 新見 徹 氏



本シンポジウムの前に当協議会の定時総会を行いました。このまちもいよいよL R Tが西側に延伸し、東武宇都宮線に乗り入れるなど栃木県知事の力強い方針を受けて活動強化を図る協議を行いました。

本日は当協議会会員の他、「よみがえれ！宇都宮城」市民の会の皆さん、また行政を始めとする多くの地元の皆様方にお集まりいただき感謝申し上げます。

当協議会はL R T整備と共に8年前に発足し、沿線のまちの機能を

どのように創るのかを論議し提言をする役割で設立しました。

長年の皆様方のご尽力でL R T東側の活況は想定以上のもので、西側延伸を考えますと、より多くのお客様が世界中から栃木に来られます。

その中で栃木県は世界遺産日光を擁しております。

話は変わりますが、新幹線に乗ると半分位は外国人の方ですが、大半は宇都宮駅で降りず乗り換えだけです。

宇都宮市の魅力を更に磨き、世界遺産日光と連動する県央都市の役割を果たすためこのプロジェクトを進めて参りたいと考えます。

このプロジェクトのねらいは、今回作りましたお手元のパンフレットをご覧ください。

徳川時代の「江戸から日光」です。

大きなデザインですが、日光街道、例幣使街道、沿線街道沿いのリソースを拾い起し、新たにどのようなまちづくりをすべきか、今回は県央の宇都宮市や壬生町を中心に論議するキックオフ会議です。

次回からは、江戸から宇都宮市、日光市に繋ぐ沿線の小山市、栃木市、壬生町、鹿沼市、日光市などの自治体も交えながら進めたいと思います。

さて本プロジェクトを進めるにあたってのキーワードは「連携」です。

関係自治体間の連携、交通事業者、旅行会社等、栃木全县に関わる方の連携が不可欠です。

また当会員もグローバル企業が増加しています。日々のビジネスネットワークを活用し栃木のブランドアップに、即貢献が可能と思います。

私事ですが、私が栃木県、宇都宮市と出会って30年を超えました。とりわけ宇都宮市の変貌ぶりはL R T整備により今後「全国ナンバーワンの都市」になれると確信します。

また栃木県も大きなポテンシャルを持っています。

世界遺産日光と徳川時代の「とちぎSHOGUN物語」のように、世界的に通用するプロジェクトを行うことが重要と考えます。

最後に、ブランドの話をしします。

人口減下、ブランド力の無い企業は発展しません。

都市も同じだと思えます。

この宇都宮市を引っ張ってきたブランドが二つあります。一つ目は餃子で、これはナンバーワンです。二つ目はL R Tで、最強の武器です。

三つ目の武器は「とちぎSHOGUN物語」になるよう取り組んでいきます。

栃木が持つ世界遺産の活かし方をこのプロジェクトで訴求していきたいと思えます。

本シンポジウムにあたり、宇都宮共和大学の須賀学長にはプロジェクトの発足からシンポジウムの開催までご指導を頂き感謝に堪えません。

これからの更なるご指導とご支援をお願い申し上げ挨拶とさせていただきます。

## 基調講演

# 「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」

宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事

江田 郁夫 氏



ただいまご紹介いただいた宇都宮短期大学の江田です。よろしくお願ひします。

とちぎ SHOGUN 物語というシンポの基調講演ということですが、SHOGUN が横文字なのは斬新で面白いと思いました。それは多分、皆さんもよくご存知かと思いますが、昨年アメリカで放映されたドラマシリーズの「SHOGUN 将軍」にあやかってこのような横文字に、まあインバウンドということ

ともあるのですが、ご承知のとおり真田広之さんが演じました。役名は吉井虎永とのことですが、徳川家康になぞらえた役柄ということで、昨年からエミー賞やゴールデングローブ賞などの賞を総なめにしました。そのような「SHOGUN 将軍」ですが、その将軍がこの栃木県の日光に葬られたということです。

1999 年から世界遺産なので、すでに 25 年がたっています。ですが世界遺産になる前から、「日光を見ずして結構と言うなかれ」という格言がありました。これはただの語呂合わせかと思っただけで、辞書などを引くと、ナポリを見て死ねとほぼ同義ということで、イタリアのナポリも世界遺産ですが、それと並ぶようにして日光がありました。具体的には、東照宮に代表される名建築の数々が注目されています。結構調べてみると、江戸時代後期ぐらいまでさかのぼっています。ですから、日本国内ではすでに日光はそれほどのネームバリューです。江戸時代、伊勢神宮詣でが爆発的な人気を博したことはご承知かと思いますが、もう 1 つ人口に膾炙したのが日光でした。

とちぎ SHOGUN 物語のこのパンフレットは、先ほどもご紹介があったと思うんですけども、よくできていると思います。栃木県立博物館に収蔵される名品の数々が写真になっていて、表紙は江戸時代前期に描かれた東照宮です。ですから、日光の山内と呼ばれていた世界遺産になった地区の、それこそ今から 400 年前当時の姿、できたてほやほやの頃の日光の様子が描かれています。そして裏側の写真は、よくご存知の徳川家康、東照大権現だいごんげんです。その下は、これもよくできていると思うのですが、山内の入り口の神橋が描かれています。また道々の宿場の情景などもあ

ります。昨年の夏の甲子園大会で注目された石橋高校がある石橋宿の様子も、宇都宮の入り口の様子もあるということで、まさに江戸時代の<sup>しもつけ</sup>下野の光景が描かれています。

今回の基調講演は2つの話を軸にしたいと思います。1つは、もう皆さんはよくご存知だと思いますが、そもそも「日光を見ずして」と人口に膾炙した日光とはどのような場所なのか、それがまず前半のお話です。それから後半は、せっかくここ宇都宮で開かれたシンポなので、その中で宇都宮はどのような役割を担っていたのか、この点をご紹介しますと思います。

この後具体的な話は、お手元のレジュメを一応ご確認いただきたいのですが、1ページと2ページが私の話の主な内容です。それから地図がその後に2つ付いています。3ページ目の地図は、きょうの題名は天下人とあります。天下人とくれば徳川家康もそうですが、その前に豊臣秀吉がここ宇都宮を訪れたというのが3ページの地図です。

1590年、天正18年に豊臣秀吉は小田原の北条氏を滅ぼして、その後天下統一を実現します。戦国が終わって、関東、東北にも平和な時代が訪れます。その際に秀吉は、小田原から宇都宮、会津までを訪れます。その旅程図が3ページ目です。ですから家康が葬られる前にまず秀吉が宇都宮に来ていて、延べ11日間滞在しました。後でお話ししますが、その際に家康も宇都宮に来ていますし、伊達政宗なども宇都宮にはせ参じました。ただ政宗は小田原に遅参しただけでなく、実は宇都宮にも2日ほど遅参してしまったのですが、そのような具合で、宇都宮が重要な歴史上の舞台になっていました。

ただ皆さんに注目してほしいのは、後に五街道といわれる中で、例えば日光道中や奥州道中、先ほどご紹介したパンフレットにも、それらの江戸時代の街道の様子が紹介されています。実はレジュメの3ページ目の地図を見ていただくと、原奥州街道と呼べるものを通して、秀吉は多くの軍勢と共に宇都宮、そして会津まで訪れているわけです。すでに家康以前、江戸時代以前から宇都宮はそのような交通の要所でした。

これも後で詳しくお話ししたいと思います。家康が日光に葬られたのち、歴代将軍が家康の命日に日光に参詣します。これを日光社参と呼んでいますが、その際には江戸を出た後、岩槻に1泊して、古河に1泊、宇都宮に1泊、そして日光に2泊して帰ります。同じ道を帰る場合もありましたが、きょうはまた別に壬生の方がいらしているので、あらためてご紹介いただけたと思いますけれども、壬生にも泊まる機会がありました。そのような交通ルートを使って日光社参は行われました。

それ以前に秀吉も、3ページ目ですが、小田原ののち鎌倉に行って、鶴岡八幡宮<sup>つるがおかはちまんぐう</sup>に詣でて、その後江戸で家康と打ち合わせをして、岩槻に行きました。つづいて結城<sup>ゆうき</sup>に泊まって、その後宇都宮に8泊9日して、東北地方へと向かいました。地図ではブルーになっている線が会津からの帰り道です。その頃宇都宮から東北に行くには2ルートあって、その2ルートを秀吉は、行きは白河経由、帰りは南会津と鬼怒川<sup>きぬがわ</sup>経由で宇都宮に戻ってきました。家康以前から、そのような街道筋の分岐点に宇都宮は位置していました。ですからこれは、まさに宇都宮が東北への玄関口だったことが分かる地図です。

4ページ目ですが、江戸時代にはこのような街道筋が縦横に、ご承知のとおり栃木は海なし県

なので、またそれと同時に河川交通も重要な意味を持っていました。ですがやはり陸上交通路の持つ意味が大きかったということで、地図にあるとおり、宇都宮から東北に向かう奥州道中、日光に向かう日光道中があります。徳川秀忠が日光からの帰り道に泊まった壬生は、日光道中壬生通りです。

同じく、朝廷から派遣された使節がはるばる日光にやってくる時は、足利、栃木、そして鹿沼を経る例幣使街道です。その使節を例幣使と呼んでいたのが、例幣使街道と呼んでいますが、以上のような街道がまさに栃木県を縦横に走っていたことになります。

そのような中で、そのつながりのキーポイントが日光です。それから宇都宮も同様に重要な場所だったということ、この後具体的にご紹介したいと思います。

ではレジュメの1ページから順番にご説明をさせていただきます。まず1ページですが、はじめに書いておきました。なぜ家康が日光にということですが、そもそも東照宮はどのような役割を担っていたのかということで、写真をいくつかお見せしたいと思います。ご覧いただいている東照宮に葬られたのが家康です。家康が亡くなった時にはもう大御所で、将軍は秀忠に譲っていたので、駿府、現在の静岡市で亡くなっています。彼はまずは久能山に葬られました。それがその後遺言によって日光に葬られます。

日光はもともと自然豊かな場所ですが、宗教的に日光を本格的な霊場、聖地として開いたのは、芳賀地域出身といわれる勝道りんのうじという僧侶です。これは日光の輪王寺境内にある勝道の像です。そして、ご神体とされた男体山と中禅寺湖です。山岳信仰の霊場として、日光はこの後長い間信仰の対象となりました。つぎが世界遺産である山内の入り口の神橋です。

山内に入った後、特に日光の特徴として、山岳信仰と結び付いているので、山岳信仰の神が現われた神社として本宮があります。勝道上人が開いた四本龍寺というお寺のすぐ隣にあるのが本宮です。そして宇都宮にも二荒山ふたあらかやま神社がありますが、日光の二荒山ふたらさん神社は新宮と呼ばれていました。そしてもう1つが、山内の奥にある滝尾社です。これらが日光を形づくる重要なポイントとなる神社ですので、それらも含めて日光の歴史を少しご紹介します。

ではレジュメです。はじめにというところです。天下人、家康が亡くなるわけですが、彼は三河国、現在の愛知県岡崎市生まれで、最後の鷹狩り中、1616年、すでに駿府城に移ってからのことです。ご承知かと思いますが、結構彼は薬に詳しいし、特に健康にも気遣っていたということで、趣味でもありますが、健康管理も含めて鷹狩りをよくしていました。ですが1616年1月21日に体調を崩して、田中城というところで発病して、その後自分の居城である駿府城に戻り、4月17日の午前10時ごろに、数え年で75歳の生涯を終えます。ですから命日の4月17日が、この後将軍たちが日光に参詣する日光社参の日になりました。

そして家康は、死を間近にしてつぎのような遺言をしたといわれています。遺言の場に立ち会ったのは、後に宇都宮藩主となって現在の宇都宮の町場の原型をつくり上げた人物です。家康の側近中の側近の本多正純です。それから、同じく家康の信頼が厚い南光坊天海です。もともと会津出身ですが、生年がはっきりしないので、大体の辞書だと102歳や108歳で亡くなったといわれています。私の知っている限り132歳というのもありましたが、132歳は置いといて、ただそれ

ほどの長命でした。1643年に亡くなったのが天海です。

のこるもう1人、臨濟宗、京都南禅寺の住職などを経て、幕府の寺社行政に携わったのが金地院崇伝です。その崇伝が書き残した日記に、家康の遺言はこのように現われてきます。アンダーラインを引いておきましたが、②です。家康が言うには、1、まず御体を久能山に納めてください。2、葬式は東京都にある増上寺にて申し付けます。3、御位牌をば三河の大樹寺にといいことです。出身地ですし、もともと家康は松平なので、松平氏の菩提寺の大樹寺とということでした。そしてその後が日光です。4、「一周忌も過ぎ候て以後、日光山に小き堂をたて、勧請し候へ」。臨終に当たって、彼自身が日光へ、それも一周忌というタイミングまで具体的に指定していました。なぜ日光かといったら、レジュメの矢印です。日光に葬ることによって「関八州の鎮守とならん」。関東、当然江戸も含めてでしょうけれども、それを私が守るといふうなことを言いました。

その後の展開は、秀吉は豊国大明神となりましたが、家康のほうは東照大権現という神号を授与されました。これは1617年2月21日で、亡くなった翌年のことです。息子の秀忠がまずは早速、日光東照社を建立しました。そしておじいちゃん好きの、家康の孫である3代家光が、家康の21回忌を期して国家的なプロジェクトを行いました。これを寛永の大造替と呼んでいます、1636年に現在の東照宮を造り上げました。東照宮と呼ばれるようになったのは、朝廷から宮号許可が、つまり伊勢神宮もそうですが、それまで東照社だったものが東照宮に格上げされたということで、1645年から東照宮になりました。

以後の東照宮の役割はレジュメに列記しておいたとおり、徳川将軍家が家康の命日4月17日を期して日光に参詣します。これに付き従う部下たちがどのくらいかは、いろいろなケースがあったようですが、それこそ10万人程度という大軍勢だったということです。現役の将軍ではない場合も含めて、おおむね全19回というのが一般的です。

それから先ほど例幣使街道をご紹介しましたが、朝廷からの使節を例幣使と呼びます。これも毎年派遣されます。そして特に国外から、具体的には朝鮮からやってきた朝鮮通信使という外国使節や、琉球の使節も時にはこの日光に社参しました。ですから、家康の遺言はあくまでも関八州の鎮守ということでしたが、実際には日本の総鎮守という役割を担っていました。※印で書いておいたとおり、一時は全国に700社程度東照宮があり、一番北では函館にあったようです。

ただし問題は、なぜ家康が日光に葬られたのかです。彼自身は一度も日光を訪れていません。諸説あるのですが、差し当たりまずは、では日光という場所は？ということです。これも皆さんはよくご存知かと思うのですが、さらっと徳川家康以前の日光はどのようなところだったかを確認しておきたいと思います。

そもそも日光とはということで、レジュメ1番の①です。日光山というのはある意味当て字で、もともとは二荒山です。二荒山は音読みなので、訓読みでは二荒山です。なぜ二荒山かといえば、これも諸説あるのですが、多分これが一番かと思うのは、補陀洛山です。観音の住みか南海の彼方にあると信じられた山が、もともとの二荒山の起こりで、それが現在の日光になったようです。

先ほど写真でご覧に入れた芳賀郡出身の勝道が、776年といますから、今から1200年以上

前に、日光山内に千手観音をまつる四本龍寺を創建しました。これが現在の輪王寺につながるのですが、写真でご覧に入れた本宮神社のある辺りが、そもそものお寺のスタート地点ということで、四本龍寺が創建されました。その後782年に二荒山、今の男体山に登頂しました。そしてこれも先ほどご覧に入れた中禅寺湖畔に、その神をまつる神宮寺を造りました。ですからそもそもが山岳信仰と結び付いていた霊場でした。

②です。日光山の特徴は神仏習合です。本来日本では、さまざまなところに神が宿るという信仰を基本としていましたが、世界宗教である仏教が入ってくるとともに、大変日本は柔軟なので、神と仏は一体です。その際に、世界宗教ですので、もともとの大本は仏さまで、それを本地仏と言いますが、それが日本では神の姿でも現われます。これを垂迹すいじやくと言います。ですから本地垂迹説などと呼ばれるのですが、そのような神仏習合の考えが日本では広まっていきました。

日光も神仏習合の霊場ですが、特に京都の天皇や、天皇をやめた上皇・院が、平安時代に苦勞して訪れた世界遺産があります。②に書いてある熊野三山です。熊野三山の場合は本宮、新宮、それからあの有名な那智の滝がある那智社です。その熊野三山信仰が有名ですし、参詣道である熊野古道も世界遺産となっています。同じように日光でも、三所権現信仰と呼ばれる信仰が一般に広まっていきました。

その際の山がご覧いただいている男体山と、それと並ぶ女峰山、太郎山です。そしてその本地仏は千手観音と阿弥陀如来、馬頭観音でした。先ほどご覧いただいたように、それらが現われた神社が本宮と、それから東照宮のすぐ隣にある新宮——現二荒山神社と、その奥にある滝尾神社です。ですからまさに1,300年来の霊場が日光であって、そこに家康がまつられました。

家康以前にも日光を厚く信仰した武将は確かにいます。③と書いておきましたが、例えば源頼朝も日光山を崇敬していました。実は頼朝以前、父の義朝も日光山と関わりを持っていて、日光山の堂舎——建物を造営したことによって、現在の栃木県知事のような下野守しもつけのかみに任じられていました。そんないきさつがあるので、レジュメの2ページですが、頼朝本人も日光山に土地を寄進していました。

その土地が特徴的なのですが、三昧田と呼ばれる土地を寄進しました。三昧田というのは、常行堂というお堂で、念仏三昧という祈祷を行うに当たって、常行堂を含めた維持管理費用のための田んぼを15町ほど寄進しました。その点でも、頼朝は日光山が何たるかをよく知っていました。以上のような経緯から日光山は、その後の武家政権、鎌倉幕府、室町幕府でも大変重要視された霊場でした。

例えば鎌倉には、現在は残っていませんが、頼朝のお父さんである義朝の菩提寺として頼朝が創建した、勝長寿院があります。そこの最高責任者が別当なのですが、勝長寿院というお寺の別当は、実は日光山の別当、長官も兼ねていました。この日光山別当には後に天海も就任しました。そのように大変歴史のある重要なポストなのですが、鎌倉の僧侶が日光山別当に就任します。その点からもうかがえるように、鎌倉幕府、その後の室町幕府のもとでも日光山との緊密な関係が長く続いたというのが、日光山の特徴の一つです。

④と書いておきましたが、日光山は実は関東の霊場というだけではなくて、このようにも言わ

れていました。関左の<sup>ひえいざん</sup>比叡山です。関左は関東地方を意味します。つまり、京都の王朝を守護する比叡山と並ぶ重要なお寺が関東の日光山であると、古くから言われていたということです。

比叡山は皆さんもよくご存知かと思います。比叡山の場合も古くから山岳信仰の対象で、最澄によって天台宗の根本道場となり、延暦という元号まで付けられた重要寺院である延暦寺が開かれました。先ほど出てきた三昧というのは、実はこの比叡山に始まる、常行三昧堂というお堂があります。そのお堂は、ここ栃木県出身の円仁という、中国まで渡った僧侶がもたらした祈禱<sup>きとう</sup>でありお堂です。ですから、中国の五台山で見て学んで、その上で比叡山に円仁が建てたのが常行三昧堂という、阿弥陀さまを本尊として常行三昧という祈禱をする、重要なお堂です。そのような関係で、早くも1145年に日光山にも建立されて、以後重要な法会が行われました。

例えば、修正会というのは正月に行う祈禱です。国家の安泰や五穀豊穡を祈りますが、その修正会や大念仏会が行われました。その点からも分かるとおり、比叡山という日本を代表する寺院と並んで、関東の天台系寺院の中心的な存在となったのが日光山です。それを象徴する表現が関左の比叡山でした。

関左の比叡山は、江戸時代になると東京上野の寛永寺が担うことになります。上野の寛永寺は江戸時代になると東叡山寛永寺と号して、関東の総本山になります。それまでの流れと同じように、寛永寺の住職は、天台座主という天台宗のトップと、日光の門主を兼ねます。以上のように比叡山との関わりは古くから連綿とつながっていきます。その立場を輪王寺宮門跡と呼んでいます。

というわけで、前半お話ししたのは日光山の歴史です。申し上げたように、日光山は家康以前にもそれこそ長い歴史を持っていて、各時代の武家政権と密接なつながりを持っていました。それを象徴する表現の一つが関左の比叡山という言い方だったわけです。では一方で宇都宮はどうかということ、後半ではお話ししたいと思います。

レジュメ2ページ目の2番ですが、「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」です。織田信長は天下人になる途中で亡くなるので、天下人という表現は大体的に豊臣秀吉、それから徳川家康、戦国の世を治め天下を統一したふたりの人物がいわゆる天下人となります。まずは豊臣秀吉と宇都宮という話をします。先ほども簡単にお話ししたところですが、3ページ目の地図をご覧くださいながらご説明します。

秀吉は非業の死を遂げた信長の後継者となった後、まずは四国、九州を平定します。その後いよいよ東日本を制圧ということ、その際に惣無事令という、高校の教科書にも紹介された、秀吉の平和令と呼ばれるものがありました。ただ現状の理解では法令として出されたわけではなくて、勝手な戦いはするな、私戦、個人的な戦いをやめろという命令を秀吉は各地に下しています。

小田原城の北条氏はそれに違反して、最終的に秀吉から攻められます。小田原評定<sup>ひょうじょう</sup>といわれるとおり、結局北条氏は籠城戦を選択して、1590年4月から籠城戦が本格化し、7月上旬には落城してしまいます。約3カ月の籠城戦になったわけです。しかしそれで北条氏が滅びたからといって、天下統一が実現するわけではなく、その後の関東・東北地方における天下統一の総仕上げが必要になってきます。そのために秀吉は、まず小田原城の近く、箱根山麓に一夜城という見

事な城を築き上げて、そこで籠城戦を督戦しました。

つづいて鎌倉鶴岡八幡宮に参詣して、白旗神社という源頼朝をまつた神社に詣でて、頼朝像を見ながら、確かにあなたは天下を統一したけれども、私のほうがもっと偉いです、私には部下もない中で天下統一を実現したなどと話しかけたと、後世に言い伝えられています。

その後が江戸、そして岩槻です。これは地図でご覧いただければと思いますが、そのあと結城に行きました。結城は寄り道になります。本来なら古河、小山から直接宇都宮へ向かって構わなかったわけですが、秀吉は家康からの養子、実際には人質として家康の息子を預かっていたので、その処遇の関係で結城に立ち寄っています。ご存知のとおり、家康の次男は結城家の跡取りとなりました。その件はこの段階で決まったと思うのですが、結城秀康となって、小山一族の結城氏を継ぐ形になります。そのような関係で取りあえず結城に立ち寄りました。そして宇都宮には7月26日に到着しています。

本来なら伊達政宗は、秀吉の宇都宮到着時には出迎えるべきだったのですが、いません。翌々日の朝10時ぐらいに遅刻して来ます。そのような経緯で、その後秀吉は伊達政宗に会います。そして7月29日には、今度は家康が宇都宮に来て秀吉に面会します。その際に、息子の秀康を結城氏の養子にすることや、例えば家康家臣の井伊は群馬の箕輪城主にしようなどという、細かな指示をして、その後8月4日まで、これは天気が悪かったこともあるようですが、延べ9日間宇都宮に滞在しました。

8月4日は大田原に2泊して、翌日が白河泊まりです。続いて長沼、つぎに中地、そして会津に到着します。会津では蒲生氏郷という、織田信長にも使えた名将が会津城主に抜擢されます。最終的にここ宇都宮に、蒲生氏郷の息子の秀行が宇都宮氏が滅びた後にやってきますが、もともと蒲生氏は会津に配置されました。そのような仕置を終えて、帰りは、今は国道121号線、かつては会津西街道と呼ばれた道が通っている会津田島、それから藤原という鬼怒川温泉あたりを通過して、宇都宮に戻りました。秀吉は帰り道は急ぎ足で古河、岩槻を通ります。その後はもう江戸に立ち寄る必要がないので、小田原に直行する途中で府中競馬場のある府中に泊まって、小田原までということでした。

以上のようにここ宇都宮は天下統一の総仕上げを行った場所です。そのような戦後処理を仕置と呼んでおり、宇都宮・会津仕置という、戦国時代を終わらせる舞台になったのが宇都宮でした。

なぜ秀吉にとって宇都宮仕置だったのでしょうか。途中いろいろ紆余曲もあったようですが、秀吉に仕えた五奉行の1人に増田長盛という奉行人がいます。彼の手紙によると、「秀吉様は会津まで取りあえず行く予定です。なので道の整備をしてください」とあります。ただし、「会津はもしかしたら行かないかもしれないけれども、宇都宮までは必ず行くから」とも述べています。結局、秀吉は会津まで行きましたが、宇都宮には必ず行く当初から言っていたわけです。

なぜそれほど秀吉は宇都宮にこだわったかということ、やはり宇都宮二荒山神社、かつての宇都宮大明神ということになるかと思います。それこそ宇都宮大明神はただの神社ではありませんでした。レジュメの②に書いたとおり、実は宇都宮大明神、現二荒山神社には、以下にお示しする超有名人、ビッグネームが戦勝祈願をしました。その典拠となる宇都宮大明神の神官が室町時

代にまとめた、本社はこんなに由緒正しく、多くの人々の信仰を集めた神社ですという由緒書（「宇都宮大明神代々奇瑞之事」）によると、少し眉つばだと思うのが1番です。まず藤原秀郷が宇都宮大明神に戦勝祈願をし、平将門をうち滅ぼしました。いわゆる承平天慶の乱です。朝廷を大混乱に陥れ入れました。平将門はここ関八州をほぼ統一して、天皇に代わって新皇と号したという事件です。その際に秀郷が将門を討つに当たって、宇都宮大明神に戦勝祈願をしました。

そしてその後も、2番源義家が現在の岩手県辺りに勢力を持っていた安倍一族の安倍貞任を討ちました。これは前九年合戦と呼ばれる合戦ですが、その時にも源義家が戦勝祈願をしたと伝承されています。

そしてこれは歴史的な事実で、3番の源頼朝です。源頼朝は日光山に三昧田を寄進しただけでなく、宇都宮大明神にも実際に詣でています。レジュメでは②の3と書きましたが、平氏を滅ぼすことによって源頼朝は全国を軍事力で従えたわけではなく、頼朝にとって目の上のたんこぶが、まだ平泉を中心に東北地方に残っていて、こともあろうに弟の義経までそこに逃げ込んでいるという問題を抱えていました。その平泉の奥州藤原氏を最終的には朝廷の許しを得ずに討ってしまう、これが奥州合戦で1189年のことです。

1189年、あの秀吉と同じように7月17日に鎌倉を出発した頼朝は、7月25日に宇都宮に到着します。着いた頼朝は何をしたかという、さっそく宇都宮大明神に詣でて戦勝祈願をし、それと同時に上矢を奉納しました。その上でようやく宇都宮氏の館に入って宴会を開きました。

宇都宮は当然奥州に向かう順路なのですが、頼朝が宇都宮で行ったことは宇都宮大明神に詣での戦勝祈願でした。この後頼朝は奥州藤原氏をぶじ滅ぼして、東北地方から帰ってくるわけですが、10月19日に宇都宮に着いたあと、再び宇都宮大明神にお礼参りをしています。一応祈った以上、願いがかなったらきちんとお礼参りをするというのが本来の作法なので、頼朝は帰り道に宇都宮大明神に詣でて、お礼に荘園等を寄進したわけです。

そして4番です。その後、こちらは確たる史料には出てきませんが、モンゴル軍がやってきた文永・弘安の役でも戦勝祈願がなされたとのこと。

ではなぜそのように、歴史上の有名人がそろいもそろって宇都宮大明神に戦勝祈願をしたのかということ、実は日光三所権現のうちの太郎権現が、宇都宮大明神に移されている、勧請されているということです。レジュメの矢印に書いたとおり、宇都宮大明神は日光山の里宮、別宮という位置付けを与えられていました。これは意図的にそのようにしたところがあると思います。

かつての宇都宮大明神の参道にはたくさんの鳥居が立っていました。なかでも一の鳥居は最初の鳥居ですが、これは本来宇都宮の入り口に当たります。その宇都宮の入り口にあった一の鳥居にはどのような神額が掛かっていたのかということ、まずは正一位勲一等という神様の位階とともに、日光山大明神の名前が記されていました。つまり、宇都宮は日光山の入り口であり、その里宮が宇都宮大明神という位置付けです。それを宇都宮大明神の神官がきちんと記録していたわけです。

似たような話が鹿沼にもあります。鹿沼の町場への入り口で、今鳥居跡と呼ばれているところには、源頼朝が造ったという鳥居がかつてありました。聖地日光山への入り口として、それぞれ

宇都宮と鹿沼に日光山への最初の鳥居があったということになります。最近「ブラタモリ」を見ていて、伊勢神宮に詣でる時に、同じように伊勢神宮の鳥居が、何と伊勢神宮から70キロ手前の桑名にあるということを知って、初めてふに落ちたところがあります。そのようなシンボリックな町であり神社が、この宇都宮大明神になろうかと思えます。

そろそろ時間のようですので、おわりにに移ります。では家康はということです。きょうお話ししたのは、まず前半では、日光山は家康以前、どのような位置付けを持った霊場だったかということでした。後半お話ししたのは、一方の宇都宮はどのような場所かということで、それぞれ天下取りを狙うような武将たちにとっての聖地でした。

それには理由があって、特に秀吉は源頼朝を強く意識していました。自分が戦いに勝った時には、彼はパフォーマーなのでいろいろと宣伝をするわけです。例えば柴田勝家を破った賤ヶ岳しずがたけの戦いの時には、自分の大勝利は頼朝以来ですなどと。頼朝以来の大勝利を自分はやったなどと周りには言うわけです。頼朝の事績には詳しい秀吉ですので、宇都宮大明神は頼朝が詣でて東北地方を治めた由緒正しい神社なので、会津に行く予定だけれども、宇都宮までは必ずと秀吉が言ったのは、やはり宇都宮への執着、そして宇都宮が武将たちにとっての聖地としての位置付けがそうさせたところがあると思えます。

ただ残念なのは、7月25日に頼朝は宇都宮に到着しましたが、秀吉は7月25日には結城に行っていて、翌26日に来ています。これも頼朝を尊重して1日遅れで来たのであればいいのですが、日にちには1日のずれがあります。ですが、頼朝から実に401年ぶりに天下人が宇都宮にやってきて、当然宇都宮大明神にも詣でたのだと思います。

そのような秀吉に対して、家康です。家康は、宇都宮までは確かに来ています。その宇都宮来訪ですが、家康の宇都宮デビューは、秀吉に呼びつけられてやって来た1590年7月29日です。先述したように宇都宮城で秀吉と会談して、養子問題では秀康を結城氏の養子にするのは問題ないことや、家康の領国支配についても、北条氏の領域をほぼ彼が引き継いでいるので、重臣クラスの配置場所について秀吉の指示を受けています。

その後、家康は江戸に戻ります。ちょうど8月1日に江戸に戻ったということで、江戸開府は8月1日とされています。それ以前から家康は江戸に滞在していたのですが、この八朔——8月1日の江戸打ち入りが、のちのちまで江戸のスタート地点に位置付けられます。

秀吉の宇都宮・会津仕置ののち、残念ながら東北地方は秀吉の思惑どおりには治まらず、さっそく反乱が起こります。その反乱鎮圧に奔走したのが、秀吉のおい秀次と家康でした。彼ら2人が鎮圧軍の総大将になります。そんな関係で家康は今の宮城県北部まで実際に下向しています。家康が東北に向かったのが7月下旬ごろ、また反乱を鎮圧して東北から戻ったのが10月下旬ごろです。その往復時にも当然宇都宮に宿泊したことでしょう。

そして最終的に家康にとってキーポイントになるのが、1600年の関ヶ原合戦でした。その関ヶ原合戦の前哨戦として、まずは上杉景勝攻め。ちなみに、400年以上にわたってここ宇都宮を治めていた宇都宮氏という大名、宇都宮国綱という武将が秀吉によって改易にされた後、蒲生氏郷の息子秀行が宇都宮にやって来ます。18万石と、ほぼ土佐一国に当たる領地が当時の宇都宮領だっ

たわけで、蒲生秀行が宇都宮領を引き継ぎました。蒲生氏はもともと近江日野出身ですので、蒲生氏が城下町を営んだところには日野商人が移り住んでいます。それが日野町で、宇都宮にも会津にも日野町が形成されました。したがって、宇都宮は蒲生氏ともつながりが深いわけです。

話を戻しますと、蒲生氏郷が亡くなった後、息子の秀行では会津 100 万石は治められないということで、あらたに上杉景勝が抜擢されます。その上杉がどうやら家康に敵対しようとしているらしいということで、1600 年に会津討伐がまず計画されました。その際の前線基地が宇都宮城です。宇都宮城には徳川秀忠が江戸からやってきますし、結城秀康も来ています。家康の息子たち 2 人がそろって宇都宮城を本営にしています。会津の上杉景勝を攻めるには、やはり宇都宮が重要だったということです。

すでにご覧いただいたとおり会津攻めには 2 ルートがあって、そのパターンは幕末の戊辰戦争でも繰り返されます。具体的には本営の宇都宮から白河経由で会津に向かう東ルートと、南会津を経由する西ルートを使うことがこの時にも予定されていました。

総大将である家康本人も宇都宮に向かっていたわけですが、石田三成の挙兵を聞いて宇都宮に行く途中の小山で評定を開催することになります（小山評定）。そして、小山評定後に家康は西上します。ただし、私的には家康が宇都宮まで来た可能性も十分に考えられると思っています。この点は確たる記録には残されていませんが、何せ宇都宮は武将たちの聖地です。くわえて家康には小山に滞在したことになっている空白の数日間があります。そのうえ、つぎにご紹介するような証拠が宇都宮二荒山神社の本殿に残されています。本殿の擬宝珠 4 本に刻まれた銘文です。

宇都宮に歴史的な建造物が残っていないのは、戊辰戦争と宇都宮大空襲のせいだとよく言われます。実はそれだけではありません。1585 年、天正 13 年にも北条氏直によって宇都宮が焼き討ちされました。その際に宇都宮大明神と周辺は北条氏の手で特に念入りに焼き払われてしまいました。ですから、家康が何度か宇都宮を訪れた時には宇都宮大明神の社殿はまだ仮殿の状態でした。それを家康が 1605 年に再建してくれたのです。

家康の手で新造された宇都宮大明神の本殿には、それを記念する擬宝珠が付けられました。その擬宝珠には「下野国河内郡宇都宮大明神御建立 征夷大將軍源家康」と刻まれています。ところが、銘文が刻まれた 1605 年 7 月の時点での征夷大將軍は正確には秀忠で、すでに同年 4 月に家康は將軍を辞任して秀忠に將軍職を譲っていました。にもかかわらず、擬宝珠の銘文には「前」や「元」征夷大將軍の文字はありません。これはいったいどういうことでしょうか？

察しのよい皆さんならおわかりのことと思います。征夷大將軍の地位は宇都宮大明神のご利益で実現したものである以上、そのお礼として新造された本殿の擬宝珠には「征夷大將軍源家康」と刻銘するのが当たり前で、そこに「前」や「元」の文字は不要だった、ということではないでしょうか。

つまり、小山評定の後、家康本人はお忍びで宇都宮を訪れて以後の作戦計画を配下の武将たちと協議する一方で、靈験あらたかな宇都宮大明神に戦勝祈願を行った。その後、家康は関が原合戦に勝利して天下人の地位を確立。そのお礼として、家康は宇都宮大明神の社殿を再建したほか、大明神領として 1,500 石もの所領を寄進しています。この破格ともいえる家康の厚遇の背景に、

1600年の家康の戦勝祈願があったと私は考えます。

かつて源頼朝が奥州藤原氏征討を宇都宮大明神に祈願し、そのお礼参りをきちんと果たしたように、家康の場合もまた戦勝祈願成就のお礼として宇都宮大明神の再建を果たしたということになります。そろそろ時間のようなのです。日光に葬られた将軍家康は、もともと宇都宮と深いつながりを持っていて、だからこそ一周忌の後は日光山に小さき堂を建て、われを勧請せよ、関東の鎮守とならんと遺言したというお話でした。それでは時間のようなのですので、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

2025.5.12

宇都宮短期大学  
江田郁夫

### 天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？

はじめに一日光東照宮と徳川家康 (1542 ~ 1616) —

① **天下人家康死す**  
・最後の鷹狩中に (1616年1月21日) 田中城 (静岡県藤枝市) で発病⇒1月25日に駿府城 (静岡県静岡市) に戻り、4月17日午前10時ごろ死去 (75歳)

② **家康の遺言⇒本多正純 (のち宇都宮藩主となり、城と城下を拡充する、1565 ~ 1637)・南光坊天海 (? ~ 1643)・金地院崇伝 (1569 ~ 1633)**  
・i 御体を久能 (山) へ納め、ii 御葬礼をば増上寺 (東京都港区・浄土宗鎮西派本山) に

て申し付け、iii 御位牌をば三河の大樹寺 (愛知県岡崎市、松平氏の菩提寺) に立て、iv 一周忌も過ぎ候ひて以後、日光山に小さき堂をたて勧請 (神仏の霊を移し祀ること) し候へ⇒八州の鎮守 (その土地・住民を災害から守る神、本光国師日記=崇伝の日記) とならん

③ **東照大権現の神号授与 (1617年2月21日) ⇒日光東照社建立 (同年4月) ⇒3代将軍家光 (1604 ~ 51) 家康の21回忌を期して霊廟を新造 (1636年、寛永の大造替) ⇒宮号許可=東照宮 (1645)**

・徳川將軍家が家康の命日を期して日光に参詣 (日光社参) 全19回  
・朝廷からの使節 (例幣使) を毎年派遣  
・朝鮮通信使や琉球使節も参詣  
⇒日光東照宮は日本の総鎮守に ※一時は全国に700社が勧請される

### 1 家康はなぜ日光に葬られたのか？—東照宮以前の下野国日光山—

① **日光とは**  
・日光山=二荒山←補陀落山 (観音の住みか) で南海のななたにあると信じられた山) の転訛  
・766年に下野国芳賀郡出身の僧侶勝道が、日光山内に千手観音を祀る四本龍寺 (現輪王寺) を創建⇒782年勝道が二荒山 (黒髪山とも。男体山) に登頂し、中禅寺湖畔に神宮寺 (現中禅寺) を創建

### ② 神仏習合の霊場

・日光三所権現信仰←熊野三山信仰 (本宮・新宮・那智社)  
男体山・女峰山・太郎山=男体権現・女体権現・太郎権現←千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音 (本地仏)  
・本宮・新宮 (現二荒山神社)・滝尾神社

### ③ 鎌倉殿・源頼朝 (1147 ~ 99) の崇敬

・父義朝 (1123 ~ 60)、日光山造営の功績によって下野守再任 (1156年)

(1ページ)

・「日光山三昧田」15町を寄進 (1186年)  
・勝長寿院 (神奈川県鎌倉市雪ノ下、義朝菩提寺として頼朝が創建) の別当 (事務統括者) が、鎌倉中期以降に日光山別当 (光明院住職) を兼務  
⇒鎌倉幕府・室町幕府と日光山との緊密な関係が継続

### ④ 日光山は「関左の日枝山 (比叡山)」

・比叡山—古くからの山岳信仰の対象。最澄によって天台宗の根本道場となり、延暦寺の勅号  
・常行三昧堂—平安初期に仁仁が中国五台山にならって比叡山に建て、阿弥陀仏を本尊として念仏三昧を修する道場。1145年に日光山にも建立され、以後重要な法会 (修正会・大念仏会) が修された。関東の天台系寺院の中心的存在となる⇒近世には東叡山寛永寺が関東総本山に (住職は天台座主・日光門主をかねる=輪王寺宮門跡)

### 2 天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？

① **豊臣秀吉 (1537 ~ 98) の天下統一と宇都宮・会津仕置 (1590年)**  
小田原城落城 (北条氏滅亡) →鎌倉鶴岡八幡宮参詣→江戸→岩付→結城→宇都宮仕置 (7/26 ~ 8/4) →大田原→白河→長沼→中地→会津仕置 (8/9 ~ 12) →田島→藤原 (鬼怒川) →宇都宮 (8/14 ~ 15) →古河→岩付→府中→小田原  
⇒秀吉は宇都宮と会津で関東・東北地方の戦後処理 (仕置) を実施し、天下統一を成し遂げる

### ② なぜ宇都宮仕置なのか？

⇒宇都宮大明神 (現二荒山神社) への戦勝祈願をおこなった武将たち (宇都宮大明神代々奇瑞之事)  
i 藤原秀郷の平将門征討  
ii 源義家 (頼朝の先祖) の安倍貞任征討 (前九年合戦)  
iii 源頼朝の奥州藤原氏征討 (奥州合戦) ⇒1189年7/25頼朝、宇都宮大明神に奉幣し、戦勝を祈願。10/19祈願成就の報賽として同社に莊園等を寄進する  
iv モンゴル征討 (文永・弘安の役)  
・宇都宮大明神は日光三所権現のうち、太郎権現 (本地仏馬頭観音) が遷座  
⇒宇都宮大明神は日光山の里宮 (別宮)

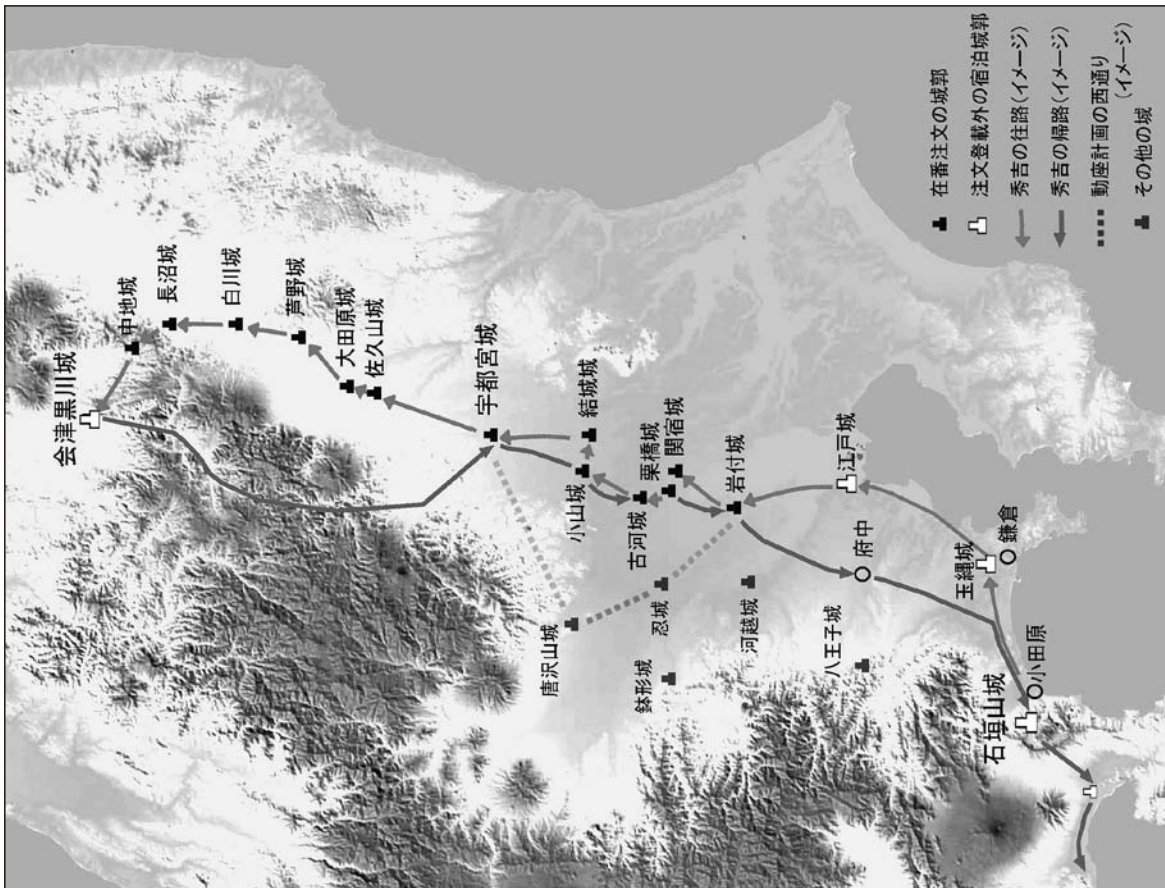
### おわりに

### ① 徳川家康の宇都宮来訪

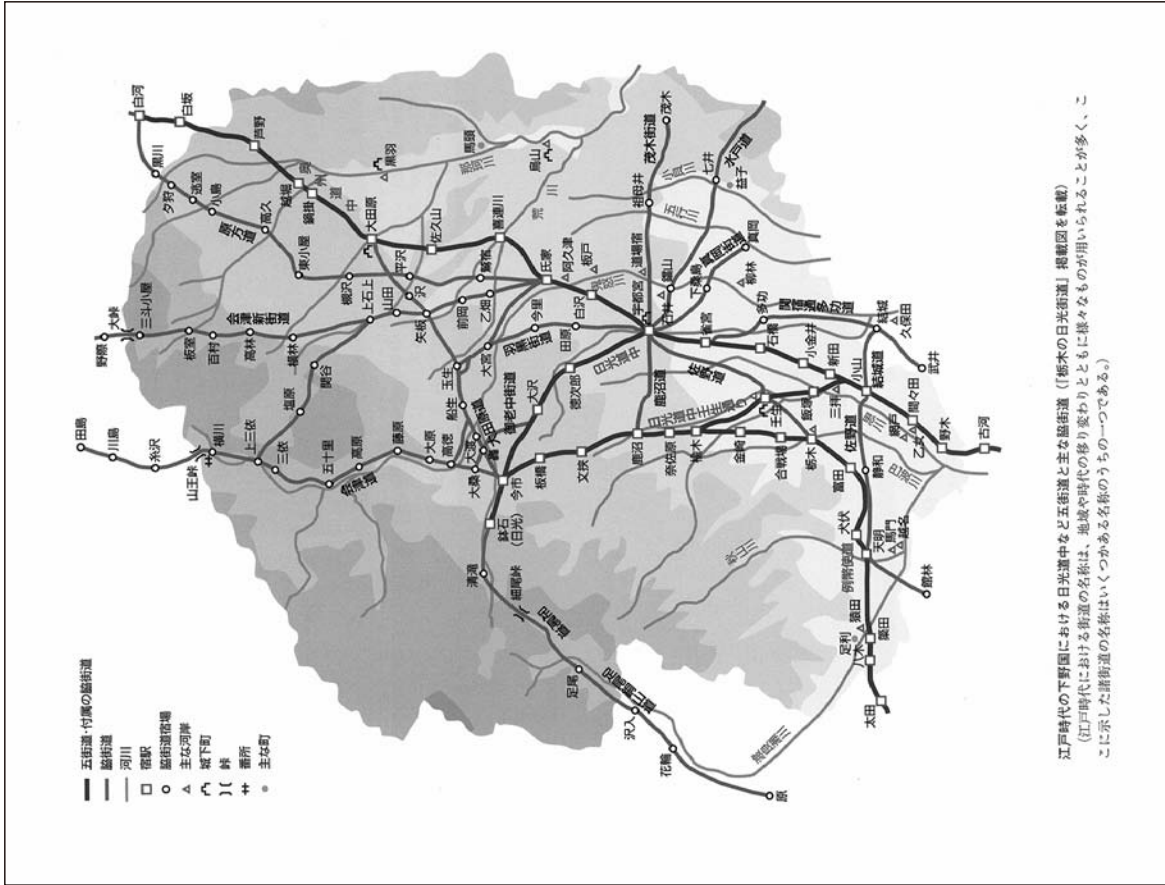
i 1590年7月29日 宇都宮城で豊臣秀吉と会谈⇒江戸に戻る (8/1八朔の打ち入り)  
ii 1591年7月下旬・10月下旬 奥羽再仕置のため東北へ出陣し、その往復時に宇都宮に宿泊  
iii 1600年7月末~8月初旬 小山で石田三成方との対決のために軍勢の西上を決定 (小山評定)。その後、宇都宮大明神に戦勝を祈願する

### ② 関ヶ原合戦勝利後、宇都宮大明神の社殿を再建 (1605年7月吉日) =祈願成就の報賽

(2ページ)



(3 ページ)



江戸時代の下野国における日光街道と主な脇街道 (「栃木の日光街道」掲載図を転載)  
 (江戸時代における街道の名称は、地域や時代の移り変わりとともに様々なものが用いられることが多く、こ  
 こに示した諸街道の名称はいくつかある名称のうちの一つである。)

(4 ページ)

## パネルディスカッション

# 「とちぎ SHOGUN 物語」 シンポジウム



### パネリスト

馬場 将広 氏（宇都宮市総合政策部（前東京サテライトオフィス所長））

鈴木 孝美 氏（宇都宮観光コンベンション協会常務理事）

落合 正浩 氏（壬生町東京サテライトオフィス所長）

藤栄友里絵 氏（壬生町歴史民俗資料館学芸員）

江田 郁夫 氏（宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事）

### 司 会

須賀 英之 （宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長）

### ■須賀

これからパネルディスカッションです。宇都宮と江戸、日光の歴史的な背景のご説明を江田先生からいただきました。こういった歴史を再発見して、地域連携して、街道沿いの観光や産業、地域活性化をどう行っていくかというアイデアを募って、圏央まちづくり協議会の「とちぎ SHOGUN 物語」の施策を考えていきたいと思います。

壬生町の歴史民俗資料館学芸員の藤栄友里絵さまです。

宇都宮市総合政策部の振興担当副参事の馬場将広さまです。

宇都宮観光コンベンション協会の常務理事の鈴木孝美さまです。

壬生町職員で東京サテライトオフィスに勤めていらっしゃる落合正浩



須 賀

さまです。

宇都宮短期大学人間福祉学科教授江田郁夫先生もコメンテーターとしてお願いします。私は宇都宮共和大学学長、宇都宮まちづくり推進機構理事長、「よみがえれ！宇都宮城」市民の会会長の須賀です。地域の歴史を考え、またそれを後世の子どもたちに伝えることを願っています。

それでは最初に基調講演の感想や、とちぎ SHOGUN 物語の意義について、所感を述べていただければと思います。

## ■落合氏

ありがとうございます。先ほどの基調講演の前に、少しみんなで前室で打ち合わせのような意見交換をした時に、東京事務所にいるのですが、東京に行ってどのように壬生町を知ってもらったのかと言われた時に、壬生町の場所や何かを話しても、東京は全国から色々な方が集まっているような場所なので、全く分かってもらえません。

たまたまですが、私が東京に行く前に日光の東照宮にお参りに行った時に、二荒山神社でおみくじを引きました。平らという、「平」というおみくじでした。「平というおみくじを引いたことがある人はいますか?」、1人ですね。実は平というおみくじが出る確率はそもそも2%で、神社仏閣にはなかなか入っていないです。たまたま引いた、この話で自己PRをさせてもらって、貴重なおみくじを引くために、ぜひ日光に行ってほしいですと。そして興味があったら壬生に寄ってほしいという話をしてから、このような基調講演の場で壬生町のお話をします。ちなみにですが、平のおみくじの運勢は吉と凶の間ということで、あまりよくないというオチがあります。ネタとしては、全国の人には大体おみくじを引いたことがあるので、話を聞いてもらうためのフックをかけるには、とても良い話です。東京事務所4年間、この話をさせてもらってから、少し壬生に興味を持ってもらって話をしてしています。

説明するのを忘れてしまうところだったのですが、今、手前にかんぴょうの実をお持ちしました。なかなか壬生を知ってもらえないので、栃木県というと、やはりいちごなので、いちごをPRしたいというところではあったのですが、国産の98%以上が栃木県という、断突1位の野菜がかんぴょうです。そのかんぴょうの種を栃木県に持ち込んだのが、壬生のお殿様です。ということで、かんぴょう巻きを配ったり、かんぴょうの説明をしたりしながら、少し胃袋もつかむというような仕事をしています。

今日の講演を聞かせてもらった感想ですが、本当に日光街道や例幣使街道、日光道中、壬生通りがあったりなど、非常に日光と東京には関係があります。さらに今回LRTがいよいよ西側に延伸されるということで、新たな交通環境が整います。昔の水運から今の陸運に変わった時に、いろいろな文化や人の流れが変わったところがあるので、今回こういった機会は、非常にチャンスだと思って、圏央まちづくり協議会さんのこのような講演に参加したところがあります。今日は壬生しか参加していませんが、ぜひこの熱量を高めて取り組みを盛り上げて行ければと思っています。

## ■須賀

SHOGUN 物語のパンフレットにも、これはかんぴょうですね。

## ■落合氏

そうです。いちごと並んで隣にかんぴょうの畑が出ています。見逃さないでぜひ見てください。かんぴょうは、断突1位です。

## ■須賀

ビジネスのコンベンションにも、こういった歴史を活かして、いかにお客さまをまた市内に、あるいは日光や周辺の観光地に呼び込むかが、これからの課題かと思います。

## ■鈴木氏

ありがとうございます。まず今日の先ほどの江田先生のお話をお聞きした感想から申し上げます。我々はこの二荒山神社はかなりすごいと、昔からやはり武将の方が戦勝祈願に來られていたと、うすうすは聞いていましたが、今日あらためて、さらに本当にビッグネームのスーパースターの武将たちに聖地として崇められていたと知りました。やはりこれは観光もそうですし、今力を入れている MICE は、ここでもやはり使わない手はないと考えています。ですがやはり先ほど聞いた感じだと、難しくてなかなか腑に落ちないというか、非常にそれが最初の感想です。

ここをいかに、例えば小学生でも分かるように、あるいは、この二荒山がどれだけすごいかをいかに分かりやすく伝えられるかです。その辺ができると、より国内の観光客、さらにインバウンド観光客の呼び込みにもつながっていくのかなという感じで、お話を聞きました。

それからこちらの SHOGUN 物語の意義に関する考えですが、こちらの SHOGUN 物語は、やはりこの歴史街道を基軸にして地域間や自治体間で連携しながら、それぞれの地域資源を活かして交流人口をまず呼び込みます。それによって地域活性化、地域経済の活性化を行っていくということです。

これからの時代は、やはりこの連携や共創がキーワードになってくると思います。その意味で、この徳川時代にフォーカスした歴史街道の物語を再興しようというのは、観光的な視点で見ると、いわゆる江戸——東京から、ずっと富士山を通して名古屋、京都、大阪というゴールデンルートがありますが、またそれとは違った、何か新たな誘客ルートになっていく可能性を秘めているのではないかと思います。そのためには、やはりこの各街道沿いの地域が、同じ思い、熱量でしっかりと取り組んでいくことと、まだまだ多分我々が知らない、新たな発見や発掘ができそうな感じがするので、そういったところをしっかりと磨き上げていくことが非常に重要かと思います。

多分そのようなことを、各地域、各自治体に行っていただきつつ、点ができればそれを結んで線にして、さらに面にしていきます。そうすると非常に魅力のあるエリア、あるいは軸になっていくでしょう。逆にこういったことを行うことで、さらなる交流人口の増加につながるのかなという感じで聞いていました。

## ■須賀

江田先生は市民の会の理事でもあります。二荒山神社と宇都宮城の関係についてご説明をいただけますか。

## ■江田氏

そもそも宇都宮とは何かということかと思えます。宇都宮はもともと神社の名前なのですが、東北地方に向かう時に必ず通るルート上にあるので、門前町であり、かつ宿場町にもなっています。その宇都宮という地域を、平安時代から江戸時代になるまでの約400年間治めたのは、藤原摂関家の末裔を称する武士で、それが宇都宮氏を名乗っています。つまり、宇都宮大明神の神官と武士を兼ねたわけです。

宇都宮城に行かれた方は分かると思いますが、かつて宇都宮大明神と呼ばれていた現在の二荒山神社は、丘陵の一番端にあります。そこから南に真っすぐ下っていった丘陵の先端部分に、宇都宮城があります。最終的に江戸時代になると、神社と城はセットとして機能しなくなりますが、それ以前は宇都宮城の城主は宇都宮大明神の神官でもあったので、二荒山神社と宇都宮城の本丸を結んだ現在の「みはし通り」が、両者を結びつける重要な交通路として約400年間機能していたこととなります。

## ■須賀

馬場さんは東京にもおられましたか、東京から見た宇都宮の感想があればお願いします。

## ■馬場氏

あらためて、宇都宮市総合政策部の馬場です。3月まで虎ノ門にある東京オフィスに勤めており、4月から現職です。

今日の感想は、キーワードとしては、徳川幕府という歴史軸をストーリーとして横展開していくところが、やはり今後の可能性を秘めていると思います。自治体はやはり横の連携が結構苦手です。例えば歴史のことを考えてみると、多分宇都宮城と言った時に、初代の藤原宗円からどんどん宇都宮氏をたどって行って、その後、先ほど江田先生からあったような浅野長政などのほうに行って、最後の47代の戸田忠友に行ったりということで、結構下に掘っていくことは得意です。ですがそれを横にどのようにつなげて、観光などにつなげていくかは、やはり少し苦手です。そのアイデアとして、この徳川幕府や徳川家康、日光をフックにするのは、面白いと思って伺っていました。

つないでいく時に、やはり重要になるのは、日光、日光東照宮になると思いますが、先ほどあったインバウンドという視点で見ると、私がユネスコ世界遺産のホームページを英語で見た時に、徳川という言葉は2回しか出てきません。外国人から見ると、多分日光や日光東照宮は自然——nature や、やはり宗教——religious、神道、仏教という形での神秘性——spiritual というような言葉が、ユネスコのホームページには出ています。

鈴木常務からあったように、どのように分かりやすく伝えていくかという中では、インバウンドには、今のところ徳川幕府、徳川家康については、なかなかイコール日光、日光東照宮には至っていません。その認知度を高めてどのようにこれを横展開していくかは、今後の可能性でもありますし、チャレンジだとも思って聞いていました。

せっかくこのような江戸、宇都宮、日光、そして壬生や鹿沼など、いろいろなところがあると思いますが、それを横でどのように結んでいくかを、今回キックオフということなので、皆さんで知恵を出して考えていって、先ほどの、点を線にして面にしていくことができたらと思って、聞いていました。

## ■須賀

では、具体的に協議会として何を行っていけばいいかということで、一つはとちぎ SHOGUN 物語歴史街道観光周遊マップについて、国内向け、インバウンド向けに、ホームページや SNS で発信を行いたいという話が見さんからありました。こういった街道沿いの自治体と連携して、観光コンベンションや、広域で連携したイベントを行っていくということです。

とちぎ SHOGUN 物語について、歴史的な調査研究を、もっと子どもたちにも分かりやすく発信していけば良いのではないかと、統一のロゴを作ったら良いのではないかと。このようなことについてパネラーの方からもご意見を頂きたいです。まず藤栄さんから、今日は資料の提供もいただいているので、壬生で今までどのような取り組みをされているのか、ご紹介いただけますか。

## ■藤栄氏

壬生町をご存じの方、壬生町からどのようなことを思い浮かべるかを想像していただきたいです。最近だと、コストコや獨協大学、おもちゃの町だったり、北関東の自動車道を挟んで北側のエリアをイメージされる方が多いですが、それよりも南側、旧壬生城下の町には、とても古い重みのある歴史が残っていると感じています。

本日お配りした壬生の歩みと文化、この年表の裏面に、壬生町に関係する郷土の偉人をご紹介します。日光との関連が深い方々もいっぱいおり、壬生と日光のつながりで言うと、日光東照社を造営するに当たって、その時の副総督、副監督を務めたのが壬生の当時のお殿様、日根野氏です。また日光社参の際、将軍がお泊まりになるお城が壬生城であったということで、壬生も宇都宮市さんに負けなくらい、日光とのつながりがあるのではないかと考えています。ただ一方で、こうした壬生の魅力的な歴史を、町民の方、また町外の方がどれくらいご存じかという、少し不安な面もあります。

歴史民俗資料館、歴史の面で言うと、この郷土の偉人顕彰事業として、年に1回壬生の偉人をテーマにした企画展を開催しています。こちらの実行委員会には町の内部だけではなく、町民の方と一緒に、このような方がいるのでどのようにPRしたらいいかを考えながら毎年行っています。

本日の江田先生の講演にもあったとおり、歴史は単発ではなく、家康の前から日光との関わり

があったように、壬生町の歴史も町の中だけで留めておくのではなく、近隣の市町さんなどと共有しながらどのように発信していくかが、今の課題ではないかと感じています。

## ■須賀

壬生町ではお殿様料理やお姫様料理を作っていましたよね。落合さんもいいですか。

## ■落合氏

壬生町で私は数年前まで観光を担当していました。壬生町に観光に来てもらっても、壬生には歴史があるのになかなか知ってもらえませんでした。やはり伝える人を増やさなければということで、壬生町の観光ボランティアを立ち上げました。30人ほどで、町内の観光案内を行ったところ、年間で1,000人が壬生に来るようになりました。来た方の大体3割から4割は、意外なことにも、町内の方でした。町民の方も壬生の歴史を知らなくて、知ってもらったことによって、いろいろな発展というか、壬生への気付きというか、やはり住んでよかったという誇りが得られたということがありました。

また、1,000人ぐらい来るようになって、経済的なことを言うと、何とかして地元にお金を落としてほしいという考えがあり、その時に何か名物料理を作れないかというところで、資料館に行ったら、壬生城のお殿様が1カ月間食べていた食の料理帳が見つかりました。ではその料理帳に基づき再現しようと始まったのが、壬生お殿様料理プロジェクトです。

壬生お殿様料理プロジェクトも、江戸時代の当時の料理をそのまま再現すると、見つかった料理帳が平日の料理だったので、非常に質素なものに仕上がってしまいます。観光的に、現代風に、そして、今、来るお客さまをお殿様に見立てて作ろうと始まったのが壬生お殿様料理です。各店舗でいろいろなアイデアを出して競っていただいたところが良かったと思います。

壬生のお殿様料理の最初は、和食店だけが参加したのですが、どうしても和食店だけだと、だんだん広がりも狭くなってしまうので、その2年後ぐらいですが、壬生お殿様フレンチということで、フランス料理屋さんが入ってくださいました。次の展開としては、女性向けに、ヘルシーだったり、地元の食材をふんだんに使って、壬生お姫様料理というものを今展開しています。次は壬生若ちゃま料理なんていうアイデアもあり、やはり料理店さんも楽しんで参加するというか、あそこがこうしたら自分はこうするというような仕掛けが、非常にうまくいったように思います。テレビなどのメディアにも取材していただきました。壬生のお殿様料理を食べてから日光に行くようなツアーも来ているので、そういったところを今度のLRTなどと連携をしながらいいですか。広がりというか、今までだったら、餃子を食べたらそのまま新幹線に乗って帰ったかもしれませんが、東武線に乗って壬生に来て、おもちゃ博物館に行こうかなど、今までにない組み合わせができれば良いと思います。お殿様料理からの発展ですが、そのような気持ちがあります。

## ■須賀

本校調理科でも、数年前から吉宗公<sup>べんとう</sup>辯當をフタバ食品さんに作っていただいています。東照宮

文書の中には、吉宗が日光社参の時に宇都宮城に来てどのような料理を召し上がったかという、材料と料理が書いてあります。レシピは分かりません。どのように作ったか分からないし、味の素もコショウもないのですが、何ととっても高校生たちがそのようなものに興味を持ってくれたことはよかったと思います。

このようなことをどのようにPRして、若い人たち、あるいは他の世代にも関心を持ってもらうかという観点ではいかがですか。

#### ■江田氏

昨今、お城ブームという言葉をよく聞くようになったと思いますし、また街道歩きもなかなかの人気とお聞きします。街道歩きの関連本もいろいろな出版社から刊行されています。それらと食を組み合わせるといのは、実際に私が体験するとしても楽しいのかなという気がしています。やはり現地に行って歩いてみる、見てみると、新たな発見もあろうかと思しますので、それにいろいろなプラスアルファがあるとさらに喜んでもらえるのかなと思います。着付けや、その写真を撮るといのも京都や金沢などの観光地では人気のようなので、そのようなプラスアルファを宇都宮でどう加味していくかが重要なポイントかなと思いました。

#### ■須賀

鈴木常務、何かアドバイスはありますか。

#### ■鈴木氏

我々観光コンベンションとしても、やはりいかに宇都宮に来ていただいて、楽しんでもらえるか、あるいは長時間滞在していただけるか、そのようなところで、いろいろな試行錯誤をしているところです。このSHOGUN 物語の目的、インバウンドを含めて、そういった方々にどんどん宇都宮や栃木に来ていただくということだと思います。

インバウンドでお話しします。まず宇都宮のインバウンドの現状です。これは2023年度のデータになりますが、おでかけウォッチャーという、GPSでデータが取れるものがあります。そちらのデータだと、宇都宮市には21万人の外国の方がみえています。トップ5はやはり韓国、台湾、アメリカ、タイ、スペインです。行き先として宇都宮駅周辺が多いことと、ほとんどが駅を出て周遊をしていない現状があります。令和元年度に周遊分析調査を市で行っていますが、訪日、いわゆるインバウンドのうち、75.4%が宇都宮以外に通過をしまっている状況がありました。かろうじて、残りの24.6%は駅に滞在しているのですが、駅からほとんど外に出ていない状況でした。

これは何とかしないといけないということで、昨年度から宇都宮の、餃子、カクテルや日本酒などを駅の改札の中で味わっていただきながら、外でジャズを演奏して、改札の外に出ていただけるようなことを、試行錯誤しました。アンケートも取りました。ですがやはり、インバウンドのお客さんは目的を持って東京から来ているので、途中で改札を出ることはなかなか難しいです。

旅前にいかに宇都宮や栃木県の情報を提供できるかが、インバウンド、観光客が増えていくキーになるかと思います。

特にインバウンド関係は、ジャパンプランド調査や県の調査を見ると、食、グルメへの関心、期待が最も高くなっています。やはり日本国内の旅先選びの上位には食が入っています。県のインバウンド調査でも、宇都宮の餃子への関心は上位にあります。この食と体験、やはり食をいかに使うかが、呼び込む一つのキーになるかなということです。

先ほど餃子会の鈴木さんの話もありましたが、鈴木さんやJ Rの方、若山さん、あるいは外国の方も含めてワークショップなどを行いながら、インバウンド戦略もまとめているところです。

まず宇都宮を知ってもらうことは大切です。外国の方も餃子は知っていて、食べたいという方が多いです。ただし宇都宮が餃子の町というのは、ほとんどの方が残念ながら知らない状況なので、餃子をフックにまずは宇都宮を知ってもらって、そして来てもらいながら、宇都宮に来るとその他にもいろいろな地域資源があることに気付いてもらう、体験してもらう形で進めていけると良いのかなと考えています。

それから MICE です。特に MICE でも、外国の方にはかなり来ていただいております。令和6年度は350人超の外国の方が MICE で宇都宮に訪れています。この MICE に来る外国の方も重要なターゲットと考えています。この MICE の空き時間やアフター MICE の時間に、いかに楽しんでいただけるかということで、飲食関係の情報や観光の情報をいかに提供できるか、仕組みづくりをいろいろ検討しているところです。

## ■須賀

ライトキューブで国際的な会議などがあった後に、篠原家住宅でお茶ができるような体験型で、しかも歴史を感じられるような。ライトキューブの会議室の中では駄目で、しつらえも必要です。馬場さんは東京におられて、外国人の栃木県に関する関心をどのように捉えていますか。

## ■馬場氏

とちぎ SHOGUN 物語ということで、観光という視点から見て、徳川幕府や将軍や世界遺産に目を当てた時に、目的地が先に決まっていますと。日本に日本遺産は26あります。

そのうち、東京周辺の世界遺産は幾つあるかということ、四つです。その四つがどこかということ、富士山はもう日本のシンボルですから当然ですが、他に日光東照宮と、ル・コルビジエの西洋建築と、富岡製糸場です。外国の方にとって、東京から交通の便が良く、歴史の古い世界遺産は日光しかないと思います。

では、徳川とつながっている世界遺産には何があるかと考えると、日光東照宮と、京都の二条城だけです。徳川でつながってくる単独の世界遺産は、26ある中でもこの一つだけです。これは強みかと思っています。二つ目は、この徳川幕府や徳川を英語で調べてみると、出てくるものは駿府城すんぶや二条城、岡崎城など。これらと日光を線や面で結んでいくところは、一つの強みになると思うので、これをどう活かしていくかが二つ目のチャレンジかと思っています。

三つ目は、圏央まちづくり協議会の会員さんにはグローバルな企業がたくさんいらっしゃるということは、海外にも工場や支社をお持ちだったり、また、海外から従業員の方が来られることも多いかと思います。そのような方を対象に、今後、英語のパンフレットを作られるということですが、ご協力いただいて配布したり、また、あまり日本ではインセンティブ旅行はありませんが、海外、東南アジアだとあるかと思います。グローバル企業のインセンティブ旅行に、このSHOGUN 物語を掛け合わせてもらうところにポテンシャルがあるかと感じました。

## ■須賀

フロアからもご意見を頂ければと思います。県立博物館の琴寄館長がいらしているので一言お願いします。

## ■琴寄氏

全体の感想をお話しします。江田先生のように、きちんと県内の歴史を分かって、それをひも解いてお話をしてくれる人はすごく大切だと、あらためて感じました。とちぎSHOGUN 物語の資料の中に、写真がいくつも載っているのですが、博物館蔵ということで、私は博物館にいるのに見たことがないものもあります。普段から展示しているものではなく、収蔵してあって、企画展の時に見せるものが結構あるので、やはり博物館や資料館でどのような資料を持っているか、それをどう活用していくかも、つながってくると思います。

馬場さんから、自治体は横の連携がなかなか不得手ということがありましたが、博物館も文化や歴史のお話で展開するだけでなく、今日のような観光や、壬生町は医療や薬なども持っていると思います。また観光を含め、福祉や他の産業など、さまざまな分野と歴史的なことをうまくつなげられると良いと思いました。

## ■須賀

マスコミから、ヤマゼンコミュニケーションズの野沢さん。

## ■野沢氏

栃ナビ！を運営しています。口コミサイトを運営している者として意見を述べます。

須賀先生がおっしゃった、高校生に吉宗辯當を作らせるというのは、もう自分ごとでしょう。きっとその高校生はいろいろ歴史を勉強したことと思います。関心も非常に高まったことでしょう。落合さんがおっしゃった、ボランティアの約1,000人のうち、町民が3～4割いらしたというお話もヒントかと思います。

やはり情報発信とはコストと比例するものです。情報発信をしたところで、それが文化として根付くか、評価されるかというとなかなか難しいと思います。やはり身近なところから、我々がみんなで体験して、愛して、それをムーブメントにしていこうという取り組みこそが、遠回りのような気はするけれども、実は一番近道ではないかと思います。

よくお話しするのは宇都宮カクテルです。息子や娘が20歳になったならば、お父さんがカクテルバーに連れて行って、最初のお酒デビューをさせるというのはどうでしょう。東京のテレビ局が、宇都宮にはそのような文化があるのですねと取材に来るくらい、徹底してそれをやります。実は自分の娘が20歳になった時に、それを実践して連れて行ってみたんです。思い出になったと思います。なかなか自前で若い人同士でカクテルバーというのは、敷居が高いでしょう。ですがそれを若いうちに1回体験させてあげる、そのような文化をつくってそれを広めます。これは一案です。

我々自身の体験をもって文化を定着させていく、広めていくということです。素晴らしいものがたくさんあります。インバウンドとなれば少し道のりはあろうかと思うけれども、その延長線上で道筋はあると思います。

### ■須賀

これからとちぎ SHOGUN 物語で、ロゴだけではなくてお土産になるようなもの、グッズなど、いろいろ作っていきたいと思うので、東武百貨店の社長だった佐瀬さんから、商品開発について。

### ■佐瀬氏

私も長年宇都宮に住んでいて、二荒山神社と日光の二荒山神社の関係は曖昧で、よく分かりませんでした。

このような話を、お子さんからお年寄りまで含めて、どこかで系統的に勉強できる場がこの街にあったら良いなと感じました。興味の度合いで、そこへ訪れる方はさまざまかと思います。ここに住んでいらっしゃる方もそうですし、来街者の方もそうだと思いますが、このような勉強ができる場をつくるのが大切ではないかと思いました。

それと、壬生町の年表を含めて、素晴らしい資料を今日見せていただきました。こういった発掘を宇都宮市ももっとしていくと、勉強の場、それから観光の目的としても役に立つかと思いました。太田胃散の製薬者が壬生町出身の方だと初めて知りました。

### ■須賀

宇都宮市の子ども科学館、壬生町のおもちゃミュージアムなどが連携を取って、この SHOGUN 物語の歴史街道の歴史を楽しく学ばせたり、興味関心を持たせるようなアイデアがあればお願いします。

### ■藤栄氏

資料館としても、お子さまに歴史を身近に感じていただけることは、うれしいことです。例えば夏に管内の小学生を古墳へ案内して、この古墳がなぜ壬生にあったのか、古墳ボランティアの方が小学生に説明する機会を設けました。また、論語教育を進めていて、町内の小学生から中学生まで、義務教育のうちに100編の中から18編を町で指定して、卒業までに暗唱できるように

教育委員会で進めています。

何でこのような教育を受けているのだろう、そこから深く入っていったら、壬生町にはこのような歴史があるから、自分たちはこのような勉強ができていますと。地元の歴史に、教育からお子さんを通してつなげて行っていただければ、資料館もうれしいです。

## ■須賀

登壇していただいた皆さま方から一言ずつ、圏央まちづくり協議会のとちぎ SHOGUN 物語に対する期待や要望、また本日の全体の感想など、自由にいただければと思います。

## ■江田氏

私は宇都宮育ちで、いわゆる「宮っ子」です。二条町という、かつての城下町の家臣団住宅地である一条、二条、三条、京都だと四<sup>しじょう</sup>条ですが、宇都宮では四<sup>よじょう</sup>条と言います。その二条町、現西一丁目育ちなので、ホームタウンという意識があります。

ホームタウンの伝統と誇りというか、そもそも宇都宮とは何なのでしょう。一<sup>いちのみや</sup>宮という地名は全国各地にあります。宇都宮はなぜ一宮ではなくて、宇都宮なのか、興味があります。愛着や興味関心がもてるかどうかは、大切なことではないかと思っています。

ご意見をいろいろお聞きして、熱量というご指摘もそうだと思います。生まれ育った人たちが自分の町にプライドを持てるかどうかはとても大切なことだと思います。これからもそれらの点を大事にしていきたいです。

## ■落合氏

とちぎ SHOGUN 物語という名前は素晴らしいし、名前負けしないのかな、とも思いますが、聞いて言い続けているうちになじんでくることもあります。とにかく参加して、興味が出たら、そこに行く。今日、話を聞いたら、壬生に行ってみようかな、壬生の観光ボランティアに話を聞いてみようかな、宇都宮に行って、少し歩いてみようかな、餃子を食べながらどこかで写真を撮ってこようかなというふうに、まず動きだすことが大切だと思います。

圏央まちづくり協議会に参加されている企業の皆さんは、その企業自体がブランドなので、そのような方たちが本気になって動くことが、人を巻き込んでいくのかなと思います。

私も観光担当の際に、フィルムコミッションとあって、撮影誘致をさせていただきました。県からこのような撮影があるのですが、どこか良い場所はないかということで、3年間、毎回、手を挙げたのですが、1回も採択されなくて、初めて決まったのがNHKの大河でした。それだけ手を挙げて、頑張っているんだからと、仕方がないから壬生でやろうかという流れがありました(笑)。

撮影ロケ地が決まって、夏に見に来た時に、草が生えてしまっていて、これでは撮影ができないと言われたのですが、親しくしてくださった制作の方が町内を巡ってくれて、ロケ撮影のできる場所を探してくれて、撮影できました。

SHOGUN 物語を上手くいくためには、とにかく熱量を上げて、参加している人たちが、SHOGUN 物語をとにかく面白くしよう、話を聞いて興味があったところに行ってみようということが良いのかなと思います。

宇都宮の歴史は、自分が実際に行ってみて思うことや感じることもありますし、そこに行っておいしいものも食べたいなと思いましたので、動こうかと思っています。

## ■鈴木氏

SHOGUN 物語のペーパーの真ん中に、具体的な施策等がいろいろ入っています。より魅力をアップしていくためには、ハードとソフトのバランスの取れた整備が必要かと思っています。インバウンド関係では、食や日本文化の体験のキーワードは外せないと思います。ぜひしっかり意識をしながらやっていくと良いかと思っています。

体験では、宇都宮城もあり、御橋通りなども整備するのであれば、時代劇ふうなコスプレをしながら闊歩できるようなことも必要でしょう。夜は、ジャズカクテルのクルージングツアーもありますが、ディープな泉町や江野町など、昔ながらのスナックなどの古きよき場所を巡るような旅もできると良いかと思っています。

個人的にすごくやりたいのですが、御橋通りの東側の、昔の御橋通りから今小路<sup>いまこうじ</sup>までの間に、昭和 30 年代には、仲見世から移ってきた飲食店がいっぱいありました。そういったところがまた復活すると、インバウンドだけではなくて、旅行者にとっても面白いかと思っています。

やはり食です。餃子もそうですが、宇都宮は、観光動態調査でも、市内の飲食店全般の味やジャンルの豊富さについては評価を受けています。これをうまく使っていくと、さらに魅力の味付けになっていくかと思っています。

そのためには、連携や共創がキーワードになってくると思います。同じような熱量、熱意を持って取り組んでいけば、SHOGUN 物語も新たな価値や魅力を生み出す原動力、エンジンになっていくかと思っています。

## ■馬場氏

歴史について言うと、宇都宮では小中学校で宇都宮学を 10 年以上前から行っていて、お子さんは宇都宮の由来や歴史を知っています。知らないのが、私たちのような 40、50 代かと思っています。宇都宮学は非常に勉強になりますので、ぜひその大人の方にも普及させていかなければと感じたところでは。

このとちぎ SHOGUN 物語をどのように広げていくか、行政だけでは限界があります。圏央まちづくり協議会のいろいろな企業が共創で行っていくことかなと思います。

スピードや、トライ・アンド・エラー、取りあえずまずはやってみて、そこから新しいものを見つけて次につなげていく行動力とスピードが、SHOGUN 物語を広げていくために重要なことであらためて感じたところでは。

## ■藤栄氏

この会に参加して、横のつながりを大切にして郷土の歴史を発信していく大切さを学びました。あらためて資料館、博物館の役割を考えると、こういった観光のチャンスを頂いた時に、その資源となる歴史の調査研究をしっかりと、広く地元の人やお子さまに教育、普及を徹底していくという、日頃からの活動があらためて大切だと感じました。資料館としても、壬生町という郷土の偉人をもっと発掘できるように仕事にまい進していきたいと感じました。

## ■須賀

今日は宇都宮市と壬生町の方でしたが、このリーフレットにある小山から始まって、東武沿線、JR沿線、鹿沼などの自治体も含めて地域が連携して、とちぎSHOGUN物語を盛り上げていければと思います。

今日のサブテーマは、LRT西側延伸で新たな価値あるまちづくりということで、観光振興をするためにも足が必要です。交通事業者の力も得て、LRTの東西基幹公共交通機関の整備も含めて、交通整備をぜひ発展させる。地域全体が元気になって、栃木の歴史を知って、誇りにしてもらえば良いなと思います。

LRTは、さらに東西基幹公共交通機関として機能すべきだと思います。私鉄のビジネスモデルは、阪急の小林<sup>いちぞう</sup>一三以来、国鉄と国鉄の駅を結ぶものだと思っています。大阪の梅田から宝塚を結んで、片側がターミナル、デパートで、宝塚歌劇があって、遊園地があって動物園があるということで、その沿線を開発していくということです。

大谷と芳賀を結ぶだけではなくて、将来的には真岡<sup>もおか</sup>鉄道、鹿沼を結んで、JR日光線もLRT化すれば、それぞれの地域に歩いて楽しい町ができます。これは五島慶太も、堤さんも、根津さんも同じ考え方だったと思います。

中尾常務が宇都宮を去ってしまうのは大変寂しいけれども、ぜひ中尾常務がつくられたともしびを、さらに燃え盛るようにして、栃木県内の交通ネットワークがより発展していくことが、地域の活性化にもつながるのではないかと思います。素晴らしいお話をいただいたパネラーや、基調講演をいただいた先生方にあらためて感謝を申し上げます。大きな拍手をお送りください。(拍手)

## ■進行

それでは当協議会代表の古池より、皆さまにお礼のあいさつをさせていただきます。

## ■古池

とちぎ圏央まちづくり協議会を代表して、まず皆さまに御礼を申し上げます。本日は多くの方々にご参加いただきましてどうもありがとうございました。ここにお集まりの皆さま方の中にはとちぎ圏央まちづくり協議会とは何なのかということを余りご存じない方もいらっしゃるのではないかと思います。とちぎ圏央まちづくり協議会は民間企業の交流連携を目的とする団体です。7

年前に LRT が東側にできることになった時に、その沿線にある企業を中心に LRT の活用を推進していこうという目的で作られました。始めた時には会員企業は 50 社でしたが、今は 120 社を超える規模になっています。本日の企画書にも書いてありますが、地域における企業の役割は重要だと思っています。多くの会員企業の皆さまと、行政や市民の皆さまと横のつながりをさらに進めていって、栃木のまちづくりを推進していきたいと思っておりますので、ぜひご支援をよろしくお願いいたします。

さて、これから LRT が西側に延伸します。これも長年の宇都宮市民の悲願だった J R 宇都宮駅と東武宇都宮線を LRT でつなぐというものです。

一つ気がかりなことがあります。幸いにして東側は工業団地への通勤、あるいは沿線の大学や高校への通学によって LRT の利用者が増えていますが、西側に延ばした時に本当に乗ってくれるのかということです。私が宇都宮に来て 40 年になりますが、昔の宇都宮は都心部がとてものにぎやかでした。オリオン通りの中心部辺りには、デパートが五つあった時代がありました。それがその後どんどん空洞化してしまって、シャッター通りになってしまいました。それをまた活性化するという意味での LRT の西側への延伸は大事だと思います。

そのためには、もっと魅力のある街にしていかなければならないと常に思っています。ホンダヒートというラグビーのプロチームが来年から宇都宮に来ますし、スポーツによるまちづくりも盛んに進めていきたいと思っています。

もう一つは歴史です。歴史や文化は非常に大事だと思います。江田先生からお聞きしたことは、良い勉強になりました。私が見ている限りでは、宇都宮はあまり歴史を重視してこなかった街ではないかと思っています。宇都宮は戊辰戦争と太平洋戦争時の空襲で灰燼に帰しました。そのような負の歴史の中で、これまで歴史とそれに伴う文化が継承されてこなかったのではないか。これから宇都宮が誇れる街として世の中から認められるためには、古くからあるものをうまく活用して、シビックプライドといいます。市民が自分の町に誇りを持つことが大事だと思っています。

私自身も宇都宮市と共に都市ブランドの推進に取り組んできました。私が胸に付けているバッジには、「住めば愉快だ宇都宮」とあります。このロゴによる宇都宮の P R は 10 年以上前に市と一緒に始めました。「○○○愉快だ宇都宮」というロゴが今や 1,500 以上市役所に登録されています。宇都宮の知名度も、LRT の成功を契機としてどんどん上がっていきつつあります。宇都宮が本当の意味で住めば愉快な街になっていくことが重要であると思います。とちぎ SHOGUN 物語などを進めていくことによって、ますます街の活性化が進むことを期待しています。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

## 特 集 2

# とちぎ圏央まちづくり協議会 第2回「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム ～江戸から日光へ 広域連携による歴史軸の物語～

…… 要 綱 ……

1. 日 時 2026年2月27日(金) 14:30～17:00

2. 会 場 宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室

3. 次 第

(1) 基調講演①「神君家康公 日光を選ぶ」

日光東照宮特別顧問・元禰宜

高藤 晴俊 氏

基調講演②「歴史資源を生かした広域観光振興」

日光市長

瀬高 哲雄 氏

(2) パネルディスカッション

パネリスト

(前 掲)

瀬高 哲雄 氏

鹿沼市市長

松井 正一 氏

宇都宮市総合政策部振興担当副参事

馬場 将広 氏

栃木市東京サテライトオフィス所長

野尻 博之 氏

小山市総合政策部総合政策課 連携・協働調整担当

菅沼美智子 氏

小山市立博物館学芸員

尾上 仁美 氏

壬生町東京サテライトオフィス所長

落合 正浩 氏

壬生町歴史民俗資料館学芸員

藤栄友里絵 氏

栃木県生活文化スポーツ部文化振興課課長補佐

齋藤 恒夫 氏

司 会

宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長

須賀 英之

主 催 | 一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会

共 催 | 宇都宮まちづくり推進機構・宇都宮共和大学都市経済研究センター

## ■主催者挨拶

一般社団法人 とちぎ圏央まちづくり協議会 常務理事

新見 徹 氏

皆さんこんにちは、昨年5月に続き第2回目の「とちぎ SHOGUN 物語」です。

江戸から日光の歴史資源の掘り起こしと自治体の広域連携をもとに、沿線の産業振興を目指し須賀学長のご指導を頂きながら進めております。

今回はお手元にありますように高藤晴俊先生にお話を頂きます。

高藤先生とは2回程お会いしましたが、繰り返し申されたのは「家康が江戸にいて何故日光を選んだのか？」でした。

生前一度も日光へ行ったことのない家康が、日光を選んだ秘話が伺えることを楽しみにしております。

それと私の世代ですと、信長・秀吉・家康の中で信長・秀吉派が多いのですが、今回高藤先生とお会いして家康の人としての奥の深さというか、是非家康の勉強を再度しようと思うように至りました。

今日はもう一かた、日光市長の瀬高哲雄様にお話を頂きます。

高藤先生の後で話しにくいと仰ってましたが、本家本元のお立場で世界遺産日光と行政のお取り組みのお話を伺いたいと思います。

それから今回開催のもう一つの狙いは、前回の宇都宮市・壬生町に加え、日光市・鹿沼市・小山市・栃木市の皆さんに入って頂き、六つの自治体の広域連携です。

更に栃木県からは入庁以来専門職の齋藤課長にご参加頂き、とちぎ全体の論議を深めて頂きたいと思います。

最後に、毎回開催にあたり、宇都宮共和大学の須賀学長には大変お世話になっており、改めて御礼申し上げます。

簡単ですが開会の挨拶とさせていただきます。

## 基調講演

①

# 「神君家康公 日光を選ぶ」

日光東照宮特別顧問・元禰宜

高藤 晴俊 氏



皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました高藤です。

私の肩書なのですが、**「日光東照宮特別顧問・元禰宜」**とあります。禰宜と言いますのは、神主の身分です。一番偉いのが宮司です。大きな神社ではその下に権宮司がいて、その下の禰宜ですから、大して偉くも何ともないのですが、

私のモットーは、「今日の仕事は明日へ延ばせ」でした。従って、仕事をあまりしなかったのです。どうしてかと言いますと、家康公には「人の一生は重荷を負うて遠き道をゆくが如し」という有名なご遺訓がありますが、締めくくりの言葉は、「及ばざるは過ぎたるよりまされり」です。「やりすぎるな」と。過労死するほど、残業までしてやるのは駄目です。それで、「今日の仕事は明日に延ばせ」でいい、との流儀でやってきて、見事 65 歳で定年退職を迎えました。これからは自由の身と思ったら、退職の辞令と同時に宮司に呼ばれまして、「おまえは、縁を切るつもりか」と言うのです。「いや、定年ですから、ゆっくりさせてください」と言ったら、「縁が切れないように、肩書だけ何かを残しておけよ」と言うのです。「肩書だけでいいのなら、適当に付けておいてください」と言ったところ、特別顧問という肩書を頂いたのです。当然、無給です。

それで何をやっているかと言いますと、在職中と変わらずです。広報宣伝が、私の仕事だった。「日光東照宮はいいところです、ぜひおいでください」と、いまだにそれをやっているのです。私は、家康公の「厭離穢土、欣求浄土」の言葉を知って、神主になる自信がついて、日光東照宮に奉職し、無事、定年まで勤めて家族を養い、円満退職出来たのですが、「今日の仕事は明日に延ばせ」、で手抜きしていたので、その分退職後も無給でお礼奉公、いまだに日光東照宮の宣伝をしているわけです。

今回のテーマの「神君家康公 日光を選ぶ」のタイトルも、実は宣伝を兼ねているのです。去年出した、私の本のタイトルと同じです。その本をなぜ書いたかと言いますと、NHKの大河ドラマの「どうする家康」のタイトルを聞いた時に、これは何を意味しているのだろうと思ったのです。「どうする家康」と言ったら、迷いに迷っていろいろと、「どうしよう、どうしよう」と、

うろたえる姿でしょう。それで遺言も、「どうする、どうする」で考えたのだらうと気付いたら、今までもやもやとしていた部分が、きれいに見えてしまったのです。

何が見えたのかと言いますと、東照宮が日光に、なぜできたのかと言うことです。これが神主としての私の終生の課題だったのです。つまり、なぜ家康公は、日光に自分を葬れと言ったかと言う問題です。一般の歴史学者は、「死んだら神に祭れ」との遺言を聞いて、周りの者たちのいろいろな思惑もあって、その中で一番うまくやったのが天海でしょう、自分が日光山の貫主、トップであるというので、家康公の遺体を日光に持ってきて、今日で言う東照宮を造ってしまえば自分にはかなりの利益があるからと遺言にはなかった事までやったと、そういう受け止められ方をされていたわけです。

そうすると、東照宮で給料をもらう人間の立場からは都合が悪い。後ろめたいような感じがしてくるのです。だって、天海が横車をして、遺言をねじ曲げて造ったものが、東照宮となってしまいます。日光では、天海僧正は大恩人ですから、その天海さんの功績をたたえるわけです。日光で特に学識のある人たちは、輪王寺のお坊さんたちが多いですから、日光の歴史も天海さん中心に語られてきたのです。

だから、「どうする家康」なんていう、家康公を主体とした立場からは考えませんから、「どうする天海」だったわけです。

ところが静岡などに行きますと、「久能山が本家です」などと言うわけです。あの「どうする家康」が始まる前後、少し前からでしょうか、静岡でやっていたキャンペーンをご存じの方はいらっしゃいますか。「余ハ此處ニ居ル」というキャンペーンをやったのです。どういうことかと言いますと、家康公は今も静岡に、久能山に眠っていらっしゃいます、という意味です。静岡の方が言う分には、一向に問題はないのでしょうか。ですが、では、日光はどういうことになるのでしょうか。彼らが言う本音は、家康公の遺体は日光などにはなくて、久能山にあります、と言うことです。だから、「余ハ今モ此處ニ居ル」と。

私も在職中であれば、それ以上のことは言わなかったと思うのですが、もう辞めてしまいましたし、給料をもらっていませんから。言いたいことを言っていると思うようになってきました。ついこの間まで私の同級生が久能山の宮司でしたが、今の宮司は私の後輩です。後輩だから我慢しなさいということで、本当のことを言うようにしてきました。「余ハ此處ニ居ル」と静岡で言っているのは、それはそれでいいのです。家康の御霊は久能山にも祭られていますから。

だからと言って、遺体が久能山にあるわけではないのですという話を、今日はメインにしようかとも思って来たのですが、どうなるかは分かりません。もう写真が映っていますから、ここから行きます。もうちょっと暗くしていただいたほうが、写真の写りがきれいだと思いますので、私の顔は、もうこれ以上見えなくていいと思うのです。私はアマチュアカメラマンなものですから、話よりも写真を見てもらえる方がうれしいのです。

これはご存じの、久能山東照宮です。久能山東照宮の写真を、最初に映すのは家康公の遺言です。これが宿命なのです。仕方がありません。家康公は今から400年ほど前ですが、1616年、75歳で亡くなります。亡くなると、自分が死んだらまず久能山に葬り、1年たったら日光へ移し祭れ

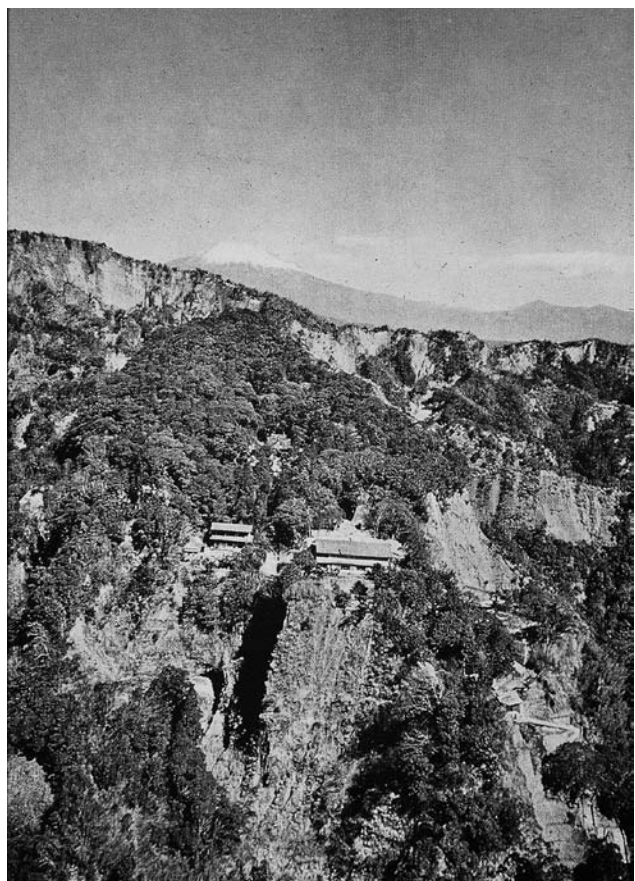
という遺言を残します。だから写真もまず久能山からです。駿府城で亡くなりますとその晩のうちに、ご遺体が久能山に運ばれます。そしてこの社殿が出来るのは日光東照宮が出来たあとです。

この社殿の後ろに、家康公のお墓があります。次のコマにしてください。これが家康公のお墓です。昔からなのですが、久能山に行きますと、「東照宮と言えば日光が有名ですが、実はこの久能山が本家です。なぜなら、家康公は先ず久能山に葬れと、日光には移し祭れと言いましたから、分祀のようなものです。だからここが本家です」、とっていたわけです。

日光の人間などが行きますと、そういう説明を聞いて面白くないのです。戻ってきてから、私に文句を言うのです。「おまえ、久能山の神主は威張っているぞ」と言いますから、「何ですか」とききますと、「日光は分家で、久能山が本家だ」と言われて面白くなかったんです。ただ言われて黙って帰ってきて、私に「あんなことを言わせておいていいのか」と文句を言われても、私も困るわけです。そこで何とか言いつくろう方法はないかしらと、いろいろ考えるわけです。ですから動機は不純なのです。

そうしたら、驚くことに気が付いたわけです。次のコマにしてください。これは久能山の航空写真です。これは久能山東照宮が撮った写真を拝借しているのですが、この写真は、久能山では発表していながら、その意味に全然気付いていなかったのです。お分かりのとおり、これは富士山です。これを見れば、久能山は富士山を背にしていると気がきます。

次のコマにしてください。ところが地図を思い浮かべたら、こういうことなのです。これは日本の中心部の地図です。このあたりの細かい字が読めなくても、別に関係ありません。視力検査ではありませんから。ここは房総半島、そして東京湾です。三浦半島があって、伊豆半島があって、駿河湾です。この鳥居の印が、久能山東照宮です。その西が静岡市内になります。ここに駿府城がありました。



家康公は、ここで亡くなります。遺言は、自分が死んだら久能山に葬り、1年たったら日光に移し祭れ、だったわけです。久能山の写真を見ますと、後ろに富士山が映っています。ええ？と思って、改めて地図を確認したら、その延長線上に日光があります。つまり日光と久能山を結ぶ線上に、ぴったり富士山があるのです。これは偶然なのかと思ったのが、きっかけなのです。家康公の遺言は、久能山と日光を指定しただけではありません。芝の増上寺で法要を行い、岡崎の大樹寺に位牌を立てると、4カ所を指定したわけです。調べてみたら、岡崎と久能山は東西一直線な

のです。北緯 34 度 57 分 30 秒という位置です。しかも、あのお墓は真西を向いているのです。

ところが、社殿の中心軸は拝殿、本殿、お墓と北々東に延びて、更に富士山、そして日光です。つまり久能山で拝めば、日光東照宮を拝んでいるわけです。これを、「久能山が本家です」と言われて面白くなく帰ってきた人たちに言いますと、「私たちは拝まれているのですね、矢張り日光が本家だ」などと言って、安心していたのです。そのことに気付くと方角は無視できない。私も戦後の生まれですから、方角などは迷信だと思っていました。科学万能の時代に育ちましたから、方角などは、誰もまともに考えません。研究者ともなればなおのこと、方角など無視します。ところが先ほどの地図を見れば考えざるを得ません。お墓が西向きで、西の方角に誕生地の岡崎があります。

実はこのラインは、不思議なことにさらに西に行きますと、京都なのです。京都も、実は緯度の一番近いところは阿弥陀ヶ峰と言って、秀吉のお墓がある位置なのです。秀吉のお墓も西向きなのです。秀吉のお墓から西に何があるかと言いますと、西本願寺です。ご本尊は阿弥陀様です。葬られた山は、阿弥陀ヶ峰です。阿弥陀ラインをつくっています。それに倣って、実はこの東西ラインを意識したのではないかと。久能山から岡崎ですが、岡崎には先祖の菩提寺、大樹寺があります。浄土宗ですから、ご本尊は阿弥陀様です。秀吉に倣って同じ方角の並びで、久能山の墓所も、西向きです。

家康公が亡くなる時、「西を向いて葬れ」と言っているのです。そして三池典太という刀で罪人を斬らせて、これで守り刀とする。何を守ろうとしたかと言いますと、おそらく西を向いているのは、自分が敗者に追い込んだ、秀吉を神と祭る豊国神社、そのたたりを抑えるために、同じライン上の久能山に西向きにその刀を持って、葬られたと考えられるのです。これは今まで書いてきませんでした。今、初めて言うことです。正式に神となって日光に祭られるまでが、不安定な時期なのです。死後一周忌が過ぎたら、一説によれば三回忌までにとの言い方もありますけれども、日光に移され、正式な神として祭られれば安心なのです。

では、なぜ最終的に祭られる場所が日光だったのかとなるのですけれども、納得できる理由が今まで明らかにされていませんでした。いろいろ条件は考えられるのです。日光はいいところですよ。いいところを数え上げれば、いろいろとあります。でも、それは必要条件の一つであって、それで十分とはなりません。日光と同じような条件を持ったところなら、他にもあるのです。それにもかかわらず、なぜ日光だったかが今日まで明確に示されませんでしたので、天海さんが日光にいたから、自分の利益のために遺言をねじ曲げたなどと誤解されてきました。日光では恩人ですけれども、日光以外の人にとっては、恩人でも何でもありません。他の地方の立場で考えてください。日光に東照宮を持っていかれてしまったのです。面白くないのは当然です。

そして、歴史学者や評論家などは権力者が嫌いですから、当然、天下を取った家康公を評価したくないわけです。

分かりやすく世俗的な言い方をしますと、野党が与党を責めるようなものです。本当にそこまでひどいのですか。人間は誰れしも批判されても仕方がない部分は、もちろんあります。けれども、悪く言いますよね。それと同じなのです。少なくとも諸国の大名や侍たちの多くが、家康公にとっ

ては野党なのです。そして、研究者は全国にいますけれども、全国の歴史をたどったら、皆が徳川幕府に頭を下げなければいけなかった、地方の大名と関わりのある人が多いですから。参勤交代で江戸に向かった人たちは、皆、徳川将軍家のせいで苦勞させられたと思っていますから、いいことを言わないのです。それが現実でした。ですから、日光にいと、何とか正当化しなければいけませんから、いろいろと考えざるを得ないわけです。

そのようなことをやっている時に、星々を背景とした陽明門の写真が撮れたのです。私はアマチュアカメラマンで、学生時代から写真が好きでやっていました。東照宮に勤めてからは、東照宮の写真を撮り続けてきました。ところが、明治4年から日光東照宮の写真撮影は許可になっているのです。東照宮は380年前に建て替えてからはほとんど変わっていませんから、誰が撮っても被写体は同じなのです。新たなアングルなど、絶対に見つからないのです。プロと言わず、アマチュアと言わず、実は数多くの人が撮っていますから。

そこで、夜の東照宮ならば普通の人は撮れないと思って、夜の写真を考えたのですが、これもまた駄目なのです。なぜなら、特別な許可を取ったプロは、奉納金を積んで許可をもらうわけです。大型の機材を持ち込んで撮りますから、夜の写真も、プロにはとてもかないません。新たなアングルなどは無理と思っていた時に、私の子どもが小学校5年生になりました。子どもがどんな勉強をしているかと思って、教科書を見ていました。理科の教科書でした。その中に北極星を中心に星が回っている写真があって、それを見た時にひらめいたのです。

神主は、宿直があります。宿直の晩は境内巡回です。懐中電灯を1つ持って、境内を歩くのです。怖いのです。ですから、急いで戻ってくると、先輩に叱られるのです。早すぎる、と。これでは巡回にならない、もっとじっくり回ってきなさいと言うのです。じっくり回ってこいと言ったって、夜の境内で何をするのでしょうか。仕方がありませんので、懐中電灯であちらを照らし、こちらを照らしたりしている時に、陽明門の上に北極星があることに気付いていましたから、ひょっとしたらこのような写真が撮れるのではないかと思い付いたのです。

写真の取り方は、教科書に書いてありますから、そのとおりにやったら、写ってしまったわけです。写ったら、自慢したくなります。と言いますのは、夜の東照宮の写真は、既にプロたちも撮っています。ですが、星空を入れた写真は誰も撮っていないのです。私が最初なのです。となれば、自慢したくなるのは分かりますよね。「どうだ、俺が最初だ」、と。ここで終わらないところが私の悪い癖と言いますか、口から出まかせをいろいろと語ってしまうわけです。「見てください、北極星中心に星が回っているでしょう。でもこうやって見たら、陽明門を中心に星が回っています。つまり、日光東照宮が宇宙の中心なのです」、などと言い出したわけです。

言い出して気が付いたのです。ひょっとしたら当時の人たちも、このイメージを持っていたのではないかと。そう思って調べ始めたら、何と、家康公はこのことをきちんと知っていたのです。資料にも上げておきましたが、家康公が晩年にいろいろとやっている中で、京都のお坊さんたちに作文を書かせる、筆記試験をやるのです。慶長19年なのですが、京都五山の、5つのお寺のお坊さんたちが作文を書くのですが、その理由は、彼らは外交文書の取り扱いをしているのです。ところが、本業以外の仕事ですし、まだ家康公からお寺の領地の朱印状をもらっていません。安

堵されていないわけです。さらに外交文書の取り扱いをするのですから、ベースアップを願い出るわけです。「もっと増やしてください」と。家康公は快くオーケーするわけです。「いいでしょう」と。ただし、国の外交文書を取り扱うのですから、その資質、素質があるかどうかだけは、テストさせてもらいますというので、作文を書かせます。

その作文の題材に選んだのが、『論語』の一節なのです。これはプリントに資料として入れておきましたけれども、参考資料の中央あたりです。慶長19年、「林道春及五山衆試文稿」です。これは南禅寺にある文書なのですけれども、家康公の書かせた題は、『論語』の一節です。「子曰、爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」いう一節があるのです。これは『為政編』の冒頭の言葉です。『為政編』ですから、まつりごとの話です。

どういうことかと言いますと、北極星を中心に、天体は規則正しく移動している、動いています。ここ北極星には天帝がいらっしゃる。天帝の徳を頂いていい政治をすれば、星々が規則正しく動くように、世の中も規則正しく治めていくことができますと、孔子が言っているわけです。この言葉を家康公は知っていました。だから、この言葉を題材に作文を書かせたのです。どのようなレポートが出てくるが問題なのです。

18人のお坊さんたちが、慶長19年3月に京都から出てきて、駿府の家康公の前でこの問題を出されて、2日後に提出するという段取りになるわけです。その時に、家康公は林羅山を呼んで、「彼らがどのような作文を書いてくるかが楽しみだね、ところで金地院崇伝が序文を書いたから、読んでみなさい。よく書けているだろう」と。更に、「羅山、おまえは後書きを書け」と言われました。「私などのような若造がと思ったけれども、家康公の直々の命令ですので、やむを得ず、私も後書きを書きます」として、林羅山も作文をします。

そうしますと、どのような作文が出てくるかと言いますと、もう決まりきったものになります。「家康公が立派な政治家ですから、天帝の徳を頂いて天下人になったから、家康公を中心に世の中は規則正しく動いていく」と。どうもこれは金地院崇伝の策略なのです。この題材で作文を書かせれば、こういう文章を書くの見当はつくわけです。徳川幕府の正史である『徳川実紀』には、その出来上がった作文を読んで、家康公はご機嫌斜めだったと書いてあります。「皆ごまをすっているような文章だ。肝心なことは、いかにしたらこの天帝の徳を身に付けることができるのか、それを説いてほしかった」と。これは建前論ですよ。だってその題材で書けば、皆が同じようなことを書くことになるわけです。

問題は、それを書かせることが肝心だった。つまり金地院崇伝や林羅山、家康公の取り巻きが、いくら家康公は偉いと言っても、駄目なのです。外部の人間に、家康公はまさに北極星と同じです、天帝の命を受けた天下人ですと言わせることが肝心だった。となりますと、これはやはり崇伝の画策だろうと考え付くわけです。崇伝が、家康公を北極星に見立てようと画策をしました。これは崇伝の画策と言うよりも、家康公自身がこの北極星の意味をよく知っていたということが肝心だと思ふのです。

と言いますのは、当時、今は天道思想という名前ですけれども、「天」という存在があると信じられていました。天は天命、天罰などを与える、えたいのしれない存在です。天道

とも言います。「天道畏るべし」などは、戦国時代によく使われた言葉です。人の運命も、戦の勝ち負けも天の配剤です。いいことをすれば天が報いてくれる、悪いことをすると天の罰が下る。運命のように理解する人もいました。しかし、その天道思想の大本は、中国に生まれた思想であって、天下を収める皇帝は、宇宙を支配する天帝から選ばれた者が天下人になるという考えだったわけです。

徳がないと、天下人になれません。この思想が中国で生まれたのは、おそらく中国には徳のある天下人がいなかったからです。いなかったから、生まれたのです。周辺国のいいところは、そういう思想を受け入れたことです。日本人は、そういう思想が、理想的な考え方があると、真面目に実践するのです。

つい最近読んだ本ですけれども、思わぬところにヒントを得ました。奈良の大仏がなぜできたかという話なのですけれども、聖武天皇が天皇として世を憂いたのです。疫病がはやる、災害が起きる、「なぜだろう」と。これは自分のまつりごとがよろしくないから、だから天帝からお叱りを受けたのだ、その結果が災害や疫病だと。「徳を積まなければいけない」、それを解決する為にはどうすればいいのか。そこに入り込んできたのが仏教です。仏教の教えをさらに学んで徳を積み、天も私を認めてくれるのではないかと考えた。そのために発案したのが、あの奈良の大仏の建立だったのです。そして、それは自分一人がやっただけでは駄目で、周りも、国民が等しくそういう思いを持たないと、天は許してくれないでしょうと。それで、国家プロジェクトで、奈良の大仏ができたのです。

これが天下人の思想なのです。疫病がはやる、災害が起きるのは、科学的に考えたら、天皇個人の資質などは関係ない筈です。でも、それを自分の責任と思うというのはどういうことかと言いますと、慢心しないということです。どれほどいい政治をやったって、これでいいと思っはいけないということなのです。どこかの政治家どころか、今のあらゆる国のトップに聞かせてやりたいです。自分が正しいと思っはいけないのです。災害が起きるのも、天候が不順なもの、疫病がはやるのも、自分に徳がないからと謙虚に反省する、トップにある者が、です。これが天道思想の肝心の点です。

徳川家康公は自分自身をどう考えたでしょうか。なぜ、自分が天下人になれたのか、です。今までの研究者が言うとおりのことです。信長や秀吉に比べて、ずば抜けた能力を持っていたのかと言ったら、おそらくそうではなかったのでしょう。平凡な、常識的な人間だったと思うのです。本人自身はそう考えたと思います。同盟者であった信長や、かつては自分よりも身分が下だった秀吉に臣下の礼を取らざるを得なかった。その連中のつぶれたところを、しっかり見ていたのでしょう。

自分が、なぜ天下人になれたのか、そう考えた時に、信長や秀吉になかったもの、武田信玄になかったもの、上杉謙信になかったものは何かと言ったら、自分だけは「厭離穢土、欣求浄土」の旗印を掲げていた、ということなのです。「厭離穢土、欣求浄土」とは、この世は穢れきった穢土だから、こういうところは早くおさらばして、欣求浄土、阿弥陀様の極楽浄土を求めるということですが、家康公は、憎い敵だから倒すのではなくて、この世から戦争をなくすため、平和を

もたらすために戦うのだ。この世を浄土のような世界に作り直すのだ。自分は死んで阿弥陀様の浄土に行くのではなく、「この世を浄土に作り替える」のだ。そういう思いで戦うから、無益な殺生は極力しません。残酷なことはしません。残忍なことはしません。それが信長や秀吉と違う点だったろうと。

慈悲の心を持ってまつりごとを行うことが、信長や秀吉にはなくて、自分には出来た。天はそこを認めてくれたのではないかと。そう思った家康公が、最晩年になって、政権は2代将軍に渡したし、これが続いていけば、平和を維持できるだろう。でも100%安心はできません。そのため亡くなる時に、自分を神に祭れと言った。

人間は死んだらおしまいのではないのです。おしまいと思っている人もいるかもしれませんが、日本人は昔から、死んでも魂は残っていると信じて来たわけです。だからいろいろな供養をするわけです。分かりやすく言いますと、私も孫ができて初めて気が付いたことですが、孫のかわいさは、無条件なのです。これでもう思い残すことはないと思ってあの世に行く人も、おそらく思い残すことはあるのです。それは何かと言いますと、この世に残していく孫やひ孫でしょう。子どもとはいろいろとありますが、自分の子孫は守りたいのです。子孫も自分のおじいちゃん、おばあちゃんはあの世から自分を守ってくれるという信頼関係があるわけです。

だから、普通死後の法要は三十三回忌、あるいは、五十回忌までやって、もうその後やりません。どうしてやらないかと言いますと、もう故人の個性がなくなってしまうわけです。覚えていませんから、そうすると先祖さまの部類に入るのです。そうしますと、祖先神になります。庶民であっても、自分の子孫を守ることができるわけです。死んだら仏様と言いますが、仏様も神様も、日本人にとっては一緒です。あの世に行っても、この世にいるわれわれを守ってくれる存在になります。

ところが、天下人だけは違うのです。この世の政治を動かした人は、この国の未来にも責任があるのです。そう考えた家康公は、死んで終わりではないと。自分は、子孫だけを守るような狭い考えではいけない、この世の平和を守らなければいけない。そのために極楽浄土に行くのではなく、この世を護る為に神として祭れと遺言をしました。これは、何らおかしいことではないのです。最近の研究者は、それを神格化などと言いますが、大変失礼な言葉です。神格化とは、神でない者を神としてあがめることを言うのです。これは一神教に毒された考え方です。西洋人の考え方です。400年前に日本を訪れた、あのキリスト教のバテレンたちの考え方、見方と一緒にです。

日本人は昔から、誰でも神になれるのです。誤解されているのは織田信長です。信長を尊敬している人はいると思います。でも信長は生きていた間に、自分を神としてあがめろと言いました。この事に関しては誰も思い上がりだとして擁護しません。なぜですか。決しておかしい話ではないのです。ごくごく当たり前の話です。神や仏は、われわれを救ってくれるはずなのです。でも、あの戦国時代、人々を誰が救えたのですか。信長だったら救えたのではないですか。経済も豊かにしていきます。あの信長がそのまま天下人になったら、戦争のない国をつくれたかもしれません。人々の幸せを約束できた、少なくともその途上にありました。だから、具体的にお寺のお坊さ

んや神社の神主が人々に幸せをくれたのか、俺ならおまえたちを幸せにしてやるぞと。それを思い上がりだと思っているのは、日本人の神観念に対する認識不足です。

日本語では今でも普通に「あの人は神様です」と言うではないですか。例えばプロ野球では「神様、仏様、村上（神）さま」です。かつては「稲尾さま」でした。世の常ならぬ力があれば人間だって神様になり得るわけです。これはキリスト教の考え方と違います。われわれだって、自分の祖先は祖先神、神様になれます。天下人としての責任は死後もあります。それは、国を守る神になると。だから、信長は生きている時にそう言うだけで、何らおかしい発想ではないのです。信長の場合の問題は、ちょっと残忍なことが多すぎた、敵が多すぎた、だから志半ばで、謀反に遭います。そして亡くなったその後も、信長教の信者ができなかったのも、すぐに神に祭られなかっただけのことであって、信長が、「俺が神だ」と言うのは、神のように働こうとしていたので、何らおかしい思想でも、何でもありません。ただ、普通の人は自ら言いません。本当にあがめられる者は、自分で言わなくても他人があがめてくれるからです。ただ、遺言の時は違います。間違いないようにきちんとやってもらおうということで、家康公は自分を神に祭るよう遺言します。魂をこの世に残して、この世の平和を守っていく為に。そのために、日光を選んだのです。天海さんが日光に居たからではないのです。天海さんが日光に来るのは、慶長18年の末です。京都の五山僧に作文を書かせるのが慶長19年の3月なのですが、その準備は慶長18年の秋ごろから、崇伝はもう画策していたと思われるのです。慶長18年の夏ごろから秋にかけて、金地院崇伝は京都に行って、その下準備をしていたと思われます。天海さんが日光に来るのは、その18年のもう暮れも近い11月なのです。天海さんは、その前年の慶長17年に埼玉の川越に喜多院というお寺がありますが、そこを本拠に、家康公からお墨付きをもらって、天台宗を拡大しようとしていた時期なのです。朱印状までもらっていながら、次の年になぜ日光に来なければならなかったのかと言うことです。

おそらく崇伝や天海が、家康公を中心に、当然、相談しています。つまり自分が死んだら「どうする」かです。秀吉もすでに神に祭られています。秀吉と同じように、何とか大明神ではまずいのです。それを超えなければいけませんから、他の名称で神に祭らなければならない。祭る場所は、家康公は天帝から選ばれた天下人なのです。そうしますと、北の方角が良いのです。天子さまと呼ばれた天皇陛下は、京都の御所では南向き、北極星を背にして座るのです。どうしてかと言いますと、天子さまは天帝の子どもですから。

天帝から選ばれた天下人が日光に鎮まれば、その真南に江戸があります。江戸がこの世の中心です。この世の中心と宇宙の中心の天帝を結ぶ線上に、日光があります。ですから方角からすれば、幕府の本拠地である江戸から北極星の方角がいいとは、おそらく崇伝の発想なのです。崇伝の頭のいいところは、手柄を全部、自分で独り占めにしなかったことです。江戸の北でいいところは日光あたりと思っても、関東に詳しいのは、天海さんです。おそらく崇伝は天海に恩を売る形で、推薦しただろうと思います。それで家康公が、下準備、調査の為に日光に派遣したのが天海さんです。それが慶長18年の暮れ間近になってからです。

そして、おそらく天海さんが日光に来て気が付いたのが、日光の名称のいわれです。二荒山神

社という古い神社があります。男体山のことを、昔は二荒山と呼んでいました。二荒が、日光の古い地名です。いつ日光になったか、これは文献学的に日光という文字が初めて出てくるのは、平安時代末の保延年間のものからです。二荒と呼ばれていた土地が、日光とも呼ばれるようになったことは確かなのです。これを日光ではどう言い伝えられていたかと言いますと、勝道上人によって日光は開かれる、でもその当時は、二荒と呼ばれていました。それが日光に替わるのは、勝道上人の徳を慕って日光を訪れた空海が、勝道上人の伝記を書くために日光に来た空海が、二荒という地名を見て、「荒れる」という字は、縁起が良くない。もっといい字がないだろうかと、「二荒」という字を音読みすれば「にこう」、「にっこう」で、「日光」という文字を与えた。これが日光の伝説として、いわば真実として語り伝えられていたわけです。

その空海が日光に来てなした最大の仕事の一つは今の滝尾神社を祭ることだったのです。今、二荒山神社には新宮、本宮、滝尾と3つのお社がありますが、その滝尾に行って、その土地の神を祭ろうとします。写真を用意してきたのでした。次のコマにしてください。これが滝尾神社です。この神社は空海さんが祭ったというのですが、次のコマです。その神社の手前に、白糸の滝という滝があります。この滝つぼで、この土地の神を祭るため行法を行うのです。そうすると、大小2つの玉が出現して、小さな玉は天補星と名乗りました。次いで大きい玉が妙見尊星、即ち、北極星の神と名乗ったと言うのです。その北極星の神が言うには、「おまえが呼んだから出てきたけれども、ここにはもともと女の神様がいるから、この土地には、それを祭れ」というので、あの滝尾神社ができるわけです。続けて「おまえが呼んだから出てきたけれども、今は必要ない。この世が再び乱れて、私が必要になった時は再び出現するから、それまでは中禅寺湖畔に祭っておくように」とい



うので、中禅寺湖畔に妙見堂というお堂を造って祭りました。小さな玉は、山内の今の明治の館がある手前に児玉堂という小さな祠があるのですが、そこに祭ったと。

つまり、二荒を日光と呼び替えたと言いますか、日光という地名が付けられた時に、北極星が出現したのです。しかも、世が乱れたら再び出現すると、約束をした土地なのです。となったら、天帝から選ばれた家康公、北極星と一体の存在である家康公が神に祭られる場所として、この世に神として祭られる、約束の地はまさにここ日光だったのです。おそらく、天海さんからの報告を聞いた家康公は確信を持って、日光を選ばれた。家康公が、天海の口車に乗って日光を選んだのではなくて、これは家康公自らが、自分は天下人であるという

自覚の下に、死後もこの世の行く末に責任を持たなければいけない、そのためには天帝と一体になれる土地として、日光を選んだのだと考えられます。

そうしますと問題は、家康公の遺言の内容です。資料に引いておきましたけれども、崇伝が書いた家康公の遺言は、死んだら久能山に葬り、芝の増上寺で法要を行い、岡崎の大樹寺に位牌を建てて、そして1年後に日光に小さなお堂を造って移し祭るようにと言っています。これはある意味、皆が知っていることなのです。ところが、これしか書いていませんので、誤解が生じたのです。なぜこれしか書いてないかと言いますと、実はその後、多少詳しい方はご存じと思いますが、神に祭る時に、吉田神道流の明神号で祭るか、権現号で祭るかという論争があったとされているのです。豊臣秀吉は豊国大明神として祭られました。だから、その例に倣って吉田神道でやれば、家康公も何か大明神に祭られます。それが普通で、当然なのに、天海が横車をして、前例のない権現号にしてしまった、と皆が誤解しています。

それを疑問に思わないこと自体が、私には納得できませんでした。なぜなら、豊臣秀吉が大明神に祭られたのだから、家康公も大明神でいいのですか。研究者にとっては、秀吉も成り上がりですけれども、それが大明神になっているのだから、家康公も大明神で、同じでいいではないかと思うかもしれません。

ですが、家康公および家康公の取り巻きが、秀吉と同列でいいなどと考えるわけがないのです。私のように日光東照宮で給料をもらっていたら、いかにして豊国大明神を超えた存在になるかを考えただろうと、素直に思うわけです。明神号ではまずいのです。秀吉と同じですから。どうやって超えるかが問題なのです。吉田神道では秀吉以上の祭り方はないのです。別のものにやらせるしかないのです。

われわれ庶民ならば、死んだら子孫が祭ってくれればいいだけの話です。ところが、国の守り神は、やはり公の祭祀が行われなければいけません。簡単に言いますと、天皇から<sup>みことり</sup>勅を頂いてきちんとした神社に祭られないと、日本全部に影響を及ぼすありがたい神様になれません。信長は生きていうちに自分を神とあがめろと言いましたけれども、豊臣秀吉の場合は、最晩年になって、幼い秀頼を残していくけれども、自分に何ができるのだろう。いくら、家康公をはじめ、家来たちに秀頼を頼むと言ったって、当てになりません。死んでしまったら何もできないかと言いますと、そうではありません。死んだ後、神になって自分の子どもを守りたいと思うのは、人間として当然でしょう。

そうなった時に、考えていく過程で、神として祭ってもらったのなら、勝手に神になっても駄目です。天皇から認められなければ。そうしますと、秀吉を神に祭るための儀式を吉田神道でやらせるわけです。それが、朝廷が、天皇が認めた公のやり方です。当然秀吉は戦国乱世を統一して、皇室の安泰にも寄与するほどの業績を上げたわけです。ですから、最大限のやり方で豊国大明神に祭ったのです。しかし、それと同列では、徳川は困るのです。豊国大明神を超えなければ。それで考え出したのが、天海の流儀で権現号で祭ることです。明神号と違いますから。他人はどちらが上かなどと言うかもしれませんが、本人たちが、権現は明神より上ですと認めていけばいいわけですから。そのために、天海に任せることにします。

ところが問題は、天皇からその許可をもらわなければならないのです。朝廷は、歴史的に見て前例を重視します。前例にないことは、大体、拒否されるわけです。難しいことは「前例がありません」と、これをやられると、徳川としては困るのです。それで思い付いたのが、論争なのです。「徳川内部で明神や権現などと論争をして、決着が付きません。それで將軍秀忠の裁定で、権現に決まりました。だから権現号で祭ってください」、とお願いします。前例がないけれども、どうしますか。この問題で徳川幕府内はもめているのです。それを朝廷側がどちらがいい、悪いなどと言い出すと、徳川内部の論争に朝廷まで巻き込まれてしまいます。それで、「これは將軍が裁定したのですからそのまま認めましょう」と。後水尾天皇も権現号でいいでしょうということ、で、権現になります。

つまり、そのためには天海と崇伝が、いかにも論争したかのように演出せざるを得なかったのです。そのために崇伝が書き留めた家康公の遺言も、簡単にしか書けなかった。久能山に葬り、芝の増上寺で法要を行い、岡崎の大樹寺に位碑を建て、そして1年後日光に移し祭れと、単にそれだけしか書けなかった。ところが、思わぬところに証拠が残っていたのです。それが御三家の尾張と紀伊の記録です。ただし、これは後で書き直した可能性がないとは言い切れないのですが、ただ、家康公の遺言について、天海と崇伝が一緒に、2代將軍秀忠に伝えました。

その内容は「先ず久能山に葬り、三年後に日光に移し祭れ。日光での祭儀は天海僧正にやらせるように」と。尾張家、紀伊家ではそういう記録を残しているのです。

なるほどと思わざるを得ません。考えてください。家康公の大事な遺言を、將軍は直接聞いているわけではありません。崇伝や天海から聞くわけです。その時に將軍は、1人からの話だったら聞きません。天海と崇伝が2人そろって、あるいは本多正純も一緒にいたかもしれません。こういう遺言でしたと聞いたから、納得できるわけです。その中に日光での儀式は天海さんに、習合神道、後に山王一実神道と言われるような、仏教系の神道、仏教と神道の交じり合った法儀で祭るようにと、書いてあるのです。

つまり、天海と崇伝と一緒に家康公の遺言を忠実に伝えました。忠実に伝えただけでも、崇伝の日記には、天海に任せるなどは書かれなかった。それはいかにも論争したかのように装おわなければいけないからです。ひそかに伝わるようなやり方でやったわけです。それは、日光に祭った東照大権限は、天帝と一体の存在であると明言することは、誤解されかねないのです。徳川王権論になりかねませんので、皇室の誤解も生みます。皇室をないがしろにしているとも捉えかねられない要素を持っています。だから、あまりオープンにはしてはいけないと。皇室をないがしろにして政権を維持するなどは、日本の歴史においては不可能ですから。ただ、ひそかに一体であるということなら、おそらく問題にはなりません。そのために徳川の血筋の娘を皇室に嫁入りさせます。そして、藤原家と同じように、天皇をサポートしていく体制なら、前例があるわけです。ですから、家康公が日光に祭られたのは、天帝と一体の存在であることは、あまり大っぴらに言うことではありません。問題はその覚悟が本人にあればいい。

ということで、一番いい場所として日光を選びました。と言うよりも、日光以外の選択肢はなかった。そのことで考えなければいけないのが、家康公には天下人の自覚があったことなのです。

天下人は天帝から選ばれた存在です。なぜ選ばれたかと言いますと、徳を持って国を治めることができるからです。そう、選ばれました。だから、徳を持ったいい政治ができなければ、天罰を受けて政権の座から追放されることになります。駄目な時は、災害が起きる、疫病がはやる、戦争が起きるなどで示されると。だから、そうならないように、平和な世の中をつくらなければいけない。秀吉はいくら偉かったかもしれませんが、政治家としてどうだったでしょうか。人間の価値は何を成したかではなくて、何を成そうとしたか、その志が、思いが一番大事であると、私は思うのです。ただし、政治家だけは別です。そういう志を持ち、なおかつ、いかなる結果を残したかが、政治家は問われなければなりません。

今、「豊臣兄弟！」がNHKの大河ドラマで放映され、また秀吉ブームも盛んになるでしょうけれども、政治家としては結果責任です。われわれは庶民の場合は、結果責任などは問われなくていいのです。何を目指したかでいいのです。例えばオリンピック選手だって結果ではありません。だから試合後のインタビューでも、どのような思いでこの試合に臨んだかが問われるのです。その思いが強ければ、純粹であればあるほど、評価してもらえます。でも悲しいかな、政治家だけはそれだけでは駄目です。

どのような志があっても、結果が問われます。それが政治家です。それに応えた政治家がどれだけいるのかと考えた時に、内戦を終わらせ、外国とは平和外交を続け、200年以上も平和を維持した政権を造り出した政治家は、私は家康公以外に、そう思い浮かびません。

その家康公を神に祭り世界遺産にもなっている日光東照宮ですが、もう時間がありません。せっかく用意したスライドを映せませんが、1つだけ紹介しておきたいと思います。東照宮のシンボル、陽明門の中央にある彫刻は唐子の遊びです。それも、「司馬温公の瓶割り」と言って、水がめに落ちた仲間を助けるために、かめを割って友達を助けた、命の大切さを教える話が陽明門の中央にあるのです。権力者が造った建物で、命の大切さを教える話がメインテーマになっているなどという建物は、世界中を探しても他にはありません。世界遺産が「人類の宝」なら、何をもち東照宮が人類の宝なののでしょうか。まさに家康公の目指したものを理解した家光公たちが、今の日光東照宮を造る時に、メインテーマはまさに命の大切さ、戦争のない平和な世の中、子どもたちが安心して遊べる世の中、それを遊んでいる子どもの彫刻で表現したのです。あの東照宮の彫刻はそれがメインになって、それに肉付けする為にいろいろな彫刻があるのです。

つまり東照宮を造った人たちは、家康公の平和への願いを理解していたのです。そして、家康公が、自分が世の中を、将来を見守るために選んだ土地が日光だった。家康公自らが選んだのが日光だったと。そのことを基に考えてもらえば、いろいろな点が理解できてくるのではないのでしょうか。今の世界中の政治のリーダーたちに、このような生き方をした人がいますか。家康公は2代将軍に、「いささかも不道あるべからず」と、道にあらざる行いをしてはいけないと言いましたし、3代将軍には、「天下人は慈悲ぞ」と、慈悲の心を持たなければ駄目だと、教え諭しました。それで徳川幕府は260年も続いたのです。

これは思いつきですが、明治時代になって、江戸は東京と名前を変えましたけれども、江戸時代はずっと、あの江戸は江戸でしたよね。江戸は「穢土」と同じ発音で、汚れた世の中なのです。

縁起の悪い名前なのです。家康公は、なぜ江戸を改名しなかったのでしょうか。信長は岐阜に変えました。浜松は家康公が引馬から変えました。ですから、江戸などという名前は変えられたはずです。変えなかった理由は、江戸がまだ汚れている、理想が実現されていない、だから、これから「江戸を浄土のような、いい土地にするのだ」、と。だから改称しなかったのではないのでしょうか。明治新政府が東京などという名前を付けましたが、家康公の理想を、あの人たちには理解出来ていなかったであろう、という思いが私には強くします。

ちょっとオーバーですかね。すみません。勝手なことを言うと家康公から怒られそうです（一同：笑）。

時間をオーバーしています。いつも90分やっているものですから、60分でやるのはちょっとつらかったのですけれども。まとまりませんでした。あまりまとまらないほうが、やはりいいですね。「及ばざるは過ぎたるより勝れり」です。これで失礼させていただきます。ご清聴ありがとうございました。

## 〔略 歴〕

# 高 藤 晴 俊 (たかふじ はるとし)

### 肩書

日光東照宮特別顧問・文星芸術大学非常勤講師

### 略歴

昭和 23 年 栃木県日光市野口に生まれる  
昭和 47 年 日光東照宮に奉職（禰宜、総務部長・文庫長等歴任）  
昭和 52 年 國學院大學大学院文学研究科（神道学専攻）博士課程単位取得退学  
昭和 60 年 黒羽刑務所・喜連川少年院教誨師（～平成 25 年）  
平成 25 年 定年により日光東照宮を退職

### 著書

『生岡山王志一日枝神社小史』	・私家版	(昭和 56 年)
『謎と不思議・東照宮再発見』	・東照宮	(平成 2 年)
『資料編・東照宮の彫刻』	・東照宮	(平成 3 年)
『家康公と全国の東照宮』	・東京美術	(平成 4 年)
『日光東照宮の装飾文様』(共著)	・グラフィック社	(平成 6 年)
『日光東照宮の謎』	・講談社新書	(平成 8 年)
『図説・社寺建築の彫刻』	・東京美術	(平成 11 年)
『近世大工の贈り物』(共著)	・三ヶ所神社	(平成 18 年)
『甲斐の東照宮信仰』	・岩田書店	(平成 24 年)
『千人武者行列一日光東照宮神輿渡御祭の全て』(写真集・共著)		
	・下野新聞社	(平成 27 年)
『天下の神廟 日光東照宮』(写真集)	・下野新聞社	(令和 3 年)
『神君家康公 日光を選ぶ』	・下野新聞社	(令和 7 年)

他に、神道・東照宮・日光関連の共著や論文多数

### 受賞歴

藍綬褒章（教誨師・平成 23 年）

### プロフィール

東照宮の建造物や彫刻の調査・研究を行い、「眠り猫」や「魔除けの逆柱」（さかさばしら）、陽明門の「唐子（からこ）遊び」等、数々の新発見や新解釈を発表し、新聞・テレビなどにも度々紹介されている。趣味の写真では「世界遺産シリーズ」等の記念切手にも採用された他、各種コンテストに入選・入賞。特に、「北辰の門」と題する陽明門の真後ろに北極星を中心に星々の回る写真は、東照宮の日光鎮座の理由を解明するものとして広く注目を集めた。〔令和 7 年現在〕

# 『神君家康公 日光を選ぶ』

(令和8・2・27)

高藤 晴俊

## 〈講演要旨〉

人は死ねば全てが無になる訳ではない。日本人の多くは、死後も魂は残り、ご先祖さま〈仏さま・祖先神〉となって、残された子孫たちを守ってくれると信じてきた。庶民の場合は子孫を守ることが期待されたが、徳川家康公は天下人であった。天下人は死後も天下の行く末に責任を感じた筈である。それで「八州の鎮守」（日本国の守り神）に祭られることを望み、その祭祀の場として日光山が選ばれたのである。

東照宮が造営された日光山側では、その造営に主導的役割を果たした天海僧正を、日光山再興の恩人として顕彰してきた。一方日光以外では、天海は己の野心のため遺言を捻じ曲げ、前例のない権現号を主張して日光遷座を強行したと誤解されてきた。しかし、これは家康公の遺志を全く無視した解釈である。鎮座地として日光を選んだのは家康公自身であり、天海はその準備のために前もって日光山に派遣されていたのである。

金地院崇伝の日記や、徳川御三家の尾張・紀伊家の記録によれば、公の遺言は「先ず久能山に神葬し、その後天海の主導で日光山に神仏習合の法義で神祭せよ」との事であった。では、家康公は何故日光山を選んだのであろうか。日光が様々な好条件に恵まれていたことは言うまでもないが、筆者は日光山が江戸の真北に位置していたことが最大の理由であったと考えている。

戦国武将たちは、戦の勝敗も、人の生死も、「天」（天帝・天道）の配剤であり、天下を取るのも、天のしからしむるところと考えた。古代中国以来、帝都を貫く南北軸は、「皇帝」が「天」より地上世界の政治を委任されたことの表象であったように、北極星と江戸城を結ぶ宇宙軸の線上に東照宮が位置することは、家康公が築いた徳川政権の正統性を暗示していたのである。

家康公が「厭離穢土・欣求浄土」の旗印を掲げたことは良く知られているが、これは死後に極楽浄土を求めるのではなく、この世を浄土に造り替えようとの決意を示したものである。家康公の宗教観は、一宗一派に偏することなく、国家運営・人心安定のために各宗教を尊重し、保護した。天下は「お預かりしたもの」と考え、私するのではなく「天下は天下の天下」であるとし、秀忠には「些かも不道あるべからず」、家光には「天下は慈悲ぞ」と諭した。

林羅山によれば、藤原惺窩が「世の乱れを厭う天が選んだ真の君主が現れる」と説くのを聞いた家康公は、これこそが「治国平天下の要道」と理解し、儒教（儒学）の教えを国政に活かそうとされた。その一環として京都五山の僧たちに『論語』中の「政を為に徳をもってすれば、譬えば北辰の其の所に居て衆星の之を共るが如し」という一文を題材として作文を命じたが、崇伝や林羅山も文を添え、何れも家康公を北極星に擬える文章を草している。

天命を受けて江戸に幕府を開いた家康公にとって、北極星の方角に位置する日光山は、死後も自らの魂を留めるべき地に相応しいと思はれたであろう。しかもこの地の伝承によれば、弘法大師空海が「二荒山」を音読し「日光」の嘉字を当た銘記すべき時に、北極星の化身の玉が出現し、この世が乱れ自分が必要な時には再び出現すると約束された、正に「約束の地」で、あったと言

えよう。

結果責任が問われるのが為政者の宿命であるが、人間としての評価は「何を為そうとしたか」にあらう。従って、家康公が日光を選んだその真意の理解は、我が国の歴史や宗教、そして政治思想を知る上からも、疎かにすることの出来ない意義を有するものと考えられよう。

日光山が江戸幕府至高の聖地となると、その影響は周辺地域にも及ぶことになる。逐一の検討は筆者の良くするところではないが、日光道が五街道の一つに位置付けられたのも、宇都宮が日光道から分かれて奥州道の起点となったのも、更には、例幣使道などの脇街道を含めて、周辺の宿場町の成立・発展の歴史も、東照宮の日光鎮座と無縁ではなかったろう。

## 《参考史料》

### ● 家康公の遺言

#### ○ 『本光国師日記』

一兩日以前、本上州、南光坊、拙老、御前へ被仰置候ハバ、御体をば久能へ納、御葬礼をハ増上寺にて申付、御位牌をハ三州之大樹寺ニ立、一周忌も過候て以後日光山に小き堂をたて、勸請し候へ、八州之鎮守ニ可被為成との御意候

#### ○ 徳川義直編『東照神君年譜』

四月小 七日、僧正天海・以心長老（崇伝）葬送之命、告於秀忠君、二僧伝公之言目、万歳之後、必当以神力擁護子孫、鎮撫邦家、準大織冠（藤原鎌足）子孫繁栄之例、殯斂已畢、先葬久能山、以榊原内記照久為神職、受頼将（徳川頼宣）之奉祭而、三年之後、当改移下野国日光山其祭享之式、依両部習合神道并宜任天海之指也、

### ● 「慶長十九年林道春及五山衆試文稿」（南禅寺文書）

#### ○ 「題」 子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之。（『論語』）

#### ○ 「序」 金地院崇伝

天に五星あり、地に五行あり、人に五常あり。衆星の中、北辰を以て至尊となす。……独り天の中央に居て、動かず映らず、……名づけて北極という。……政を為すに徳を以てす。徳は万物の性、……天命これを性という、……徳を施し政を施せば、寸歩も動かさずして天下を御す。……四海を掌し、万邦帰伏し、異域来享す。戈を動かさずして、坐して太平を致す……。

#### ○ 「文」 東福寺令柔

為政の初章を以て君の政徳に擬すれば、則ち、君は北辰にして、北辰は即ち是れ君なり。

○ 「文」天龍寺玄光

北斗の衆星の王たり。有徳の君主の世に於けるや、猶ほ、天の北斗の其所を動かざることし。誰か之を仰がざらんや。

○ 「駿」林道春（羅山）

駿府は鎮東の天府、駿城、惟れ民の向かう所、惟れ人の仰ぐ所、三光とその明を同じくす。

● 『日光山滝尾建立草創日記』

それ滝尾は加美能天皇（嵯峨天皇）の御願、……空海僧都の建立なり。……沙門勝道の歴山の銘を請ふことあり。これに依りて和尚、……弘仁十一年七月廿六日、当山に下着、……山を二荒と号す。和尚……改めて日光山と云う。……。

離布畏岩（現・仏岩）より北方に去ること十八九町、一滝有り……八葉の蓮池あり。和尚、結壇して仏眼金輪の法を修せり。……池の水を分けて一白玉出生せり……「我は是、天補星なり」と。……寺中に建興して王子となし小玉殿と号せり。次に呪を誦し神を召請するに、池中に白玉現はれり。……「我は是、妙見尊星なり。……我を以て、中禪寺に安住せしめ給へ。末代の時、……我は寺中に還居して、人法を守護し怠慢を禁ぜんと云々。」

# 世界遺産・日光の社寺

## 登録資産

日光の社寺は、東照宮・二荒山神社・輪王寺及びそれらの境内地からなり、その中に国宝9棟・重要文化財94棟の計103棟の建造物群が含まれ、登録遺産（コア・ゾーン）の面積は約50ヘクタール、周辺の緩衝地帯（バッファー・ゾーン）約373ヘクタールに及ぶ。

## 主な資産（◎国宝・○重文・☆附）

- 東照宮 ◎本殿・石の間・拝殿、◎正面・背面唐門（2棟）、◎東西透塀（2棟）  
◎陽明門、◎東西回廊（2棟）  
○上社務所、○神楽殿、○神輿舎、○鐘楼、○鼓楼、○上神庫、○中神庫、  
○下神庫、○水屋、○神厩、○表門、○五重塔、○石鳥居、○坂下門、  
○本地堂、○輪蔵（経蔵）
- （奥社） ○奥社宝塔、○同唐門、○同石玉垣、○同拝殿、○同銅神庫、○同鳥居、  
○同石柵、○旧奥社唐門、○同鳥居
- （御仮殿） ○仮殿本殿・相の間・拝殿、○同唐門、○同掖門・透塀（2棟）、  
○同鳥居、○同鐘楼
- （御旅所） ○御旅所本殿、○同拝殿、○同神饌所
- （附） ☆鐘舎（朝鮮鐘）、☆灯台穂屋（吊灯笼）、☆灯台穂屋（回転灯笼）、  
☆銅神庫（銅庫）、☆渡廊（素木廊下）、☆銅庫門及び板塀、  
☆非常門及び銅板塀、☆内番所、☆西浄、☆東通用門（社家門）（10棟）

計 42 棟

- 輪王寺 ○三仏堂、○相輪棠、○本坊表門、○開山堂、○常行堂、○法華堂、  
○常行堂法華堂渡廊、○護法天堂、○観音堂、○三重塔、○兎玉堂
- （大猷院） ◎本殿・相の間・拝殿  
○唐門、○瑞垣、○掖門、○御供所、○御供所渡廊、○夜叉門、  
○回廊（2棟）、○鐘楼、○鼓楼、○二天門、○西浄、○水屋、○宝庫、  
○仁王門、○皇嘉門、○銅包宝蔵、○奥院宝塔、○同鑄拔門、○同拝殿、  
○別当所龍光院
- （慈眼堂） ○慈眼堂廟塔、○同拝殿、○同経蔵、○同鐘楼、○同阿弥陀堂

計 38 棟

- 二荒山神社 ○本殿、○唐門、○掖門・透塀（2棟）、○拝殿、○神輿舎、  
○鳥居（3棟）、○神橋
- （別宮） ○滝尾神社本殿、同唐門、○同拝殿、○同楼門、○同鳥居
- （別宮） ○本宮神社本殿、○同唐門・透塀、○同拝殿、○同鳥居
- （末社） ○大国殿、○朋友神社本殿、○日枝神社本殿

計 23 棟

総計 103 棟（113 棟）

## 世界遺産としての価値（i・iv・viに該当）

- ①建造物の多くは、17世紀の日本を代表する天才的な芸術家の作品であって、高い芸術的価値を有する。
- ②東照宮と大猷院は、近世宗教建築の「権現造」の形式の代表例であり、また、その建築群は、日本の古い形態の建築様式を知るうえで重要な見本ともなっている。
- ③日光山内は、将軍の社参や、朝廷からの例幣使の派遣、朝鮮通信使の参拝などが行われ、江戸時代の政治体制を支える重要な歴史的役割を果たした代表的な史跡である。  
また、建造物群をとりまく自然環境と一体をなしており、文化的景観の頭著な事例である。

## 登録が遅れた理由

日光の社寺は、平成4年に文化庁が発表した暫定リストに載るが、山内の史跡指定がなされていなかったために登録が遅れ、10番目となった。日光杉並木街道については、検討したが未解決の問題が多いため、今回の推薦には含めなかった。追加登録すべしとの声が上がっている。

## 史跡指定問題

東照宮などのある日光市山内については、昭和30年、国の文化財保護審議会が指定を答申した。東照宮は賛成の立場を取ったが、反対するものもあり指定出来なかった。

反対の主な理由は、社寺は国の文化財に指定されており、また、該当地域は国立公園の中にあり、保存管理の体制は整っている。地域内には一般住民が暮らしており、これ以上の規制が加えられると、日常の生活にも支障をきたす、というものであった。

文化庁は、その後も何度も指定の問題を提起したが、指定出来ずにいた。世界遺産の暫定リスト発表後、日光の社寺の世界遺産登録推薦には、史跡指定が前提条件であることが認識され、漸く史跡指定を受け入れた。

## 登録推薦の条件（日本の文化遺産の場合）

- ①建物の場合は、国の文化財の指定を受けていること
- ②指定物件の存在する地域が、史跡の指定を受けていること

## 推薦書の内容（日光の社寺の場合）

- |               |                                      |
|---------------|--------------------------------------|
| ①資産の特徴        | 名称・所在地・資産範囲・緩衝地帯。                    |
| ②登録の価値証明      | 登録基準に合致する資産の価値の説明など。                 |
| ③資産の内容        | 現況・歴史・具体的な物件の逐一の説明。整備・活用に関する施策・計画など。 |
| ④資産の管理状況      | 法的な位置づけ。管理計画の内容。保存技術など。              |
| ⑤資産へ影響を与える諸要素 | 開発・環境悪化・自然災害・観光による影響の有無とその対策など。      |
| ⑥モニタリング体制     | 管理体制・保存状況の測定の指標や調査項目など。              |
| ⑦史料           | 物件の写真・ビデオ、管理計画など。                    |

## 日光山の史跡指定の主な理由

- ①宗教的霊地として、8世紀末の日光開山以来、1200年の歴史を有し、古くから山岳信仰の聖地となり、自然環境と一体となって、神道・仏教・徳川家墓所の複合した宗教的霊地としての日光山の歴史を現在まで継承している。
- ②徳川幕府の創立者である徳川家康を祀る東照宮が造営されて以後、日光山は江戸時代の政治体制を支えるための極めて重要な歴史的役割を果たした。
- ③明治初年の神仏分離実施以後も、日本宗教の特質である神仏混交の歴史を現す顕著な事例である。
- ④古代以来の日本的宗教空間を継承し、神道や仏教をはじめとする宗教儀礼や行事が受け継がれ、市民の生活や精神の中に文化として生き続けている。

## 日光山の歴史的役割（主なもの）

### \* 将軍の社参

元和3年以降、計19回。日本の歴史上最大規模の行列。秀忠4回、家光10回、家綱2回、吉宗・家治・家慶各1回。将軍は、岩槻・古河・宇都宮・壬生の各城を宿泊。御三家を始め諸大名もお供をして参拝。国家的大行事である。

### \* 例幣使の参向

朝廷よりの奉幣使（勅使）。元和3年以降、特別の年に参向。正保4年（1747）からは毎年（例幣使）。江戸期では日光と伊勢だけに派遣された。一行は約50人。沿道の各地に京都の文化を伝播。通行路のうち中仙道倉賀野宿からは例幣使街道の名がある。

### \* 朝鮮通信使参拝

江戸時代を通じて12回来日。一行の人数は500人程。日朝の文化交流に大きな役割を果たした。日光には寛永13・同20・明暦元年の3回参拝。東照宮で朝鮮式の祭祀を行うなど、極めて特異な意味を有する。その時の、釣鐘や灯籠などの進物が現存。

### \* 琉球使節参拝

王国体制を残したまま薩摩藩の支配下に置かれ、王の襲祚（恩謝使）と将軍の襲職の際（賀慶使）に遣使。江戸時代を通じて18回「江戸上り」をしている。そのうち正保元年（1644）、慶安2（1649）、承応2（1653）の3回、薩摩藩主の引率で東照宮と大猷院に参拝。銅製花瓶や香炉等を献上。行程は朝鮮通信使に同じく、糟壁（春日部）・小山・宇都宮・今市宿に宿泊。一行は百人前後、薩摩藩士が先導・警備に当たった。

### \* 諸大名他の参拝

幕府は諸大名や旗本等の東照宮参拝を奨励。各大名は山内に宿坊を定め、その領民も同坊を利用する。旗本以下の幕臣や江戸の町民は町内に止宿した。元禄期の東照宮の記録には1日5千人、10日間で数万に上るとある。

### \* 造営物資の運搬と工人の通行

元和創建以降、造営工事のための往来は、街道や宿駅の整備、また周辺の町村に経済的・文化的に多大な影響を与えた。当時、東照宮の造営や修理に携わることは職人のステータス・シンボルであり、建築資材の産地では、それがブランドとなった。

\* 日光火之番八王子千人同心の赴任

家康公によって召し抱えられ、甲州口の警備のために八王子に配置された旧武田家の遺臣「千人同心」は、大猷院創建時に「日光火の番」が命ぜられ、日光山内の防火・防災の任に当たった。町内に火の番屋敷があり、定期的に山内を巡回。我国の常備消防として特異な存在。慶安5年（1652）、当初は2組100人が50日交代。寛政3年（1791）に1組50人が半年交代となり、慶応4年（1868）まで216年間続いた。

\* 尊徳仕法の実施

江戸後期、日光神領内の農地荒廃の復興のため、農政家の二宮尊徳を幕府が招請。嘉永6年（1853）から始まり、安政3年（1856）尊徳没後は子息の弥太郎が引き継ぐ。

尊徳葬送の地（日光市今市）には墓所と二宮神社が建立された。

\* 戊辰戦争

慶応4年（1868）4月29日、日光山に籠もる旧幕府軍と新政府軍が日光・今市の境で対陣。日光を戦火から守るための交渉が成立し、旧幕軍は会津へ転進、新政府軍は今市へ退去。これ以後、主戦場は会津へ移るが、神領地域内では、なお戦闘は継続した。

## 東照宮のコスモロジー

何故、東照宮は日光に創建されたのか？ その根底には壮大なコスモロジー（宇宙論）が秘められていた。しかし、これまで、東照宮、或いは徳川政権に対する偏見があったことと、東照宮の創建が「徳川家康を尊崇する人々の手によってなされた」と言う、自明の事実を無視したために、重大な点が見落とされていた。

- ◎ 幕府建立の東照宮
- 〔遺言〕 日光・久能山（元和3年建立）  
芝増上寺（安国殿）・岡崎大樹寺
  - 〔秀忠〕 江戸城内（元和4年）
  - 〔家光〕 世良田・鳳来山・岡崎（滝山）・上野寛永寺

◎ 主要東照宮社殿の方位と配置

久能山東照宮	本殿	=	南南西向	拝殿	←○→	神廟
	神廟（墓）	=	西向	○→		鳳来山・岡崎・京都
	社殿の軸線	=	北北東	○→	富士山	→ 世良田 → 日光
日光東照宮	本殿	=	南向	(江戸)	←○→	北極星
	奥社（墓）	=	南向	(江戸)	←○→	北極星
	社殿の軸線	=	北北西	江戸	←○→	本殿 → 奥社
江戸城紅葉山東照宮		=	北西	○→		世良田
同 天守閣		=	南向	○→		日光

◎ 徳川家康と北極星（天道思想）

☆ 「慶長十九年五山衆試文稿」（南禅寺文書）

京都五山の僧 18 人に「為政以德。譬如北辰居其所而衆星共之」（『論語』）を題材にした作文を命じる。彼らは、天道思想を背景に家康公を北極星に見立て、徳川政権を讃えた。これらの詩文に、崇伝と林羅山が序と跋を加えた、20 編の詩文からなる。

◎ 星辰信仰 一般に、我が国では星辰信仰は希薄であったとされてきたが、それは全くの誤解で、特に、天皇の存在や「治天下」の思想、権力者としての「天下人」の名称など、極めて重要な位置を占めていた。

北極星 妙見・太一・北辰と称し、諸星の中心であり、天皇大帝（天帝＝宇宙を支配する神）の住居とも、天帝そのものとも考えられた。

北斗七星 古代にあっては、天帝を助ける臣下とされた。また、天帝の乗る車とも考えられ、天帝はこれに乗って宇宙を巡るとされた。山王神道では「天に在りては七星と名づけ、地に在りては七社明神と号す」（『溪嵐拾葉集』）とあるように、山王七社に見立てられた。

斗（杓）と柄の七星の内、一番目を「魁」、六星を「文昌星」と称し、学問を司るともされた。

一般には、一番目から貪狼・巨門・禄存・文曲・廉貞・武曲（輔星）・破軍と呼ばれた。破軍星は「剣先」とも称し、この星が指し示す方角によって時間（夕刻、春は東天に上り、秋は西天に沈む）を知った。

輔星 北斗七星の6番目の星の脇にある星で、西洋では16世紀頃に発見されたが、東洋では古代から知られており、例えば現存する世界最古の天文図であるキトラ古墳の石室の天井画にも描かれている。

「妙見の輔相」また、「妙見と北斗、並びに輔星は一体分身」（『覚禅鈔』）と考えられ、摩多羅神と習合された。

摩多羅神は人の生死を司る神とされ、輔星の光が弱々しい時は生命に危機迫ると判断された。

本命星 人々の運命を司る星で、一般の人は生まれ歳に応じて、第一星から順に子・丑・寅と、七星の一つが配当された。但し、天皇のみは北極星を本命星とした。

本命星を祀る儀式を属星祭と称し、長寿を祈った。

金星 求聞持法（記憶を高める呪法）の本尊とされ、虚空蔵菩薩に習合され、一

般には知恵を授ける神と考えられた。明星信仰

二十八宿 月の所在と星座の関係から、宇宙を28に分割する。  
四宮（青龍・白虎・朱雀・玄武）を七分割したもので、月は1日に1宿を移動するとし、これを「一月」とする。

◎ 天道思想 地上の支配者として天帝から選ばれたものが天下人で、これに、相応しくないと判断されると、天帝は命令を改め（革命）るので、政権の座から追放されることになり、これを天罰という。このような考え方を「天道思想」と呼び、この思想は戦国時代から江戸時代の武将達に信奉された。

〔関連用語〕

- ※ 天道＝一般には天地自然の道理、宇宙の法則を意味する。
- ※ 皇帝＝皇は美しくて大なること、帝は徳の天に合する意。  
天下人の称号として秦始皇帝が使用。
- ※ 天皇（すめらみこと）＝天皇大帝の略、我が国では大和朝廷の大王の呼称として6世紀頃から用いられた。
- ※ 天子＝天帝の子
- ※ 天帝の座である宮殿を紫微垣と呼び、それで天子の宮殿（我国の所、中国の故宮、朝鮮の宮殿など）もこれに倣って北を背にして建てられた。  
＝「天子南面」（北を背にして座すことが秩序の根本）
- ※ 大極殿（天皇の公式の場）・紫宸殿（天皇の私的な居処）

◎ 東照宮の相殿神

相殿神	山王神（山王七社）・摩多羅神（正体不明）
三幅対の御画像	左右の山王・摩多羅神に北斗七星（＋輔星）を描く
見立て	東照大権現（北極星）・相殿神（北斗七星・輔星） → 御神像を祀る祠を御空殿と称し、周囲には28宿を描く

☆ 明治の神仏分離により、祭神名の変更が命じられ、山王神は豊臣秀吉、摩多羅神は源頼朝となった。

◎ 日光と星辰信仰

勝道上人	日光開山 明星天子（金星）の導きにより出家、更に日光開山を志す。 大谷川を渡るために聞持呪（求聞持法）を修し、出現した深沙大王の助け「神橋伝説」で日光山に至る。後、明星天子を祀る星宮と深沙王を祀
------	---

る深沙王祠が建てられる。

弘法大師

日光改名

真言宗の開祖。高野山を開き、勝道上人の伝記(『沙門勝道歴山瑩玄珠碑』)を著す。伝説では、来晃の折り滝尾神社等を創建し、二荒山を日光山と改めたとされる。その時、滝尾に妙見尊星と天補(輔)星が大小二つの玉となって出現したと伝える(中禅寺妙見堂・小玉堂の由来)。



## 基調講演

②

# 「歴史資源を生かした広域観光振興」

日光市長

瀬高 哲雄 氏



皆さま、こんにちは。ご紹介いただきました、日光市長の瀬高です。高藤先生からバトンを頂きまして、非常に興味深く聴かせていただきました。日光は歴史文化の街ですので、日光東照宮を含めた二社一寺、さらには、日光市の歴史や文化を深く研究されている方がたくさんいらっしゃって、私も講演で色々なお話をお聴きしたことがありますけれども、高藤先生の話が一番面白いです。今日、高藤先生のお話は1時間で、本来であれば、1時間半は、ぜひ皆さんにお聴きいただけたらと思ったのですが、時間の都合もありますので、私からはここからの20分間をお預かりして、高藤先生のお話と、この日光市の歴史を基に、日光市として二社一寺のみならず、この歴史資源を生かして、今、どういう日光市の観光行政の現状を迎えているかを短くまとめさせていただきたいと思っていますので、お付き合いいただきたいと思います。

ご紹介いただいたとおり、まず、私のプロフィールですが、昨年5月に、市長に就任をさせていただきました。私の大きな施策としては、やはりこの日光市の観光を基幹産業として、まだまだ発展させていきたいという思いです。細かい数字は後で出てきますけれども、今、日光市は1,000万人を超えるお客さまに来ていただいています。関東で言えば、箱根が約2,000万人、鎌倉が約1,500万人です。京都まで行きますと、約5,000万人がいらっしゃっています。私の一つの目安としては、日光市の観光客入込数ピーク時の1,200万人を目指して観光行政、観光振興を図っていききたいというところです。

次に日光市の概要です。これも皆さん、栃木県のご出身の方で意外と知らない方がいらっしゃるのですが、日光市は栃木県のほぼ4分の1の面積を占めます。全国で3番目に広いです。ちなみに、面積は「約1,450 km<sup>2</sup>」とありますけれども、一番広いのは岐阜県の高山市です。2番目が静岡の浜松市です。そして日光は全国で3番目、4番目が北海道の北見市です。

我々行政からしますと、正直なところ、面積が広いのはメリットデメリットがあります。あえてデメリットをこの場でお話させていただければ、やはりインフラの整備は、広ければ広いほどコストがかかりますので、日光市の財政としては非常に厳しい状況を迎えています。道路や橋の

更新、老朽化もそうですし、今問題になっている上下水道も、やはり日光市全てをしっかりと整えていかなければいけませんので、やはり広いとコストがかかってきます。ただ一方で、まさに今日の話になりますが、観光の視点ではこれだけ広いので、歴史資源も含め、とにかく日光市は全国でもトップクラスの観光資源を有しているということで、やはり観光のメリットで言えば、これはすごく大きいと思っています。

日光市は、観光のエリアが5つに分かれます。2市2町1村が合併した時の各地域に分かれるのですが、旧日光エリアは、今、高藤先生がお話していただきました日光東照宮を中心に、世界遺産登録になっています日光山輪王寺、さらに日光二荒山神社もあります。そして神橋です。ここがやはり日光市の観光の大きな核になっています。さらにいろは坂を上りますと、日光国立公園のメインとなる中禅寺湖、戦場ヶ原がある奥日光エリアへと入ってまいります。戦場ヶ原はあのラムサール条約湿地にも登録されており、これから5年後、10年後の日光市の観光を考えますと、もちろん歴史資源も非常に重要なのですが、いわゆるこの奥日光と言われる地域は、大きな顔になってくると思っています。

実際にご存知の方もいらっしゃると思いますが、知事が公約で、いろは坂に新交通モビリティシステムを導入するというので、今、地元と、民間事業者を入れて、導入に向けて、前に進めようとしているところです。この他にも、数年前にリッツカールトンという本当にブランド力の高いホテルが入ってきていただいたほか、ここ数年のうちで、ハイクラスの高級ホテルが中禅寺の周辺にできる予定になっています。ですので、ここ数年で本当に、このエリア周辺の観光環境がガラッと変わって、いわゆるラグジュアリーな、高級リゾートの顔になってくる、日光市の顔になってくるのが、この中禅寺、奥日光であると思います。

この他にも、鬼怒川・川治エリアは、ご存知のとおり東京の奥座敷と言われている鬼怒川温泉があります。そしてさらに奥に行きますと、川治温泉です。各テーマパークもそろっています。そして、足尾エリアです。これは意外とまだ知られていないのですが、昨年、足尾銅山記念館がオープンしました。ここでは、銅山を中心とした足尾の光と影と言われていることを紹介しています。光の部分で言うなら、近代産業を引っ張ってきたのは、今の足尾銅山と言われていることで、その創業者である古河グループの功績を示した記念館であります。これも銅山観光とあわせ、足尾の大きな観光資源になるものです。この他、今度は鬼怒川・川治エリアからさらに奥に行きますと、湯西川・川俣の温泉郷があります。そして現在、日光の中心は今市にありますけれども、ここでメインとなるのは日光杉並木街道です。この後少しお話しますが、昨年植樹400年記念を迎えまして、各種イベントを開催させていただきました。

このように、合併前の各基礎自治体において、一つひとつ、ポイントとなる観光資源がたくさんあります。歴史の資産、温泉、テーマパーク、さらに自然と、これだけ多くの観光資源を基礎自治体として有しているのは、全国でも日光がトップクラスと自負をしているところです。

次に、実際の日光の観光客入込数です。コロナ禍で一時的に減少しましたが、一昨年、やっと1,000万人を超えました。一番の速報値で、昨年（2025年）の1月から12月までの入込数は、前年度よりも50万人ほどプラスになる見込みです。おそらく1,070万人ぐらいまで回復してくるの

ではないかと思えます。ただ、ピーク時の入込数は1,200万人を超えていますので、冒頭でお話をしましたとおり、まずは直近でこの1,200万人を一つのベースに、さらに観光の振興を進めていきたいのが、当市の現状です。

次に、宿泊客数です。これは、実は日光市の一つの課題でもあるのですが、去年は290万人のお客さまにお泊まりいただきました。これも一昨年から昨年と、さらに数字は上がっています。上がっていますけれども、この部分はまだ伸びしろがあると言われていています。やはり、日光市のこの宿泊数がなかなか戻らないのは、都内から日光へ行って、その日のうちに帰ることができるというところなんです。交通条件が逆にいい分、帰ってしまうところが一つの要因です。あとは、夜のお店や飲食店が非常に少なく、滞在時間が短くなってしまっているところも、一つ、課題で挙げられているところです。

加えて、外国人の宿泊客数です。これも先ほど、全体では今、290万人と言われてはいますが、そのうちインバウンドのお客さまが、14万人しかいないのです。これはやはり全体の数字からしても、外国のお客さまはどんどん増えて、右肩上がりなのですが、宿泊客数としては足りない部分があります。いかに、このインバウンドのお客さまにも滞在をしてもらうか、さらには、日光市の歴史資源も含めて、国内、世界にいかにも魅力を発信をしていくかです。昨年、私はタイにトップセールスに行かせていただいて、今年は台湾に行く予定です。日光市のしっかりとした歴史資源観光資源を、世界に発信をしていきたいと思っていますところです。

今、当市の宿泊客数の水準は、去年の294万人です。ちなみに、栃木県全体でどういう数字かと言いますと、那須町で202万人、宇都宮で189万人です。これは栃木県で言えば、日光を含めベスト3です。このうち外国人の宿泊者数は、日光市では今、申し上げたとおり14万人です。宇都宮で6万人、那須町で1万5,000人です。

では、日光市で、どの国からのお客さまが多くお越しにいただいているかと言いますと、第1位がこの台湾です。2位が中国本土です。3位がアメリカです。実はここには隠れていますが4位には、昨年私がトップセールスに行かせていただいたタイが入ってきています。今、国際関係も含めて、中国のお客さまがなかなか日本に来ていないというお話ですけれども、日光に関しては、一度、少し前にも中国との関係が悪化して、団体のお客さまが一切来なくなったことを実は経験しているのです。ここ数年で、もうすでに、各事業者はその時点でお客さまが分散化をしているものですから、日光市に関してはこの中国のお客さまが、今、日本に来ていない影響はかなり少ないです。リスク管理は、もうすでに日光市に関してはしっかり出来上がっています。当然、ゼロではありません。ゼロではないのですけれども、そこまで大打撃を事業者に与えるようなほどの、この今の観光に関わる悪化は、日光市においては影響がないのが現状です。

日光の観光の一つの強みは、まさしく今日のテーマである歴史です。いわゆる文化資源、歴史資源があるのは圧倒的な強みです。これはぜひ資料を見ていただきたいのですが、何のホームページかと言いますと、日本政府の観光局で最初にボンと出てくる絵です。これは今、日本語ですが、英語なら英語、他の各国の言葉にも変わって出てくる地図です。これを上からずっと見ると、東京や福島、青森を含めて、都道府県名です。日光市は、単独で名前を出していただ

いて、海外に宣伝していただいています。なぜ日光市が単独で出ているかと言いますと、伊勢志摩なども単独で出ていますが、これはやはり、ただ自然や、いわゆるテーマパークの部分のみならず、今日のテーマでもあるこの歴史です。自然を含めてのこの強みが、圧倒的に日光としてはあります。これが海外に売り込む一つの大きな強みで、あえて、この日光を単独で地図に載せていただいているところです。

実際に、どう紹介していただいているかと言いますと、「壮大な建築」そして、「長い歴史、ありのままの自然が融合する場所」と、日本の観光局が紹介しています。これは、圧倒的な歴史の資源がある観光自治体としての強みが、特徴になっていると思っています。

次に、これは少し古い情報なのですが、外国人のお客さまが選ぶ日本の観光地ランキングです。これはいろいろなランキングがあります。旅行会社や雑誌なども含めてそうですし、それぞれ国が出しているものもありますし、いろいろなランキングがありますが、この2020年の「訪日ラボ」で見ますと、1位、2位、3位、4位、5位と歴史的な建造物のあるところですよ。伏見稲荷などもそうですし、奈良の東大寺、そして兼六園です。日光市は、全国でこの日光東照宮が7番目にランクインしています。これが一つ、本当に大きな強みというところがあります。これぐらい、外国人の観光客のお客さまにも選んでいただける強みが、この日光市にはあるということです。

「日光の社寺」が世界遺産登録になりまして、25周年を一昨年を迎えました。歴史・文化施設のみならず、やはり世界遺産に登録されている強みも、正直、圧倒的に価値があると思っています。先日も首長の座談会がありました。ある雑誌の収録だったのですが、富士山を有している富士宮市、それに奄美大島の奄美市、あとは金山と、トキがいる佐渡市です。この4人の首長で、世界遺産の座談会をやりましょうというお話があったのです。世界遺産を抱えている自治体として、いわゆる今日、高藤先生がしていただいた徳川家康にまつわるお話ではないですが、「自然」の世界遺産と「歴史、文化」に関わる世界遺産には違いがありました。もちろん、自然遺産は大変素晴らしいと思いますけれども、歴史・文化には、ストーリーがあります。今、観光は、お客さまはストーリーを求めるところもありますので、日光東照宮、徳川家康にまつわるこのお話はストーリーがあって、ロマンがあります。実際にそれを聞いて、生で見るといって歴史文化は、圧倒的に世界遺産の中でも、非常に強いものがありますし、日光市の、最大の強みと実感をしています。「日光の社寺」世界遺産登録25周年も本当に多くのお客さまにお越しいただきました。

もう一つ、昨年、世界遺産登録25周年に合わせて、日光杉並木の植樹も400年を迎えました。松平正綱公が、約20年の歳月をかけて植えたという日光杉並木街道です。この杉並木街道は、国の特別史跡と特別天然記念物の二重指定を受けています。これは日本でここだけです。かなり特異なものになっています。私も実は、市長になる前から、この杉の「並木守」という県の事業で、ボランティア活動をさせていただいています。杉並木のごみ拾いや、草刈りなどをやる事業で、ボランティア団体を県がつくっていて、私も登録をしています。

このボランティア団体のすごいところは、ちょっとお恥ずかしい話にもなりますが、そのボランティアのメンバーには、地元の方が少なく、市外の方、さらには県外の方がたくさんいらっしゃるのです。私が同じグループでやっている方たちと色々とお話をさせていただきますと、や

やはりこの杉並木の価値は、地元の方たちよりも、外からこの日光市に来て、杉並木を歩き、歴史を知って、そこにまた結び付いている日光東照宮の歴史に惚れ込んで、ぜひ自分もこの杉並木の保護活動をボランティアとしてやりたいという方たちが、たくさんいらっしゃいます。この部分においても、この日光杉並木街道、さらには日光東照宮の価値は、逆に言えば、市外県外の方たちにより、より一層価値があるものになっていると、私も肌で感じているところです。

結びになりますが、この後、パネラーとして私もお話をさせていただきますけれども、今日の一つのまとめをさせていただきます。この観光資源を、歴史の文化資源を生かして、どう広域の観光の仕組みをつくっていくか、連携を図っていくかということが重要になります。日光市の観光としては、昨年、宇都宮市さんと連携を図らせていただきまして、MICE 誘致の取り組みをスタートさせています。これは、各団体の会議はライトキューブで開催し、アフター観光は、ぜひ日光市にお越しいただくという連携になります。今日は、宇都宮市の職員の方もいらっしゃっていますけれども、やはり大谷、宇都宮にも美味しい食べ物がたくさんありますし、大谷の観光が今、どんどん伸びていて、素晴らしいと思っています。しかし、会議を含めてのトータルで考えると、開催地へ人を呼び込む、アプローチする材料が少し少ないと感じています。そこに日光市の観光を加えることによって、より強みのあるこの MICE 誘致ができるのではないかとということで、日光市と宇都宮で連携を図り、この取り組みを実際にやらせていただいています。これが、今後、広域連携の一つのモデルケースになると思っていますし、この後のパネルディスカッションでも、他の自治体とどういう連携を図れるかというお話をさせていただきたいと思っています。

ただ、あえて最後にお話させていただきますが、日光市はもともと「殿様商売」と言われてきました。聞いたことがある方もいらっしゃると思います。日光東照宮をはじめとする二社一寺がありますので、何もしなくてもお客さまが来る地域であり、「日光市」は「日光市」ですという考え方が、もともと根底にあったのです。これはもう有名な話ですから、地元でよくお酒の席などで、昔話で出てくるのですが、40年か50年前には、お店の会計の隣に段ボールがあって、お客さまがどんどん来ると、札束をその段ボールに入れて足で踏みつぶしながら商売をしていたぐらい、儲かっていたという時代があったのです。そして、夜になると段ボールに詰まった札束を持って夜の店に出て行く、そういう時代が日光にもあって、経験や歴史があるものですから、日光市においては二社一寺中心に、特にセールスやプロモーションをしなくても、いつでもお客さまが来ますということも含めて、殿様商売と言われてきました。「どことも連携しなくていいです」、「我々は我々で、観光で食べていけたらいいのです」ということが、これまでの観光の根底にあり、観光行政においてあぐらかいていた時期があったものですから、やはり観光のお客さまが減る時期があります。そこで初めて、今、この厳しい観光地間の競争も含めて、やはり日光市も他の地域と連携する、日光市の観光の磨き上げをしてプロモーションをどんどん国内・海外に発信をしていくなどの流れに、間違いなくなっています。そして、私もその先頭に立って、トップセールスをやっていきたいと思っています。

この広域連携の話は、皆さん、多分10年前でしたら、全然、日光市も話に乗っていなかったというのが現状だと思っているのですが、今のこのタイミングでいけば、ぜひ他の自治体

と連携を図らせていただいて、そしてお互いにウィンウィンで、日光市にお客さまをいただく、さらには、日光市のお客さまを他の地域に広げていくという広域連携のルートなどもつくっていきたくと思っています。この後のパネルディスカッションでもそのあたりのお話を、ぜひ私もしたいですし、他の自治体の方たちのお話もお聞きしたいと思っています。引き続き、この後のパネルディスカッションもよろしくお願ひしたいと思っています。

ここまで、短い時間ではありましたが、日光市のこの現状を皆さま方にお伝えさせていただきました。日光市の観光が発展することによって、ひいては、栃木県のブランド向上にもつながってくると思っていますし、栃木県全体の観光の発展にもなると思っています。私もトップとして、先ほど高藤先生の最後の結びで、政治は結果責任とありましたが、市長になって、まだ1年弱ですけれども、政治の場から最後に出る時に、本当に結果が残っている、そして皆さんに、市長はよく仕事をして結果が残ったと思っただけのように、努力をしてまいりたいと思っています。引き続き、皆さま方のご支援とご協力を賜りたいと思っています。私からは以上です。ありがとうございました。(拍手)

## パネルディスカッション

# 第2回 「とちぎ SHOGUN 物語」 シンポジウム



### パネリスト

- 瀬高 哲雄 氏（日光市市長）  
松井 正一 氏（鹿沼市市長）  
馬場 将広 氏（宇都宮市総合政策部振興担当副参事）  
野尻 博之 氏（栃木市東京サテライトオフィス所長）  
菅沼美智子 氏（小山市総合政策部総合政策課 連携・協働調整担当）  
尾上 仁美 氏（小山市立博物館学芸員）  
落合 正浩 氏（壬生町東京サテライトオフィス所長）  
藤栄友里絵 氏（壬生町歴史民俗資料館学芸員）  
齋藤 恒夫 氏（栃木県生活文化スポーツ部文化振興課課長補佐）

### 司 会

- 須賀 英之 （宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長）

### ■須賀

本日は、六つの自治体と、そして栃木県からもお越しいただいています。前半と後半に分けて、5時半までとします。

まず各自治体の皆さまから、有する歴史資源、特に日光東照宮につながる資源について、どういう取り組みをされているか、ご紹介をお願いします。後半では、各自治体が連携した観光振興、MICE のアフターコンベンションも含めて、どのようなことができるのか、また、この圏央まちづくり協議会に対する期待です。

では、各自治体からお話をいただきます。

## ■落合氏

壬生町の落合と言います。私は東京サテライトオフィスで、東京で壬生町や栃木県のことをお話ししながら、ご縁をつなぐ仕事です。今回のタイトルは、「～江戸から日光へ～」となっているのですけれども、逆に、私は壬生から江戸に通いで行ってしまして、毎朝、新幹線で行って、何か東京で良いネタはないかと探して帰ってきています。また逆に、壬生のPR、かんぴょうをちょっと配った時に、全く知られていなくて。これは私のお手製なのです。自分で作ったハンドメイドの、愛用アイテムなのですけれども、こういうものを持ち込んでいって、いかにして知ってもらって、興味を持ってもらって、そこから壬生につなげるというやり方で仕事をしています。とにかく東京の人に、まずは、壬生のことを興味持ってもらおう仕事をしています。

## ■藤栄氏

壬生町の歴史民俗資料館で学芸員をしています、藤栄と申します。壬生と言いますと、日光までの聖地への道のりで、繁栄していった町と言えらると思います。日光東照社を秀忠が造営した際に、その副総督、副監督に壬生の藩主が任命されたということで、そのつながりから将軍のお泊まりになる壬生町がつくられまして、周辺城下町、宿場町が栄えました。将軍が泊まるに値する、安全に泊まれるお城にするために、こういうふくべや殖産興業に力を入れました。外国の脅威が迫ってきた時には、西洋の蘭学、西洋医術、西洋砲術を広めまして、今の医科大学さんがありますように、医業の町、壬生につながる原点となっています。

日光と言いますと、江戸までのつながりがよくPRされるのですけれども、壬生は明治になりまして徳川から新しい政府に移り変わった際に、どう日光をPRするかで、壬生の侍が日光で町おこしをしたという歴史があります。本日、皆さまにお配りした茶色字のチラシは、令和6年に当館で企画展をしたものです。日光にアトリエを造って、外国人避暑地を目的にした観光客の方に対して、絵画や漆器、陶器などを展示即売場で販売した歴史もあります。表面の大きい鳥の彫り物は、現在も金谷ホテルのロビーに展示されている、壬生の方が作った作品になります。

壬生は、やはり聖地への道のりの中で、繁栄してきた町とお伝えすることができると思います。

## ■菅沼氏

小山市総合政策課の菅沼と申します。担当業務は小山市と地域の定住自立圏や栃木県との連携業務、包括連携協定とあって企業さんと連携して、業務を進めていく仕事をしています。小山市と江戸のつながりということで、博物館の学芸員よりご説明させていただきます。

## ■尾上氏

小山市立博物館で学芸員をしています、尾上と申します。専門は江戸時代です。

小山と言えば、中世の豪族である小山氏が一番の推しなのですけれども、江戸時代の担当から言わせていただきますと、日光や家康とのつながりを大切にしています。ピンクの冊子は、小山を紹介しているのですけれども、6ページによくまとまっています。この6ページの上にあります

す小山評定跡は江戸時代の始まりで、小山の推しのポイントになっています。

関ヶ原合戦の直前に、家康は小山にいて、ここで会議を開いたのが小山評定という史跡です。小山まで来ていた理由は、上杉景勝を討伐するためです。ここで石田三成が京都伏見で挙兵したという情報もたらされて、小山に重臣たちを集めて、家康はこれから先、上杉を攻めに行くのか、それとも上方に戻るのかという会議を行いました。結果として上方に戻ることを決めまして、関ヶ原合戦で大勝を得たという事跡があります。小山評定はここ数年前から、話題になっていまして、やっていないという話もあったのですが、私としてはほっとしたこと、結局、やったとわかりましたので、皆さまもそのように覚えておいていただけたらと思います。家康公は小山で会議を行って勝利を得たということで、パワースポット、ラッキースポットと言われています。

その下の2番、小山御殿広場というのは、歴代の将軍たち、特に前半の将軍たちが日光山へお参りする際に、ここに昼食を取るための御殿がありました。小山評定が行われたという事跡から、この場所に小山御殿が造られたと言われています。

4番の乙女河岸も、家康公が小山まで来る時に、荷物や武具などをこちらの河岸で陸揚げした、または、小山から上方に戻ると決めた時に、ここから家康公は船に乗って、江戸まで行ったと言われている場所です。

徳川家康にとってパワースポットである小山なのですが、中世小山氏にとっては、この小山御殿のある祇園城というお城で何度も敗戦しています。その後、江戸時代、小山藩の藩主本田正純は、その後、失脚してしまうという、パワースポットではない点もあります。幕末の戊辰戦争の鳥羽伏見で戦った後、小山で戊辰戦争の衝突が4回起こりまして、いずれも幕府軍が勝っているのです。徳川家にとってはパワースポットと言えるかと思います。ぜひ小山に来ていただけたらと思います。

## ■馬場氏

宇都宮市総合政策部の馬場と申します。東京のサテライトオフィスの方、栃木市、壬生町がいらっしゃる。私も昨年3月までは宇都宮市の東京オフィス所長を務めていまして、昨年4月からは宇都宮で振興担当副参事ということで、大学や宇都宮市とその周辺に立地するR&D拠点とのオープンイノベーションをどう進めていくのかを検討しております。

江戸時代のエピソードです。本多正純の釣天井が有名かと思っています。その他、江戸時代のエピソードになりますと、戸田家の社参を参考にして、平成8年から「宇都宮城址まつり」をやっています。宇都宮市の中では徳川家につながる取り組みとして、今も続いているのです。

私は、街づくりに携わっていることが長かったので、本多正純の町割りを挙げたいと思います。日光街道と甲州街道の付け替えをするなど、街の形が400年たった今も、宇都宮には連綿と生きています。宇都宮市の都市構造として、三つの環状線があって、12の放射道路があり、一般的には3環状12放射と呼んでいますけれども、その1つの都心環状線が開通します。そういう町割りが、今も続いています。江戸時代に造った区画がその後の町づくりに与えた大きな影響を実感しているところです。

## ■野尻氏

栃木市東京サテライトオフィスの野尻と申します。私も落合所長と同じように、CIC Tokyo を拠点に活動しており、私は週の半分通っていきまして、残りの半分は市役所で勤務しています。栃木市として都内にサテライトオフィスを設置している目的ですが、栃木と聞きますと、皆さん、栃木県を連想される方がとても多くて。栃木市をいかにPRできるか、あとは、企業誘致活動や移住定住促進などの活動をしています。

栃木市は日光例幣使道の宿場町として、また、まちの中心部を流れる巴波川によって栄えました。巴波川では、「蔵の街遊覧船」など、その歴史を体感できる観光資源があります。日光例幣使道につきましては、倉賀野のほうから栃木県内ですと足利市、そして佐野市、栃木市、鹿沼市、日光に続く道となっています。そういった歴史的なストーリーが残されています。例幣使道、宿場町として賑わいがあった名残と言いますか、和菓子屋さんが多いことも含め、街並みや景観など、歴史を知るうえでは重要で、観光の目玉でもあります。

江戸とのつながりですと、「とちぎ秋まつり」が11月に開催されます。山車が蔵の街大通りを練り歩きます。江戸から静御前の江戸型人形山車を購入して、その後、山車への関心が高まり、各町内が山車や人形を競って製作するようになったことから、「とちぎ秋まつり」は始まっています。豪商が多く、NHKの大河ドラマで「べらぼう」に登場した浮世絵師「喜多川歌麿」ゆかりの地としても知られ、多くのお客さまに栃木市にお越しいただきました。「豊臣兄弟！」の脚本をされている八津さんは栃木市出身です。今日は皆さんと観光の広域連携を学ばせていただきながら、また新たな発見ができればと思っています。

## ■松井氏

鹿沼市長の松井正一と申します。

まず歴史になります。鹿沼市内で、徳川将軍と関連のある場所は幾つかありまして、例えばお寺関係ですと、薬王寺と宝蔵寺があります。薬王寺につきましては家康と家光のいわゆる遺骸、亡きながら日光に運ばれる際に滞在をした記録があります。宝蔵寺につきましては2代将軍秀忠、3代将軍家光が日光社参の帰路に休息をしているお寺です。市内の中央小学校が建っている場所は、4代将軍家綱が日光社参の帰路に休息をした御殿です。御成橋がありまして。これはまさに日光社参、将軍の社参の際に橋が架けられたことから、御成橋、お成りという形で残っています。

「SHOGUN」パンフレットに街道筋の宿場の地図がありますように、鹿沼市内は日光道中の壬生通です。楡木地区、奈佐原地区、鹿沼市区の三つが、鹿沼市内の宿場となります。その宿場跡は地形的にそのまま残っていきまして、今後の歴史的な活かし方を思っているところです。

また、日光道中ですけれども、農産物ですと、8代将軍の吉宗が政策で、朝鮮ニンジンをたくさん作っていたのです。その朝鮮ニンジンを幕府が設置した場所が鹿沼市板荷村です。今は板荷というところですが、ニンジンの製法所が実際にあった記録があります。

江戸から明治に入りますと、幕府の庇護を失い、日光の社寺が厳しい時代があったのですが、社寺の建物、建造物等を保存・修理するために、保晃会が設立をされました。保つという字に、

縦に日光と書いて、保晃会です。保晃会の設立には、栃木県議会初代議長でもありました安生順四郎が携わっていたとありまして、徳川江戸幕府とつながっていると顧みることができました。

現代と日光を考えた場合に、鹿沼市はどう影響を受けてきたかを挙げますと、何と言ってもユネスコ無形文化遺産に指定をされた「鹿沼秋まつり」です。今宮神社祭の屋台行事に尽きると思っています。1608年にお祭りがスタートします。雨乞いのお祭りとして、400年前に、先ほどの瀬高市長のご説明にあったあの杉並木街道です。当時、日光東照宮を含めた、造営に携わられた宮大工が鹿沼にもお住まいになり、その技術を彫刻屋台に注入していただきまして、現在、屋台が鹿沼に27台残っています。県内では那須烏山と鹿沼のお祭りが一緒になっているということで、今年がユネスコ無形文化遺産認定10周年です。

私はイチゴのバッヂを着けているのですが、鹿沼市は「いちご市宣言」をやっています。

「いちご市宣言」10周年という周年行事が二つ続きます。後段の広域連携でも、この歴史という切り口は、鹿沼市にとっても、大切です。

## ■須賀

朝鮮ニンジンのお話が出ましたけれども、このキャンパスは安田財閥の創始者、安田善次郎の家があったところなんです。安田商店が1879年に宇都宮支店をここにつくりまして、鹿沼や大田原の朝鮮ニンジンを横浜から中国に売って、そのお金で、安田銀行、富士銀行、安田財閥、みずほ銀行につながっています。南東北、北関東の産業革命がこの場所から始まったということで、歴史がある場所で、学生たちにも伝えているところです。

## ■齋藤氏

栃木県庁の文化振興課で文化財の仕事をしています、齋藤です。

シンポジウムのテーマになっている街道について、お話をできればと思っています。県教育委員会がかつて10年ほどかけて、県内の街道をくまなく調べました。街道とその道筋の文化財を調べて、何百ページにもなるような報告書があるんです。今、日光街道と呼ばれている街道の江戸時代の正式な名前は、日光道中です。小山から壬生を経由して、鹿沼の楡木を通過して、鹿沼、今市、日光に至る道です。これは、例幣使街道と呼ばれているところもありますけれども、全体の道は、日光道中壬生通りと呼ばれていました。では、例幣使街道はどこなのかとなりますと、群馬県の倉賀野から栃木市を経由して、鹿沼の楡木に至る道が、例幣使道と呼ばれていました。

まず日光街道に注目してみますと、昔の日光街道は現在の国道4号とほぼ同じぐらいのルートをとるのですが、野木町から宇都宮に至るまでを想像していただきますと、川は渡らない。山がないのです。栃木県の南部を縦貫する街道として適地だったと。昔からこの沿線は、遺跡が多い場所なのです。ということは、古くからこういった地形が活用されて、街道になったと。その傍証としては、鎌倉時代のいわゆる鎌倉街道も、ほぼ同じルートを通っているとありまして、県内の大動脈に、なるべくしてなったところかと思えます。宇都宮から日光に至る道を思い起こしていただいても、小さな川はあるのですが、大きな川はありません。山も越えません。そういっ

た形で日光まで至ると、最後に大谷川という川が、聖地を画するかのよう現れるというところで、もうそういった演出的な感じもあるのです。聖地の前で、初めて大きな川が行く手を阻むと。そこには神橋が架けられている。

この街道沿いには、例えば川が両側に流れています。例えば日光街道ですと鬼怒川、あと思川、黒川です。昔は、物資の大量輸送には船が欠かせませんでしたので、河岸という、船着き場ができると。その船着き場が街道と一緒に結節しているという場所が、栃木であったり、壬生であったり、小山の乙女です。

そういったところが、物資の流通拠点になっているわけです。その物資の流通を支える意味でも、街道が重要でした。

日光東照宮の造営が1617年になりますと、その後は將軍社参の道になって、重要になってきます。幕末になるまでに16回社参しているのですが、重要な道は、幕府が直轄して管理するというので、道中奉行の管理となっていました。今で言う、国交省直轄管理の一桁国道のようなものです。將軍社参で言えば、政治の道と言えるかと思います。物資の流通の要になっているところでは、経済の道です。最後にこの街道はやはり文化を伝えた部分がありました。松尾芭蕉ですと、元禄に日光で向かっていますけれども、そのルートは、小山に行きまして、そこから日光道中壬生通りです。壬生を經由して鹿沼、今市、日光へという形で通っています。「日光を見ずして結構と言うなかれ」などという言葉がありますけれども、これはどうも江戸時代に始まったようです。庶民が日光を社参する、参拝する旅行が大変人気だったとありまして、文化や旅行の道という観点もあったかと思います。

道と一口に言いますが、政治、経済、文化・観光といったさまざまな面で、下野を支えていたと言えるかと思います。

## ■須賀

では、ここから後半に。ロマンチック街道のような、各自治体がSHOGUN街道をキーワードにした観光振興やMICEの振興を図れないかということで、例えば県が、以前に東京、江戸から社参ウォークをやりました。ぜひ各自治体だけではなくて、共同で街道のガイドブック、町歩き地図を作る、幾つかのツアーを旅行会社との共同でやってみるなど、いろいろなアイデアがあると思います。

各自治体が連携した観光振興、MICE振興のテーマについてお話いただければと思います。

## ■瀬高氏

広域観光の連携ですけれども、MICEを含めて、宇都宮市とはお互いにウィンウィンで連携を図っています。社参ウォークに続いて、昨年、日光市の杉並木植樹400年のイベントとして県と日光市が連携して、「杉並木ウォーク」を共同で開催させていただきました。定員500名だったのですが、すぐに定員を超える申し込みがあり、募集停止になりました。それぐらいやはり人気があるのです。

社参ウォークは日光東照宮 400 年式年大祭で実施された。そのような開催も面白いですよね。日光街道を歩く、さらにマラソンなど、そういう大きな、縦の街道を通じたイベントは参加者の実績が出ていますので、面白いと思っています。

実際に宇都宮との MICE での連携では、宇都宮市の会議に、日光市の職員が入って一緒に開催させていただくなどが考えられます。そういう行政上の手続きは、これからさらに連携を図るときには、ポイントになると思っています。

MICE に関して、市民の皆様からは、大きな MICE の会議場を日光市単独で造ってほしいなどの話もあるのです。ただ、公共施設に関しては正直、日光市もそうですが、どんどん縮小して、統廃合している時代ですので、自治体単独で公共施設、MICE 会議場を造ることは、時代の流れからしても厳しいと思っています。ですから、宇都宮市の強みとして、新幹線が通っていて、交通の便もしっかり発達していますので、会議場は宇都宮市で確保していただく。宇都宮市も当然、観光全体で、いろいろなツールもありますが、そこにプラスして日光のブランド力を活かしていただければと。お互いにウィンウィンで、お互いにメリットがある仕組みづくりや、イベントや行事を、連携を図ってつくらせていただければ、乗りやすい、連携しやすいというところがあります。

## ■須賀

先日夜、あしかがフラワーパークに行ったのですけれども、外国人がたくさんいて。「なぜこんなにいるの」と聞いたら、「バスツアーで、外国人が東京から日光東照宮に行った帰りに足利に寄って、お食事をして、お土産を買って帰ります」と。帰りに、なぜ足利に行くの？それほど遠くありませんし、東武ホテルグランデに泊まっている外国人は、宇都宮ではなくて日光に泊まっていると思っているのです。考え方が変わってきているという感じました。

宇都宮 MICE ネットワークで、観光庁の補助を得て、二荒山神社に日光江戸村から派遣してもらって、国際会議のナイトタイムエコノミーとして、忍者ショーをやってすごく人気がありました。そのような組み方もあるのかと思います。

## ■馬場氏

私も動画を見せていただいて、日光江戸村の忍者ショーが人気だったと伺っています。そういう MICE の連携が、宇都宮市にとって、今後、重要だと思っています。ここ 2~3 年、実際にお話に行ったら日光市さんもウエルカムで対応していただいたのは、ありがたいと思っています。

広域観光を進めていく中では、圏央まちづくりのご協力が不可欠と思っております、会員企業さんの力です。ここの力を活かしていけないかと思っております。会員企業さんは、製造業の方が多いですけれども、観光となりますと、自分たちと関係ないという形にはなるかと思うのです。そこを、ワークショップなどをしていただいて、栃木市ではサントリーがいらっしゃいますし、連携ができないのかと思います。ムロコーポレーションは廃材を使ってキーホルダーを作るなどにも取り組んでいます。また、工場をお持ちになっているところに行かせていただきますと、

海外から毎月、視察にいらっしゃるとお伺いしています。視察者の方にPRはしていただいているのですが、「SHOGUN 物語」を企業と連携して、海外の顧客に発信していただくなども良いかと思います。

圏央まちづくりの企業群が、観光にもうまく関われる仕組みが出てくると、さらに盛り上がっていくのではないかと感じているところです。

## ■野尻氏

JR東日本のデスティネーションキャンペーンで、県南の7市町で歴コレ（とちぎ県南地域歴史文化財コレクション）を事業としてやったことがあります。具体的には各施設に行って、歴コレカードを集めてコンプリートするとコンプリートカードがもらえるのです。やはり見ていただくだけではなくて、小さいお子さまも、このカードを集めるという欲求を駆り立てながら、楽しみながら、市町を回っていただく取り組みは、有効だったと感じています。いろいろな市町のそういった資源をつなぎ合わせることも、大切だと思っています。

2024年には日光東照宮さんとガンダムがコラボをする、二荒山神社で3×3の試合があるということで、歴史的なものとか何かを掛け合わせますと、新たなファンが増えるのかなど。栃木市では蔵の街遊覧船を活用して栃木シティの新チームお披露目の船上パレードをやったのですが、地域らしさも出て、そこからファンが増えるのかと感じています。

## ■菅沼氏

平成16年に、小山市市政50周年の記念イベントで、市民オペラで『小山物語』を開催しました。小山評定が、なぜ開催されたのかなど、そういった小山の歴史を基に創作されたオペラを催したことがあります。郷土の歴史を住民の方と一緒に振り返ることができました。盛り上がりましたので、歴史を振り返ることも共同でできると良いのかと思いました。

小山市には桜の名所がたくさんあります。先ほど、マラソン大会などは良いのではとご提案がありました。小山でも思川桜という桜の名所がたくさんありますので、お花の時期などに、皆で地域の魅力を発信できるイベントをしていければ良いかと思います。

## ■須賀

歴史的な資源、景観だけではなくて、文学や音楽など、食文化も大事になってくるのではないかと。

## ■尾上氏

博物館も各市町村さんがお持ちで、県内幾つもありますので、つながりを活かしたイベントなどができるのかと。

## ■落合氏

私が入ったCIC Tokyoの会長さんは、ナイトタイムエコノミー推進協議会理事をやられてい

まして。壬生で観光といった時に、いかにして夜のコンテンツをつくって……要は、遅い時間までいれば、泊まるからという発想だと思うのです。

しかし、真っ暗で、あしかがフラワーパークではないのですけれども、イルミネーションをすれば人が来るなどにはありますが、お金がかかりますので、そこを何とかしたいと、入居してから3年ぐらい、何かないかなと悩んでいたのです。先日、奥日光の三本松茶屋さんが来た時に、奥日光の星空がきれいですと言われて。疲れた時に星空を見上げて、今日は星がきれい時々思うことがあるのです。それが日光には常にあると思って、星空を見る観光に力を入れたいと話をされていました。それを応援したいと思いまして、3月に小規模なのですけれども、今奥日光の星空とオンラインでつないで、入居企業の方がお茶で町おこしをやりたいということで、お茶を入れて、私たちはかんぴょう巻きを出します。栃木市の太平山の三大名物と言いますと、焼き鳥、卵焼き、団子です。例えばそのかんぴょう巻きを、今度、星見をする時に、お茶を飲みながらやると幸せになれるなど新名物になればと。

奥日光自体がこのパワースポットと言いますか、日光東照宮がパワースポットともありましたので、日光の手前で、壬生でかんぴょう巻きをゲットしてそこから行くといった、東京の人がエネルギーを感じられるツアーができると、付加価値が高まると思っています。旅費をどうする、宣伝をするためにチラシをどうするなど、先に予算がかかってしまいますので、今、私たちは東京に行っているという利点を活かして、私がかんぴょう巻きを持って行って、三本松茶屋さんがオンラインでつないで、まずは東京の人に奥日光で癒しになる体験をしてもらって、それが気に入ったら、日光に来てもらおうという作戦をやってみようかと考えています。

#### ■藤栄氏

壬生の資料館は城址公園にありまして、駐車場からもちょっと距離があるということで、なかなかお客さんに来ていただけていません。お配りした年表の裏に、郷土の偉人ということで壬生の偉人たちをご紹介させていただいているのですけれども、誇れる偉人たちばかりです。太田胃散の創設者が、壬生にルーツがあるなどです。映画『国宝』の中で、三上愛さんが締めている帯があるので、名古屋帯を染めているのが、壬生出身の高久空木という染色家です。

こういった歴史をどう知っていただくかと言いますと、やはり他の資料館や博物館さんたちと連携をして、資料館巡り、博物館巡りなどの一環でPRしていけたらと思います。

#### ■松井氏

今日はこの広域観光という視点、また歴史を活かしていくという視点で見ますと、圏央まちづくりの皆さまのお計らいで、そろってディスカッションできることがとてもうれしくて。結論から言えば、このメンバーで、歴史的なコンテンツをお互いに出し合って、商品開発をしようかと。そのような角度が手っ取り早いのかと。お互いのまさに資源を出し合って、作戦会議をやれると、率直に感じました。

私は市長になってから、広報誌交流ということをやっています。具体的には、東京都墨田区と

鹿沼市でお互いの広報誌に、例えばうちの鹿沼市の話題を墨田区の広報誌に載せる、墨田区の話題を鹿沼市に載せます。

そのようなことをやりながら、お互いこの圏域の自治体間の情報を、お互いの自治体の人に知ってもらえることもできると思いました。作戦とあえて申しましたけれども、知恵を出し合う場を、このシンポジウムを機会に、ぜひ各首長さんのお計らいも含めて鹿沼市は大賛成です。

#### ■嶋田氏

昨年まで真岡市で副市長をしていました。

真岡はご承知のとおり、あまり観光資源が、ご紹介があった市に比べますと少ないです。今のお話を伺って、やはり商品開発をしようかと。真岡市内で商品開発をして、広域連携で本当に魅力ある商品をつくっていくことは良いかと感じました。

#### ■齋藤氏

県で、私は文化財の仕事に専門でずっとやっています。全国的によく言われているのが、文化財の担当は、分かっていることを皆に知らせること、発信することが下手ですと。それではいけないと担当者は皆が思っていて、やっているのです。

先ほどの歴史の道調査事業を10年間やってきて、かなりの資料がまとまっています。それを県民の皆さんにどう知っていただくかがとても大切なのです。例えば今日お配りした、いにしへの回廊という事業です。こういったテーマを決めて文化財を紹介して、皆さんに利用していただく目的で作っています。ホームページと紙ベースのものがあるのですが、今日はQRコードもお配りしました。文化財は、堅苦しい、敷居が高そうな感じがするのですが、できるだけそれを低くしたいという思いも持ちながら、やっているところです。

文化観光という言葉に耳にすることがあるかと思うのですが、地域の歴史や文化、伝統を軸にして観光を組み立てようというものです。おそらく三つポイントがあるかと言われていきます。まず歴史や文化にストーリーを持たせることです。「SHOGUN」というテーマでストーリー性を持たせるということがまさしくそうだと思うのです。皆さんの理解を深めることに役立つという部分があるかと思います。もう一つが、ユニークな体験の組み合わせとされています。ユニークベニュー、これは「特別なところに特別な体験」、例えば文化財でイベントをやることです。鹿沼市ですと彫刻、日光市では漆塗りや彩色などの社寺の技術です。そういった技術を体験していただいて、その地域の文化をよく、深く知っていただくことが大切かと。この情報を発信していくこともありますので、優良なコンテンツを作っていこうと。デジタルや昔ながらの紙ベースもあります。優良なコンテンツを作って、深く知っていただく、この三つが大切かと思えます。

個人的には、文化財と言いますと敷居が高い感じがします。食や風景も組み合わせたいと思っています。餃子や、イチゴなどです。これは現代のものという感じがしますが、歴史背景が必ずあって、そこに生まれたのは何か必ず理由があると思います。そういったことも含

めて紹介していくのです。伝統ある郷土食や、郷土の伝統的な食材です。日光市ですと湯波がありますし、壬生町はかんぴょうです。昔の料理を復元しようという試みもあると伺っています。壬生町や栃木市で、江戸時代の料理を昔の記録を基に復元しようなどという試みもあると聞いていますので、そういった食も組み合わせられると、魅力が高まると思います。自分たちだとその魅力に気が付かないこともあるかと思ひまして。私自身も気が付いていない栃木の魅力はあると思います。そういった視点も大切にしていけると良いのかと思ひました。

#### ■須賀

栃木県も文化財が教育委員会から県民文化スポーツ部文化振興課になりましたので、また新しい役割も増えたと思います。

では、県北の西須さんです。那須塩原市の元観光局長です。

#### ■西須氏

湯西川に限って言いますと、若い連中が一緒になって、「かまくら祭」です。「かまくら祭」は皆で小さいかまくらを作って、そこに火をともしというものです。県北はもちろん広いですし、その中で歴史もあります。自然、文化もひとまとめにして、そういう大きくくりの中でもっと栃木県を元気にしていき、金を稼ぐ取り組みを地域の皆さんと一緒にやっていくことがさらにできれば良いと思っています。横や縦のつながりを積み上げることによって、世界から見れば価格としてきちんと反映できるはずですよ。

日光国立公園が91周年目を迎えたところです。国立公園は全然稼がないで、金を落とさないでちょっと見て帰るような時代がずっと続いてきたわけです。栃木県はもっと金を稼いで、もっと楽しんでもらえる町になれるように、皆さんのお力も拝借しながら、進めていっていただければ良いと思います。

#### ■須賀

情報発信が欠かせませんので、「栃ナビ！」の野村さんに話してもらいましょう。

#### ■野村氏

栃木県の情報を発信して25周年目の「栃ナビ！」編集部からまいりました。皆さまの魅力ある市町の情報、歴史で切って、というところをぜひお手伝いさせていただきたいと思ひました。私たちが得意なのは、たくさんの方をつなげることです。商品開発なども、皆でつくっていくことができるのかと思ひて考えていました。

#### ■須賀

最後に一言ずつ感想や、今後の圏央まちづくり協議会に対する期待などを、お話いただければと思います。

#### ■齋藤氏

文化財は発信することが下手というところがあるのですが、いろいろな協力をしていくことによって、歴史、文化が県民の皆さん、ひいては全国の皆さんに知っていただけることがきっとあるだろうと思いました。

#### ■藤栄氏

壬生町も歴史のPRは、これから伸びしろがあるのではないかと考えています。資料館職員として、PRできる歴史の発掘を今後もできたらと思いました。

#### ■落合氏

稼ぐ力は、私たちだけでは全然で。本当に今日の皆さんから、このようなことをやってみないとかの感じでちょっと言っていただきますと、壬生町長なども「いいね、やっておいて」との感じで進むと思いますので。本当にラフな感じで、ちょっとお話を頂いて、地域を盛り上げていこうという形がもっと出てくると、すごく楽しい栃木県になるかと思いました。

#### ■尾上氏

私のような学芸員が小山市には15人ぐらい、各分野でいます。学芸員をどんどん利用して、そういったつながりをつくっていけたら良いのではないかと思いました。

#### ■菅沼氏

小山市の魅力は、とても交通の便が良いにもかかわらず、その強みを活かしたプロモーション活動がちょっと不足しているのかと。課題を抱えながらも一生懸命解決しようとして取り組んでいるのですが、連携をして何かをすることがまだまだ不足していると思いますので、今日をきっかけに連携を図って、栃木の魅力を発信していければと思います。

#### ■野尻氏

できることをまず実現、実行に移すことが重要と思っています。栃木市は、鹿沼市と日光市と、移住・定住では一緒に連携をさせていただいていますので、観光分野でもぜひ連携したいと思っています。外国人のお客さまが日光市に訪れているということは、おそらく栃木市を東武日光線で通過していると思いますので、いかにそこで降りてもらえるかです。そういった取り組みが滞在時間の延長、宿泊につながるのかと思いますので、小さなことでもしっかり頑張っていきたいと思っています。

#### ■馬場氏

昨日、堺市の東京事務所の方とお話をする機会がありまして、世界遺産をテーマにした4市のイベントをやるということで、堺市の大山古墳です。日光市も一緒に入られると伺ったのですけ

れども、富岡製糸場と、もう一カ所と聞いています。堺市で最初にイベントの話が持ち上がった時には、お客さんが来ないのではないかなのような話があったらしいのですけれども、実はふたを開けてみたら、堺市でやったイベントの中での申込者が一番多かったと聞いています。今日集まったこの6市町で、鹿沼市が4月から東京にもオフィスを持たれるということで、あまりお金をかけないで、東京で気軽にチャレンジして、プロダクトの制作やツアーをやるなどの取り組みもありますので。

行政で横連携と言いますと、お金の話が先に出て、なかなか進まなかったりするのを、トライアルでまずやってみることが、この6市町であればできるのではないかと思って話を伺っていたところです。私はもう東京にいませんが、東京にいる方たちに期待して、そのようなことを頑張っていたいただければと思いました。

## ■松井氏

広域観光、そして各自治体の持つ魅力の情報発信という意味では、鹿沼市もこれからのチャレンジに尽きると思っています。

4月から第9次鹿沼市総合計画がスタートします。そのテーマは「豊かな自然と文化につつまれ 人が輝き地域が輝く みんなが住みたいまち」です。これをモチーフに頑張っていきたいと思っています。これは鹿沼市単体でやっては駄目だという思いがあって。今日はこのシンポジウムで、6市町がつながることができました。首長さんには、いつもお世話になっていますが、担当者さんの熱意も心強いと思いました。ぜひ何かできないかということで、鹿沼市からも考えて提案ができると良いと思った次第です。

東京サテライトオフィスですが、壬生町、栃木市、宇都宮市などにもご指導を賜りながら、この4月に高輪ゲートウェイ駅のそばに、鹿沼市も出します。もう何と言っても情報発信、発信力の強化に尽きると思うのです。私が提唱する鹿沼発、鹿沼産、題して「Made in 鹿沼」、そして稼ぐ鹿沼という意識が、東京の方にどの程度通用するかと。そのようなことを実験的にやっていきたいと思っています。そのためには、先進市であります宇都宮市、栃木市、壬生町、あとここにはいらっしゃいませんが、益子町も含めてご指導をいただきながら、さまざまなネットワークを駆使して、鹿沼市も元気になるよう頑張っていきたいと思っています。

## ■瀬高氏

今日は観光の位置付けで広域連携という話でしたけれども、すでに公共施設、あとはインフラなど、広域で連携することによって、国から補助金を出しますという流れなのです。ですから時代的に、やはり市単独、町単独でやる事業は、だんだんと寂れてきて、近隣の自治体同士でいかにいろいろな事業連携を図って、共存共栄していくかという時代になっていると思っています。

一昔前は、まだまだ首長同士のつながりという部分では弱くて、連携に支障があるというような場合は「やめよう」などということがあったのです。

私と松井市長は、仲が良いです。年に2回ほど、一緒に食事しながら連携していきましよう

いう話をさせてもらっていますし、そこはもうある意味、時代の流れとして、本当に地域、近隣の自治体が活性化することによって、ひいては最終的に地域の盛り上がりになると思っていますので。今、どの首長も、前向きな方たちばかりですから、そのあたりを、栃木県全体として地域が発展するために、われわれ基礎自治体がこの観光も含めて、広域連携を図っていくことが成長につながると思っています。

## ■須賀

圏央まちづくり協議会の代表理事の古池先生から、決意表明をお願いします。

## ■古池

代表理事を務めております古池です。もう一つの仕事として、この大学で都市と交通、特にLRTによるまちづくりを専門に教えています。

本日のテーマは、「とちぎ SHOGUN 物語」です。このシンポジウムは2回目です。冒頭の高藤先生の歴史のお話、瀬高市長の広域連携の視点、そしてパネリストの皆さまからの多様なご意見、どれも興味深いものでした。



古池

とちぎ圏央まちづくり協議会は、9年前の2017年に当時建設中だった芳賀・宇都宮のLRTの積極的な活用を民間企業の立場から応援していくことを目的として、会員企業50社からスタートした企業連携組織です。当初は栃木県の県央地域の企業が中心でしたが、県北や県南の企業からも参加したいという声が高まり、現在では県全域に広がり、約130社が参加する“オール栃木”の組織となりました。ホンダをはじめ大手企業も参加しています。

私たちが目指してきたことは大きく二つあります。

一つは民間企業同士の連携です。大手企業と地元企業の関係が必ずしも対等ではない場面もありますが、当協議会では会費も含め、規模に関係なく“同じ企業同士”として対等に議論できる場をつくっています。

もう一つは官である自治体の連携です。自治体はどうしても自分の地域を優先しがちで、隣の自治体との連携が進みにくい傾向があります。中国の故事に「遠交近攻」という四字熟語があります。これを逆にして「近交遠攻」、つまり“近くとまず手を結び、遠くと競う”ことが、人口減少時代の地域間競争を勝ち抜く鍵だと考えています。まさに今日のテーマそのものです。

これまで交流が少なかった日光と宇都宮の関係も変わりつつあります。他の自治体も同様で、その連携機能を支えるのが交通です。かつては徒歩を中心とした街道、今は自動車の道路ネットワークが中心ですが、これからは公共交通を軸にした広域連携が重要になります。

宇都宮で始まったLRTが、将来的には東武宇都宮線とつながり、壬生や栃木へと広がる。あるいは日光線にLRTが入り、鹿沼、日光へとつながる。そうした未来を見据えて取り組んでいきたいと思っています。

圏央まちづくり協議会に対して、いろいろとご要望を頂きました。重く受け止めて、できる限り協力していきたいと考えています。

まだ具体的な予定はありませんが、第3回「とちぎ SHOGUN 物語」シンポジウムを近い将来に開催できればと願っています。

本日は誠にありがとうございました。(拍手)

## 那須烏山ジオパーク構想における地域活動団体と学校教育の連携構造 — 「なすからジオの会プチェーロ」の活動に着目して —

Collaborative Structure between a Community-Based Organization and School Education in the Nasukarasuyama Geopark Project: A Case Study of "Nasukara Geo no Kai Puchero"

坂 口 豪 (宇都宮共和大学 専任講師)

本研究は、那須烏山ジオパーク構想における地域活動団体と学校教育現場の連携構造を明らかにすることを目的とし、「なすからジオの会プチェーロ」を対象に分析を行った。同市は現在「ジオパーク構想」の段階にあるが、学校現場では年間延べ約 500 名の児童生徒を対象に、市民によるガイド活動が定着している。

分析の結果、この持続性を支える要因として次の 3 点が明らかとなった。第一に、専門知を教育プログラムへと翻訳するキーパーソンの存在である。第二に、学校組織特有の「前年度踏襲(ルーチン化)」という性質を活用し、学習活動を教育課程に埋め込んだことである。第三に、活動が実践者の「生きがい」や自己表現の場となり、制度の枠組みを超えた内発的動機が組織のレジリエンスを高めている点である。

以上より、行政主導の認定制度に依存せず、市民と学校の互恵的な関係によって活動を維持する仕組みの重要性を提示し、行政による伴走型の支援の在り方を提言する。

キーワード： ジオパーク構想, 地域活動団体, 学校教育, 持続構造, 那須烏山市

### 1 本報告の背景と目的

日本ジオパークの認定は 2008 年から始まり、2026 年 4 月現在、日本には世界ユネスコジオパーク 10 地域を含む 48 地域の日本ジオパークが存在する (日本ジオパークネットワーク 2026)。目代 (2018) によれば、ジオパークとは、地学的自然遺産の保護・保全、その価値を伝える教育、そしてその賢明な利用の一形態であるジオツーリズムが一体となって推進されることで、地域の持続可能な開発を進めていく場である。

こうしたジオパークの活動は、フंक (2008) が提唱する「学ぶ観光 (Educational Tourism)」の一種として位置づけることができる。フंक (2008) は、学ぶ観光の推進が地域内での知識創

造や人材育成において新たな取り組みを生み出すと指摘している。日本のジオパークにおける人材育成については、磯野（2015）がガイド活動を通じた地域アイデンティティの醸成を報告している一方で、磯野（2016）は、人材育成や知識創造の仕組みが体系的な教育として十分に確立されていない点を課題として指摘している。加えて、認定後の持続的な運営や行政の推進体制の維持も、多くの地域に共通する課題となっている。特に、正会員を目指す「構想」段階の地域では、行政のリソース制約等により活動の停滞を余儀なくされるケースも少なくない。

本稿が対象とする栃木県那須烏山市での那須烏山ジオパーク構想においても、2015年の日本ジオパークネットワーク（JGN）準会員加盟以降、行政による推進体制の変遷が見られる。他方、市内小中学校における野外実習の定着など、独自の教育的展開を見せている点は注目に値する。

那須烏山ジオパーク構想に関する学校教育の実践については、星（2015）および星・河野（2019）によって、下江川中学校および南那須中学校における野外観察や科学部活動を中心とした取り組みが報告されている。これらは、地域資源を活用した教育実践が、個別の学校から地域全体へと展開していく過程を示したものである。こうした実践を踏まえ、教育内容の発展的なあり方を検討した研究として、亀田・瀧本（2025）がある。同研究は、那須烏山ジオパーク構想を活用し、小・中学校における理科と社会の教科横断型教材を提案したものであり、既存のジオサイトだけでなく、これまで教育実践の対象とされてこなかった地点の活用可能性も示している。さらに、防災教育や持続可能な開発（SDGs）との関連づけなど、ジオパーク教育の拡張可能性を提示している点に特徴がある。これらの研究では、教育実践や教材開発の観点からの検討は十分に行われているものの、こうした活動がどのような主体間関係のもとで成立し、持続しているのかについては十分に明らかにされていない。

本研究では、那須烏山ジオパーク構想を対象として、市民や有志を中心とした地域活動団体の活動と学校教育との関係に着目する。これを踏まえ、①専門知の翻訳を担うキーパーソンの役割、②学校教育への埋め込み、③活動の持続構造の三点からその実態を整理・記録するとともに、行政主導の推進体制が揺らぐ中においても、学校現場と地域活動団体との連携により知識創造の仕組みがいかに維持されているのかを明らかにすることを目的とする。

本稿は以下の通り構成する。第2章では、那須烏山市（那須烏山ジオパーク構想エリア）の地域的特徴およびジオパーク構想の経緯を整理する。第3章では、地域活動団体『なすからジオの会プチャーロ』の組織と、学校教育現場との連携実態を具体的に記述する。第4章では、前述の先行研究を踏まえ、行政の推進力が揺らぐ中でも教育現場で活動が継続される構造を、知識創造と人材育成の観点から考察する。

本研究の独自性は、認定の有無という制度的な側面のみならず、地域教育という日常的な公的枠組みにいかに関与し、ジオパークやジオガイドによる活動が浸透し、持続しているかを可視化した点にある。特定のキーパーソンによる『専門知の翻訳』と、それが教育現場へ定着するプロセスを追うことで、ジオパーク活動の持続可能性に関するその実態を記録・整理することを目指す。

## 2 那須烏山市の地域概要と那須烏山ジオパーク構想の主要ジオサイト

### 2.1 那須烏山市の概要

那須烏山市は栃木県東部に位置し、八溝山系に属する地域である（那須烏山市 HP）。市域には那珂川が平野部を貫流し、その右岸には丘陵地帯、左岸には山間地が広がる。これらの地形的特徴は、市街地の立地や土地利用に影響を与えており、河川沿いに市街地が形成されている点にその特徴がみられる。また、那珂川およびその支流である荒川や江川の作用により、侵食や堆積によって形成された多様な地形環境が各所にみられる。風化や侵食を受けた地点では地質観察が可能な露頭が分布し、さらに海成層に由来する地層からは化石が産出することも知られている。これらは地域における地形・地質資源として重要な要素である。

こうした自然条件は地域の産業とも密接に関係している。農業は稲作や畜産を中心に展開されてきたが、近年は担い手の減少や高齢化により衰退傾向にある（那須烏山市 HP）。烏山和紙に代表される伝統工業は、清浄で豊富な水資源に支えられて成立してきた産業であり、自然環境と人間活動との関係を示す典型的な事例といえる。また、同市は那珂川県立自然公園をはじめとする自然景観や、ユネスコ無形文化遺産の「山あげ行事」などの文化資源を有しており、観光資源としての潜在力も有している（那須烏山市 HP）。他方、人口減少や産業の停滞により、地域の活力低下が課題となっている。

以上のように、那須烏山市は多様な地形・地質環境と、それに基づく産業・文化を有する一方で、社会的課題も抱えている地域である。このような背景のもと、地域資源の再評価と活用を図るジオパーク構想は、地域の持続的発展に向けた重要な取り組みとして位置づけられる。

### 2.2 那須烏山ジオパーク構想の歩み

那須烏山市におけるジオパーク構想は、2010年代前半より地域内で機運が高まり、2015年には推進協議会が設立され、同年、同協議会は日本ジオパークネットワーク（JGN）の準会員となり、認定に向けた体制整備が進められた。2017年には日本ジオパーク認定に向けた加盟申請書の提出が行われ、同年5月には認定審査プレゼンテーションが実施されたが、認定には至らなかった。その後は、行政主導の推進体制から地域主体の活動へと重心が移行し、現在では地域活動団体「なすからジオの会プチェーロ」を中心とした実践が展開されている。この点は、第3章で詳述する。

制度的な枠組みの変遷から本構想を捉えることは一定の理解を与えるが、実際の活動の展開過程は必ずしも行政主導で上からの制度形成だけで説明できるものではない。むしろ、学校教育における実践が先行し、それが地域活動や制度的枠組みの形成へと接続されていくという特徴を有している。

以上の点を踏まえ、那須烏山ジオパーク構想の展開過程を時系列で整理したものが表1である。表1に示すように、本構想は、学校教育における実践（SPP および特設科学部の活動）を起点として形成され、その後、地域活動団体の設立や制度的枠組みの整備を経て、現在の学校教育への

定着へと展開してきたことが確認できる。このような展開は、第4章で論じる教育実践の持続構造を理解する上で重要な前提となる。

表1 那須烏山ジオパーク構想の展開過程（年表）

年	主な出来事	内容・意義
2006	SPP 開始 (当時A氏が勤務していた馬頭中学校にて)	栃木県立博物館との連携により SPP (サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト) が開始される。地学系の実践が行われ、後の教育活動の原型が形成される。
2007	【A氏が下江川中学校赴任】 生物系 SPP 開始	シモツケコウホネの存在を契機に調査・保全活動が開始される。卓球部から特設「卓球科学部」が誕生し、生徒主体の探究活動が展開される。
2008	ジオパーク概念の導入	博物館・大学関係者から「ジオパーク」の概念がもたらされ、地域資源を統合的に捉える視点が形成。
2009	二刀流の教育実践開始	地学系・生物系を統合した「二刀流」の教育実践が開始。地域の自然を総合的に扱う教育が成立。ジオパーク構想の萌芽に。
2009 頃	ジオパーク構想の意識化	学校での調査・教育活動を背景に、「那須烏山ジオパーク構想」が意識され始める【A氏の言う中学校版ジオパーク構想】 教育実践が地域構想へと接続される段階に入る。
2010 年代前半	教育実践の蓄積と展開 ジオパーク構想の本格化	地層観察や化石調査などの野外活動が継続的に実施され、教育実践としての基盤が形成。ジオサイトの理解と体系化が進展。
2015	JGN 準会員加盟 【A氏が南那須中学校赴任】	那須烏山ジオパーク構想が日本ジオパークネットワーク準会員となり、制度的枠組みが形成される。
2010 年代後半	学校教育への展開 ↓ 学校教育部会の機能強化	市内小中学校等において理科や総合の授業での野外観察実習としてジオパーク教育が展開され始める。 教員ネットワークを通じて各校へ働きかけが行われ、ジオガイドの活用が広がる。学校教育への制度的埋め込みが進展。
2016	プチェーロ設立	地域活動団体「なすからジオの会プチェーロ」が設立。 学校教育中心の活動が市民レベルへと拡張された。
2017	JGN 新規認定審査	那須烏山ジオパーク構想が日本ジオパークネットワーク正会員を目指し審査を受けるも認定見送りとなる。
2020	龍門の滝案内所設置	空き施設を活用した活動拠点が整備され、市民活動・ガイド活動の基盤が強化される。
2020 年代	学校教育への定着	市内小中学校において野外観察実習が広く実施され、年間約 500 名規模の教育実践が継続される。
現在	多主体連関による持続	学校教育、地域活動団体、行政の制度的枠組みが連関し、教育実践が持続的に展開されている。

(現地調査により作成)

### 3 「なすからジオの会プチャーロ」の活動と学校教育支援の実態

#### 3.1 組織の設立経緯と目的

本章では、那須烏山ジオパーク構想における地域活動の中核を担う「なすからジオの会プチャーロ（以下、プチャーロ）」の組織概要と、その具体的な活動実績について述べる。プチャーロは2016年12月18日、地質学の専門家や教育関係者、地域住民らが集まった講演会を機に結成された。設立当初は、当時の南那須中学校の一室を拠点として、定期的な学習会や日本ジオパークネットワーク（JGN）の研修会への参加を通じた知識創造活動を行ってきた。

特筆すべきは、同会の活動の源流が、2006年度から開始された栃木県立博物館との連携事業「SPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）」にある点である。中学校における科学部活動や希少種「シモツケコウホネ」の保全活動を通じて培われた「専門知を教育現場へ還元する」という手法が、現在のプチャーロによるガイド活動の基盤となっている。

#### 3.2 教育支援活動の内容

プチャーロの活動において最も特徴的な展開を見せているのが、市内小中学校に対する野外観察ガイドの派遣事業である。これは、協議会内に設置された「学校教育部会」が主導し、地元の教員とジオパーク推進室が連携して、理科や総合的な学習の時間にジオガイドを導入するよう働きかけた成果である。その具体的な実施状況を整理したものが表2である。

表2 野外観察ガイド派遣実績（集約）

学校種別	実施回数	対象学年(主な科目)	主な学習内容・行き先
小学校	11回	3～6年(社会、理科、総合)	龍門の滝、地層見学(万行、荒川)、歴史講話、シモツケコウホネ観察
中学校	2回	1年(理科、なすからウォーク)	地層見学(八溝層群、田野倉層等)、地形見学、歴史講話(烏山城跡)
その他	1回	科学部研修	龍門の滝、シモツケコウホネ観察

2025年度の派遣実績を参照すると、派遣回数は年間14回に及び、その対象は小学校3年生から中学校1年生まで多岐にわたる。注目されるのはその規模であり、年間で延べ498名の児童生徒が参加している。これは、那須烏山市内のほぼ全ての小中学校において、ジオパークに関連する野外学習が学校カリキュラムの一部として組み込まれていることを示している。

具体的な学習項目としては、小学校6年生の理科「土地のつくりと変化」における地層観察や、

4年生の社会科・総合学習における地域の自然環境理解が中心となっている。「龍門の滝」における地層観察や、万行・十二口といった露頭での化石採集など、教科書上の知識を「生の体験」へと繋げるプログラムが提供されている。

### 3.3 活動拠点と普及啓発活動

市民への普及啓発の拠点として、プチェーロは2020年7月25日に「龍門の滝案内所」を設置した。これは市内の空き家（旧農産物直売所）を市から借り受けて再利用したものであり、週末を中心にジオガイドが常駐し、来訪者への解説や情報発信を行っている。

また、プチェーロでは月1回の定例会を「ジオ・カフェ」と称し、インフォーマルな対話の場を維持している。こうした場は、単なる事務連絡の場にとどまらず、メンバー間での知識共有や新たな企画の創出、さらには地域住民を巻き込んだ「子結団(保護者の会)」との連携イベントなど、活動の裾野を広げる役割を果たしている。

なお、会員は多様な背景を持つ個人によって構成されており、教員、行政関係者、民間企業勤務者、退職者などが含まれている。特に、那須烏山市外の在住者が半数以上を占めている点は注目される。このことは、本活動が地域住民に限定されるものではなく、那須烏山の地学的資源に関心を持つ人々を広く引きつけていることを示唆している。また、ジオサイトにおける観察会や化石発掘体験が、市外からも継続的に参加者を集める実践として成立していることがうかがえる。

### 3.4 小括

プチェーロは、学校教育支援、普及啓発活動、対話の場づくりを通じて、那須烏山ジオパーク構想における地域活動の中核を担っている。とりわけ、市内小中学校への継続的なガイド派遣、龍門の滝案内所という活動拠点の整備、さらに「ジオ・カフェ」に代表される知識共有の仕組みは、本事例の特徴として注目される。

また、これらの活動は、多様な主体の関与のもとで展開されている点にも特徴がある。専門知の供給、学校教育現場への展開、そして制度的枠組みとの関係が複合的に作用している点は重要である。次章では、これらの要素の相互関係に着目し、活動の持続構造について考察する。

## 4 考察 — 地域教育への浸透と持続の構造 —

### 4.1 那須烏山ジオパーク構想における教育実践の構造モデル

本章では、第3章で示したプチェーロの活動実態を踏まえ、那須烏山ジオパーク構想における教育実践の持続構造について考察する。その際、本事例の特徴は、図1に示すように、専門知の供給源、キーパーソン、市民活動団体、学校教育現場、そして行政による制度的枠組みといった複数の主体が相互に関連する構造として把握できる点にある。特に、本構造の中心には、専門知を教育実践へと翻訳するキーパーソンが位置しており、この存在が各主体を接続する結節点（ハ

ブ)として機能している。また、この構造は、①専門知の翻訳を担うキーパーソン、②学校教育への埋め込みによる実践の制度化、③制度・組織・個人が重層的に関わる持続性の確保、という三つの側面から整理することができる。以下では、この構造モデルに基づき、各要素の具体的な機能と相互関係を明らかにする。

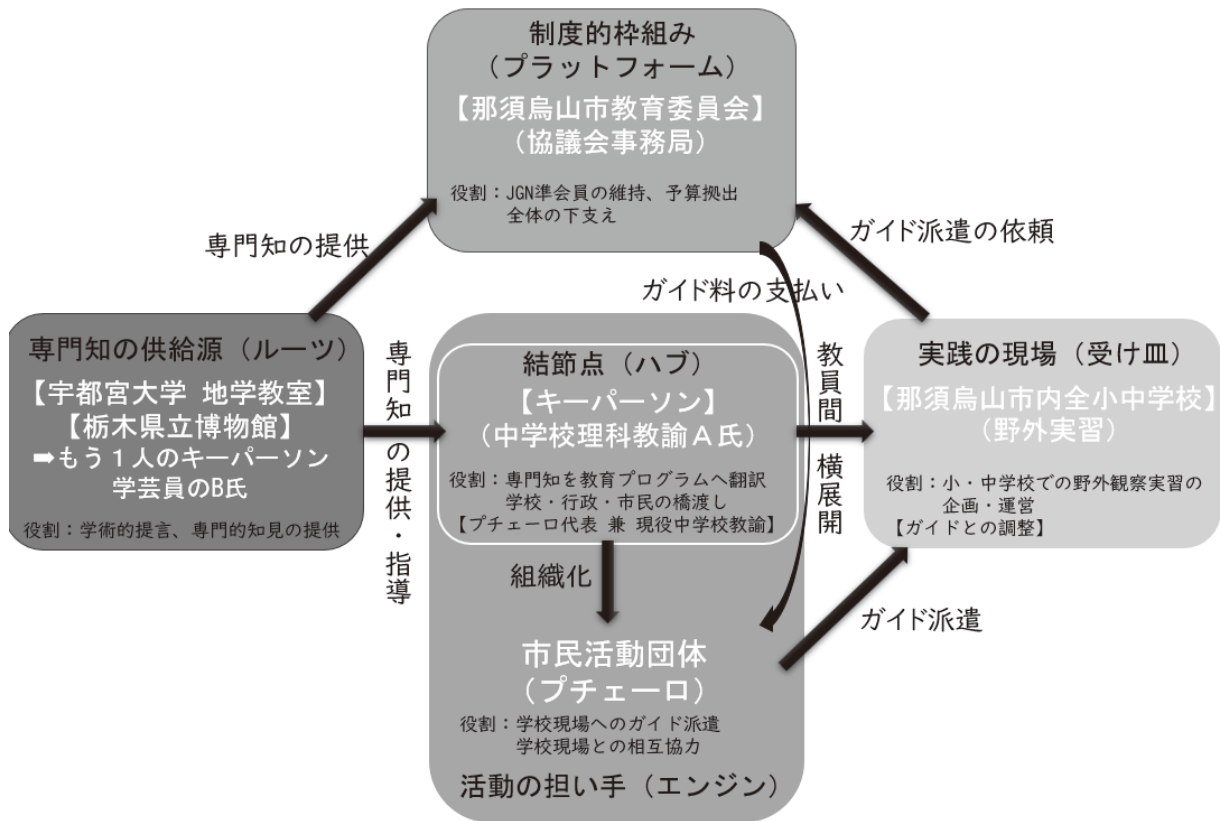


図1 那須烏山ジオパーク構想における教育実践の構造モデル  
(A氏や那須烏山市役所へのヒアリング調査に基づき筆者作成)

#### 4.2 専門知の「翻訳者」としてのキーパーソンの役割

那須烏山ジオパーク構想における教育実践の中核には、専門知の供給源と教育現場とを接続するキーパーソンの存在が位置している。中学校教諭であるA氏がその結節点（ハブ）として機能しており、行政の推進体制の変遷に左右されず活動が継続している要因の一つと考えられる。

本事例における専門知の供給源としては、宇都宮大学教育学部地学教室および栃木県立博物館の存在が重要である。A氏は宇都宮大学地学教室の出身であり、同教室において地質学を専門とするC教授の指導を受けている。また、栃木県立博物館の学芸員であるB氏も同教室の出身であり、A氏の先輩にあたる。

こうした人的ネットワークのもと、B氏の協力を得てSPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）による野外活動が開始されており（星 2015）、現在の教育実践の基盤が形成された。那須烏山市内におけるジオパーク教育に関連する実践は、A氏がかつて勤務した下江川中学

校における特設科学部の活動を起点として展開してきたものであり、地域の地層や化石を対象とした調査・研究活動がジオパーク構想へと発展した経緯が先行研究でも触れられている（星・河野 2019）。このように、本事例における「専門知の翻訳」は、個人の能力にとどまらず、大学・博物館を基盤とする知的ネットワークに支えられている点に特徴がある。

磯野（2016）は、多くのジオパークにおいて知識創造の仕組みがシステム化されていない課題を指摘しているが、本事例では、A氏が「専門家（大学・博物館）」と「教育現場（学校）」の橋渡しを担っている点に特徴がある。A氏は、博物館学芸員等から得た高度な地学的知見を、単なる学術情報としてではなく、生徒が「うをーすげー」と感動できる「生の体験」を伴う教育プログラムへと翻訳している。このような「専門知の翻訳」こそが、フंक（2008）の提唱する「学ぶ観光」における知識創造のプロセスであり、専門知が市民活動や学校教育へと浸透する駆動力となっているといえる。

さらに、A氏は自身の活動を、生物学的な保全活動（シモツケコウホネ）と地学的なジオパーク活動を並行させる「二刀流」と表現している。このような分野横断的な視点は、学術的領域の枠を越えて地域の自然環境を総合的に捉える教育実践を可能にしており、学際的な学びの場を創出している点で重要である。

また、地域活動団体であるプチャーロは、A氏によって翻訳された専門知を受け止め、共有・発展させる場として機能している。「ジオ・カフェ」に代表される対話の場では、多様な背景を持つ参加者が知識を持ち寄り、専門知と生活知とが結びつくことで、新たな地域知が再構成されている。このようなプロセスは、専門知の翻訳が個人の実践にとどまらず、市民レベルへと展開していく基盤となっている。

A氏は、火山などの顕著な地形を持たない地域の特性を「B級グルメ的ジオパーク」と表現しているが、これは日常の風景の中に潜む地学的価値を再発見する視点を示すものである。このような感性を育む教育実践は、認定制度という外在的な評価に依存せず、地域に根ざした知識創造のあり方を体現しているといえる。以上のように、本事例におけるキーパーソンは、専門知の翻訳に加えて、知的ネットワークを背景に各主体を接続する媒介者として機能している点に特徴がある。

#### 4.3 学校教育への埋め込みと持続構造

本事例における教育実践は、市民活動と学校教育現場とを接続する形で展開されている。特筆すべきは、ボトムアップで始まった活動が学校教育という公的システムの中に「埋め込まれている」点である。A氏は協議会の「学校教育部会」を通じ、市内の教員ネットワークに働きかけることで、ジオパークの野外実習を理科や総合的な学習の時間の中に位置づけ、各校の年間指導計画へと組み込む取り組みを行った。外部の活動が一過性のイベントとしてではなく、正規の教育課程の一部として制度的に位置づけられている点に特徴がある。

本事例の制度的な仕組みは、学校教育部会を通じたガイド派遣や教員支援といった形で具体化されており、野外観察を中心とした教育実践が学校現場に浸透していることが指摘されている(星・河野 2019)。さらに、ジオパークを活用した学習は理科と社会を横断する教育内容として展開可能であることも示されており(亀田・瀧本 2025)、こうした特性がカリキュラムへの定着を後押ししていると考えられる。

一般に学校現場は多忙であり、新たな取り組みの導入には抵抗が伴うことが多い。他方、「前年度の実施内容を踏襲する(例年通りに行う)」という強い慣習(ルーチン化)を有している。A氏はこの学校特有の性質に着目し、「一度、質の高いプログラムとして年間計画に組み込まれれば、担当教員が異動した後も継続される」という仕組みを構築した。第3章で示した年間延べ498名という実績は、個人の実践が学校組織の「慣習」として定着した結果と捉えることができる。「埋め込み」によって制度的な位置づけを獲得した教育実践が、「慣習化」を通じて再生産される構造は、行政の予算や推進体制が変動する中においても活動を継続させる強固な基盤として機能している。

以上のことから、本事例における持続性は、単なる個人の努力によるものではなく、「埋め込み」と「慣習化」という二つのプロセスが連動することによって成立しているといえる。

#### 4.4 活動を支える組織と制度的基盤

本事例における教育実践は、キーパーソンや学校現場のみならず、それらを取り巻く組織および制度的枠組みによって支えられている。特に、那須烏山ジオパーク構想の推進協議会およびその事務局である那須烏山市教育委員会生涯学習課は、活動の基盤となる制度的プラットフォームとして機能している。

那須烏山ジオパーク構想推進協議会の規約によれば、同協議会は市、教育委員会、博物館、学校、地域活動団体など多様な主体によって構成されており、ジオパークの保全・教育・観光に関する事業を包括的に担う組織として位置づけられている。また、学校教育部会や観光ガイド部会などの部会が設置されており、分野ごとに役割分担がなされている点に特徴がある。

推進協議会は、学校教育部会をはじめとする部会組織を通じて、教員と地域活動団体を結びつける役割を担っている。また、教育委員会が関与することにより、ジオパーク活動が学校教育と制度的に接続される環境が整備されている。このような行政による関与は、活動の全面的な主導というよりも、場の維持や調整を担う「黒子的」な支援として機能している点に特徴がある。

このような制度的枠組みが存在することで、地域活動団体であるプチェーロの活動も、単独の任意的な実践にとどまらず、学校教育支援と接続した形で継続的に展開しやすくなっている。

一方で、地域活動団体であるプチェーロは、こうした制度的基盤の上で柔軟な活動を展開している。「ジオ・カフェ」に代表される実践は、多様な背景を持つ参加者が対話を通じて知識を共有する場として機能しており、専門知が生活知と結びつくことで新たな地域知が創出されるプロ

セスを支えている。

さらに重要な視点は、こうした活動が実践者自身の「生きがい」と深く結びついている点である。A氏は、自身の活動が地域に広がる様子を「シンガーソングライターが作った歌が巣立っていく感覚」と表現している。これは、ジオパーク活動が単なる地域の義務ではなく、実践者にとっての自己実現や創造的な喜びの場となっていることを示唆している。

以上のように、本事例における持続性は、制度的な基盤、市民組織としての活動、そして個人の内発的動機という複数の要素が重層的に組み合わせることで成立しているといえる。すなわち、制度的枠組み（協議会・行政）が活動の基盤を形成し、その上で市民組織としてのプッチェーロが実践を展開し、さらに個々の実践者の内発的動機がそれを持続させるという、多層的な構造が確認された。

## 5 まとめ

### 5.1 本研究のまとめ

本研究では、那須烏山ジオパーク構想における地域活動団体「なすからジオの会プッチェーロ」の活動実態と、その活動が学校教育の中でどのように浸透し、持続しているのかについて検討した。その結果、本事例においては、①専門知を教育実践へと翻訳するキーパーソンの存在、②活動を学校教育の中に取り入れることによる制度的な位置づけ、③制度・組織・個人が重層的に関わる持続構造、の三点が相互に作用することで、教育実践が継続されていることが明らかになった。

とりわけ、学校教育に一度組み込まれた活動が、毎年度の実践として継続される点は、本事例の大きな特徴である。また、こうした実践は、市民レベルでの対話や学び合いの場と結びつくことで、地域における知識の共有と再生産の仕組みを形成している。

### 5.2 地域教育とジオパーク活動への示唆

以上の結果から、ジオパーク活動は観光振興にとどまらず、地域における教育実践や人材育成の基盤として機能し得ることが示唆される。那須烏山においては、行政の推進体制が変化する中でも、学校教育への埋め込みと市民活動の継続によって、一定規模の教育実践が維持されている。このことは、制度の有無のみに依存しない持続のあり方を示すとともに、制度的枠組みがこうした活動を支える基盤として機能している可能性を示している。

また、日本ジオパークネットワークのような広域的な枠組みは、他地域の実践に触れる機会や関係者間の交流を通じて、知識や経験を共有する場としての役割を有していると考えられる。このような外部とのつながりは、地域内の活動に新たな視点や動機をもたらし、その継続や発展に一定の影響を与えている可能性がある。

さらに、本事例においては、活動を担う実践者にとって、ジオパークに関わる教育や普及活動

が、単なる業務を超えた意味を持っている点も重要である。現地調査においても、活動の広がり  
を自己の表現や喜びとして捉える認識がみられた。このような内発的動機は、活動の持続を支え  
る重要な要素として位置づけられる。

また、本研究は単一事例に基づく分析であるため、他地域への一般化には限界がある。今後は、  
他のジオパーク構想地域や既認定地域との比較を通じて、教育実践の持続構造の共通点および差  
異を明らかにしていく必要がある。こうした検討を通じて、地域教育とジオパーク活動の関係性  
について、より普遍的な理解を深めていくことが求められる。

### 【謝辞】

本研究の実施にあたり、那須烏山市役所生涯学習課の小峯洋一氏、「なすからジオの会プチェー  
ロ」の星康彦氏および中山雅彦氏には、現地調査および資料提供において多大なご協力をいただ  
いた。また、調査に際して貴重なお話をお聞かせいただいた関係者の皆様に、ここに記して深く  
感謝申し上げます。

### 【参考文献・情報】

- [1] 目代邦康 (2018)：日本における山地のジオ多様性とジオパーク活動. 地球環境, Vol.23, 37-44.
- [2] フンク C. (2008)：「学ぶ観光」と地域における知識創造. 地理科学, Vol.63, 160-173.
- [3] 磯野巧 (2015)：東京都大島町における自然ガイド活動の地域的展開. 地学雑誌, Vol.124, 43-63.
- [4] 磯野巧 (2016)：徳島県徳島市における観光ボランティアガイド活動の地域的展開. 観光研究, Vol.27, 59-70.
- [5] 日本ジオパークネットワーク (2026)：日本のジオパーク. 日本ジオパークネットワークホームページ. <https://geopark.jp/geopark/> (2026.04.18 閲覧)
- [6] 星康彦 (2015)：那須烏山市ジオパーク構想 — 栃木県立博物館との連携から —. 栃木県立博物館研究紀要 — 自然 —, No.32, 43-49.
- [7] 星康彦・河野重範 (2019)：地域の「ジオ・エコ・ヒト」に着目した学校教育 — 栃木県那須烏山地域の例 —. 化石研究会会誌, Vol.52, No.1, 17-23.
- [8] 亀田直記・瀧本家康 (2025)：那須烏山ジオパーク構想を活用した小・中学校理科と社会の教科横断型教材の提案. 科学教育研究, Vol.49, No.3, 265-272.
- [9] 那須烏山市 (2026)：那須烏山市ホームページ. <https://www.city.nasukarasuyama.lg.jp/city-administration/city-profile/> (2026.04.05 閲覧)

## 大学コンソーシアムとちぎ 学生活動支援事業 成果報告

大学コンソーシアムとちぎ学生活動支援事業として、宇都宮共和大学「2年三浦ゼミ」および大学公認サークル「地域お助け隊」の学生を中心に、「地域資源×食×交流による地域活性化－移動式大谷石ピザ窯による居場所づくり－」を実施しました。

ピザ窯の製作にあたっては、石蔵として使用されていた大谷石の古材を再利用しました。当初は新規石材の使用も考えましたが、試行錯誤の結果、古材のみを組み合わせる構造を採用し、コストの削減を図りつつ、古材ならではの風合いを活かしたピザ窯を完成させました。接着加工の不要な設計としたことで解体・再組立てが可能となり、移動式ピザ窯としての活用を実現させました。製作過程では、市内事業者へのヒアリングや見学も行い、実践的な知見を取り入れました。

2025年10月に実施された大学祭「すみれ祭」前夜祭においてピザ窯のお披露目を行い、学内の関係者を中心に約100名にピザを提供しました。ピザ窯を囲む中で、大谷石や古材についての話題が自然に生まれ、地域資源への関心を高める機会となりました。

同年11月には築瀬小学校で開催された「築瀬地区文化祭」に出店しました。本活動では、築瀬まちづくり推進協議会をはじめとする複数団体と連携し、約半年にわたって準備を進めました。当日は大谷石ピザ窯で焼いたピザトーストを100食以上提供し、子どもから高齢者まで幅広い世代が集う場となりました。食を媒介とすることで参加のハードルが下がり、学生と地域住民の間には自然な会話や交流が生まれ、両者が対等に関わる関係づくりにもつながりました。なお、売上の一部は宇都宮市社会福祉協議会へ寄付しました。

これらの取り組みにより、ピザ窯を中心とした交流の場が創出され、とりわけ子ども世代への関心喚起にもつながりました。さらに、複数団体との連携を通じて地域内のネットワークが形成され、継続的な活動に向けた基盤を得ることができました。本事業を含む内容は、「築瀬あったかりンク事業～地域をひらく、心をつなぐほっこり居場所ネットワーク構想～」として宇都宮市主催の「大学生によるまちづくり提案発表会2025」において発表し、優秀賞（第2位）を受賞するなど学外から高評価を得ました。

課題としては、継続的な実施体制の構築と、学生の卒業による担い手の変化への対応が求められます。また、地域意識の変化などの効果については、アンケートやヒアリングによる検証が必要です。

参加学生にとっては、地域と関わる実践的な学びの機会となりました。今後は、これを継続的な取り組みへと発展させていくことが期待されます。

## 大学コンソーシアムとちぎ 学生活動支援事業 成果報告

2024年に発足した「宇都宮市創造都市研究センター 魅力都市研」は、宇都宮共和大学・作新学院大学・帝京大学宇都宮キャンパス・文星芸術大学の学生による研究会であり、約2年間にわたり地域連携活動に取り組んできました。本学からは4名の学生が参加し、研究会における「まちづくり班」の代表はシティライフ学部3年の廣田美姫さんが務めました。

2025年度には、「大学コンソーシアムとちぎ」の学生活動支援事業として、「オリオンパーク ストリート」プロジェクトを実施しました（図1を参照）。これは、宇都宮市中心市街地のオリオン通り周辺を対象に、通り空間を一時的に遊び場として活用し、その魅力や滞在性の向上を探る学生主導の実践活動です。本事業には、魅力都市研に所属する学生12名が中心となって参画し、企画立案から備品・広報物の準備、当日運営までを分担しながら進めました。2025年11月13日・14日の2日間にわたり、オリオンスクエアで「光」を活用したクイズゲーム、スーパーボールすくい、ボーリング等のイベントを実施した結果、延べ120名以上の来場があり、子ども連れの家族を中心に、学生や大人も含めた多世代が同じ場で遊び、自然に交流する機会を生み出すことができました。

こうした実践と簡易的なアンケート・インタビュー調査を通じて、オリオン通り周辺を「遊び」を軸に再編するための基礎的知見を得ることができ、地域に対する提案につながる成果を挙げることができました。さらに、本活動をもとに整理した提案は、宇都宮市主催の「大学生によるまちづくり提案」において特別賞を受賞したほか、本学すみれ祭の「ゼミ発表会」でも第1位を受賞しており、地域実践から提案・発表へと展開した点でも大きな成果を挙げました。

本事業は、中心市街地に新たな滞留と交流の機会を生み出しただけでなく、参加学生にとっても、大学の枠を超えた協働や、企画から実践・発表に至るまでの一連のまちづくり活動を経験する貴重な学びの機会となりました。今後は、単発のイベントとして終えるのではなく、地域関係者との連携をさらに深めながら、継続的かつ発展的な活動へとつなげていくことが期待されます。



図1 本事業のフライヤー

# 栃木県 大学地域連携活動 支援事業 成果報告

シティライフ学部三浦ゼミでは、2025年度の「栃木県大学地域連携活動支援事業」として、「景観遺産の継承に向けた『県産材再利用アーカイブ化』プロジェクト」に取り組みました。本事業は2025年10月24日（金）の中間報告会を経て、2026年2月6日（金）には栃木県庁にて1年間の成果報告を行いました。シティライフ学部3年の佐藤琉乃葉さんが代表者を務め、成果報告会では佐藤さんと菊地悠統さんが発表を担当しました。

本プロジェクトでは、県産材、とりわけ大谷石の古材に着目し、その再利用の実態や可能性を調査・記録するとともに、再利用を支える仕組みや需要喚起のあり方を検討してきました。活動内容としては、「宇都宮短期大学附属高校に設置された大谷石古材ベンチの視察と事業者ヒアリング」、「古材に関するワークショップの実践やピザ窯としての活用実践を通じた知見の整理」、「共和大学クリスマスマーケットにおける学外発表」などを実施しました。

2月の成果報告会では、大谷石を実際に使う立場から、再利用を担う側の声をさらに聴き取り、デザイナーや建築家といった活用主体にも働きかけていくことの重要性が示されました。また、「古材再利用には解体・運搬・保管といった古材特有のコストがかかる一方で、それらに対応できる事業者が栃木県内に残っていることは地域の強みであり、今後の展開に期待したい」との講評も得られ、励ましのお言葉もいただきました。

このように、本事業を通じて、県産材再利用は単なる資源循環の問題ではなく、地域の記憶や景観遺産の継承に関わる実践であることが改めて明らかになりました。また、学生にとっても、地域団体や事業者との連携、現地調査、運営、発表を通じて、実践的な学びを得る貴重な機会となりました。今後は、成果報告会で示された指摘もふまえながら、既存の流通経路や担い手の把握をさらに進めるとともに、記録項目の標準化やアーカイブの整備を通じて、地域内循環の実装に向けた取組へとつなげていくことが期待されます。



写真1 成果報告会の様子

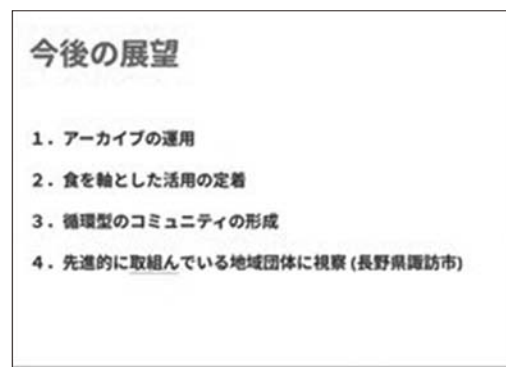


図1 成果報告会のスライドの一部

## 学生提案 成果報告

宇都宮共和大学シティライフ学部では、「都市の生活・経済・まちづくりを学ぶ」ことを教育の目標とし、まちづくりの担い手となり得る資質を備えた人材を育成するための教育研究活動を行っています。学生はゼミナール、サークルにおいて、都市におけるさまざまな課題を発見し、その解決策を考案し、また解決策を現場で実践するなどして研究活動を1年間進めてきました。その活動の集大成となるのが、学外で行われている学生の提案発表会に参加し、ゼミナール、サークルでの活動を報告することです。こうした一連の教育活動は、本学の特色ともなっています。

宇都宮市役所内うつのみや市政研究センターが主催する「大学生によるまちづくり提案2025」には、本学から2つの団体が出場しました。

大学コンソーシアムとちぎが主催する「とちぎ学生アイデアピッチバトル」には、高丸ゼミ（3年）が出場しました。

以下には、各提案骨子の資料を掲載します。なお、宇都宮市のウェブサイトにもまちづくり提案の骨子資料が掲載されています。また、大学コンソーシアムとちぎのウェブサイトにはアイデアピッチバトルのダイジェスト動画が公開されています。

### 「大学生によるまちづくり提案2025」

（主催：うつのみや市政研究センター、2025年12月12日開催、於：宇都宮市役所）

（1）【第2位】 築瀬あったかリンク事業

～地域をひらく、心をつなぐほっこり居場所ネットワーク構想～

提案団体名：宇都宮共和大学シティライフ学部

三浦ゼミ（2年）×「地域お助け隊」連合研究会

（2）【特別賞】 オリオン・ワンダーランド

提案団体名：宇都宮市創造都市研究センター魅力都市研究グループ

### 「とちぎ学生アイデアピッチバトル」

（主催：大学コンソーシアムとちぎ、2025年12月20日開催、於：栃木県総合文化センター）

（3）【オニックスジャパン賞】 飲んで楽しむ方言モクテル

提案団体名：宇都宮共和大学シティライフ学部 高丸ゼミ（3年）

(1) 築瀬あったかリンク事業

## 築瀬あったかリンク事業

～ 地域をひらく、  
心をつなぐほっこり居場所ネットワーク構想 ～

宇都宮共栄大学 地域お助け隊×2年三浦ゼミ連合研究会

- ・植木 翔瑛・川又 実来・小山 慶二・半田 初音・樋山 美羽
- ・菅野 樹里・高橋 奏多・宇梶 葵

1

### 提案の背景

「第5次宇都宮市総合計画」  
「ネットワーク型コンパクトシティ」  
持続可能性のあるものとするためには

人・土地の集約をトッダウンで進めるだけでなく、  
都市拠点およびその周辺圏域における  
「地域コミュニティ」の持続的な確保が必要

### 人と人とのつながりを保ち続けることが重要

2

### 提案の背景

都市拠点およびその周辺圏域を含む  
「築瀬地区」

JR宇都宮駅南側に広がっており交通利便性が高い

- ◆ 子育て世帯など若い世代の流入
- ◆ 古くからの住宅地として長年居住する高齢者
- ◆ 築年数の古いマンションに住む外国人住民

### 多様な属性・ライフスタイルをもつ住民が混在する地域

3

### 提案の背景、目的

近年の課題

自治会加入率の低下  
地域行事の参加者の減少

▶▶▶

地域コミュニティ  
の弱体化が懸念

「築瀬地域コミュニティセンター」を拠点として  
「空き空間」を活用する「居場所ネットワーク」を構想

### 目的

「温かみを感じられる人と人とのつながりを確保し  
安心感が得られる地域社会の実現を目指す」

4

**現状分析** —ヒアリング—

築瀬地域まちづくり推進協議会へのヒアリング  
文化推進協会会長・Sさん  
宿郷2丁目自治会会長・Sさん

**築瀬地域まちづくり推進協議会**  
築瀬地区連合自治会、築瀬地区健康づくり推進委員会、築瀬小学校PTAなど、築瀬で地域活動を行っている団体が多く所属しており、地域の環境や安全、文化、福祉、子ども育成などに関する様々な活動を行っている

5


**現状分析** —ヒアリング—

「築瀬地域まちづくり推進協議会」は「築瀬地域コミュニティセンター」を中心に地域活動が盛んに行われており、各種団体間の交流も活発である。

しかし地域行事等に参与する住民は年々減少している

- 共働きの子育て世帯は日常生活に手一杯
- 自治会役員の高齢化
- 若者や单身世帯は地域活動への関心が薄い

新たな担い手が参入しないことから、後継者不足が深刻化

 **文化推進協会会長・Sさん**


6

**現状分析** —ヒアリング—

宿郷2丁目自治会の加入率は近年低下傾向

主な理由として、  
**自治会加入が任意であるため強制力がない**

また住民からは  
「加入するメリットが分からない」  
「自治会の活動内容が見えにくい」  
といった声が多い、とのことである。

 **宿郷2丁目自治会会長・Sさん**

7

**現状分析** —築瀬地区文化祭—


築瀬地区文化祭への出店

【主催】  
まちづくり推進協議会

【開催日時】  
2025年11月1日

【開催場所】  
築瀬地区コミュニティセンター  
築瀬小学校

【実施内容】  
「炭火焼き売店」「輪投げレース」  
「脳×体！チャレンジゲーム&購読器体験」  
「大谷石ピザ窯」



築瀬地区文化祭チラシ (地域お助け隊作成)

8

## 現状分析 ー築瀬地区文化祭ー

### 築瀬地区文化祭

- ◆ 6月から実行委員が発足
  - ◆ 協議会との共同のイベント立案
  - ◆ 毎月の定例会議への参加
- 本番まで約半年の準備期間を経て実現

#### ー交流のあった団体

- ・ 築瀬まちづくり推進協議会
- ・ 健康づくり推進員会
- ・ さつきホームクリニック
- ・ 宇都宮共和大学陣内ゼミ
- ・ 築瀬小学校の職員

日時	内容
6/19	第1回築瀬地区文化祭会議
7/20	「大谷石ピザ窯」企画書作成
7/26	第2回築瀬地区文化祭会議
8/28	「大谷石窯ピZZA」の平野さんへヒアリング
8/30	第3回築瀬地区文化祭会議
9/11	第1回大谷石ピザ窯製作
9/20	第4回築瀬地区文化祭会議
9/27	築瀬地区文化祭チラシ作成
10/1	築瀬地区文化祭チラシ印刷
10/5	自治体回覧版にてチラシ配布
10/8	第2回大谷石ピザ窯製作・火入れ
10/13	保健所・消防署へ申請書類の提出完了
10/18	第5回築瀬地区文化祭会議
10/25	社会福祉文化祭「ふるさと祭」にて大谷石ピザ窯の自給自足ピZZAを提供
10/31	築瀬地区文化祭 前日準備
11/1	築瀬地区文化祭2025 開催

9

## 現状分析 ー築瀬地区文化祭ー

### 地域お助け隊出店 「大谷石ピザ窯」

- ◆ 石蔵であった大谷石の古材を加工、リユースし誕生
- ◆ 令和7年度大学コンソーシアムとちぎ学生活動支援事業として活動
- ◆ 地域の象徴としてイベントに参加した人々の関心や話題を算め、「人と人を繋ぐ装置」としても機能



築瀬地区文化祭 大谷石ピザ窯の様子

10

## 現状分析 ー築瀬地区文化祭反省ー

- ◆ 連絡ツールとしてグループLINEを活用した  
→グループへの参加、情報共有ができていないケースが多く発生した
- ◆ チラシなどの広報物をデジタルで作成  
→制作が若手に集中
- ◆ 当日スタッフのボランティア募集に宇都宮市の「まちづくり活動応援事業」を利用し募集した  
→ボランティアの集まりが悪く、「まちづくり活動応援事業」が各種地域団体に十分活用されていない

高齢者世代にとって、デジタルツールの活用自体が地域イベントの運営における大きなハードルとなっている

11

## 現状分析 ーアンケート調査ー

### アンケート調査

子ども（小学生33名・中学生3名）  
および大人48名を対象に  
アンケート調査を実施

詳細は提案書、ポスターに記載



年代	スマホ/パソコンへの習熟意識 (回答対象：大人)				合計
	多く 感じない	やや 感じる	非常に 感じる	知らない	
20代以下	4	1	0	0	5
30代	6	0	0	0	6
40代	5	3	0	0	8
50代	1	0	1	0	2
60代以上	0	0	4	0	4
合計	16	5	0	0	21

年代	大学によるスマホ/パソコン講座の希望意識 (回答対象：大人)				合計
	全く 必要ない	やや 必要ない	やや 必要	非常に 必要	
20代以下	2	1	0	0	3
30代	2	0	3	0	5
40代	2	0	2	0	4
50代	1	0	1	0	2
60代以上	0	0	1	2	3
合計	7	3	4	3	17

高齢者はデジタルに苦手意識を感じている人が一定数いる

12

## 施策事業提案

「地域内の空き空間を活用した多主体の交流拠点づくり」

## 築瀬あったかリンク事業

## 築瀬あったかリンク事業

多様な住民  
高齢者  
外国人居住者  
子育て世帯

「地域内の空き空間」を活用した  
多主体の交流拠点づくり」

「築瀬地域コミュニティセンター」  
を申請窓口

地域内の空き空間を目的に応じて  
イベントの開催などに利用できる  
仕組みを整える

空き空間  
コミセン  
空き家  
公園  
田川

互いに支え合える「居場所」を複数の空間で展開し  
それらを有機的にリンクさせる

13

14

## 例1 シニア向けデジタルセミナーの開催

- 1 行政手続きや医療予約をはじめ、さまざまなサービスがオンライン化されている
- 2 築瀬地区文化祭や実施したアンケートの結果、高齢者の中にはスマートフォン操作に苦手意識を持つ方が一定数存在する
- 3 大学生が高齢者を対象に実施するシニア向けデジタルセミナーの開催



シニア向けデジタルセミナー企画課 チラシ

15

## 例2 「空き家であつなぐ！多文化ワールド食卓」

宇都宮市には約1,25万人の外国人が居住しており、特に中心部ではその存在が際立っている

今後は、外国人の地域参入の可能性

築瀬地区は宇都宮駅に隣接しており、交通の利便性からも多文化交流の拠点としてのポテンシャルがある



多文化ワールド食卓企画課 チラシ


外国人住民の栄養価の高い伝統料理を地域住民に振る舞う  
「空き家であつなぐ！多文化ワールド食卓」の開催

16

**例3 「公園まっこりマルシエ」**

**目的**  
公園を子育て世帯が気軽に食と遊びを通して交流できる場に創出すること

**内容**  
大谷石ビザ窯を用いて市内の公園で焼きたてピザの出張販売を実施  
地域の規格外野菜などを積極的に分けてもらい活用



大谷石ビザ窯は築港地区文化祭で実施  
100食以上のピザトーストを販売!!

食と遊びで公園に日常的に訪れる  
きっかけを作り、地域交流を促進

17

**例4 多様な居住者の交流を目的とした  
多主体連携マルシエの開催**

過去に共和大学の学生が田川で  
宮校祭2024（まちまちサークル）  
宮校祭2025（地域お助け隊）  
など  
田川遊歩道において  
にぎわい創出イベントを成功させている




宮校祭2025の様子

田川が多様な住民の交流拠点として  
高いポテンシャルを持つことを確認

18

**例4 多様な居住者の交流を目的とした  
多主体連携マルシエの開催**

築瀬あつたかりリンクプロジェクトの実現  
築瀬地区を流れる「田川」の遊歩道にて  
「高齢者」「外国人居住者」「子育て世帯」  
多世代交流できるような  
地域行事の開催が可能に



築瀬地域コミュニティセンター  
で活動している地域サークルに  
よる出店  
学生は  
・企画運営  
・デジタル広報  
・来場者サポート

19

**提案のまとめと展望**

提案した施策を段階的に実施し、  
継続的な交流を生み出す取り組みへ発展  
地域の若者や団体が目的に応じて地域内空間の活用を申請

公園まっこりマルシエ → 空き家 多文化ワールド食卓

築瀬コミュニティセンター  
地域内交流の拠点、窓口  
シニア向けデジタルセミナー

まちづくり活動応援事業の促進  
宇都宮市の政策ともリンク

田川  
「いつもの場所」「いつものつながり」と感じられる居場所の創出

多主体連携マルシエ

20

ご清聴ありがとうございました

21

(2) オリオンワンダーランド




# オリオンワンダーランド

宇都宮市創造都市研究センター 魅力都市研究グループ

宇都宮共和国 3年 || ©廣田 美姫・青木 流唯・河俣 大輝・三瓶 楓  
 作新学院大学 3年 || 阿久津 瑛美・福田 美雪・堀江 大輝・茂木 元気・山本 敦也  
 文星芸術大学 2年 || 田口 実永・田守 沙朱

1



オリオン通りの様子

宇都宮市のまちなかを東西につらぬく「オリオン通り」およびその周辺

大学と行政が協働し「【遊び】がある場」として再編

さらに「ウォーカーブル」なエリアへ

歩く (walk) + できる (able)  
 「歩きやすい」「歩くのが楽しい」

まとめ

3

目次

1. 提案の要旨
2. 提案の背景・目的
3. 現状分析
4. 施策事業の提案
5. まとめ



2

要旨

背景・目的

現状分析

事業提案

まとめ

■ 全国各地で進められる「ウォーカーブルなまちづくり」  
 2020年の「都市再生特別措置法」改正により、「ウォーカーブルなまちづくり」  
 (= 居心地が良く歩きたくなくなる空間を創出するまちづくり) が推進されている




▶ 「ウォーカーブルなまちづくり」においては「回避 / 滞留」が重要な指標

4

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

■ 対象地 | 宇都宮市のまちなかを東西に貫く「オリオン通り」周辺



近年では…  
本市でもウォーカーブルなまちづくりが実装  
[https://twitter.com/urban\\_2020/with\\_replies](https://twitter.com/urban_2020/with_replies)



一方で…  
「夜の街」化による治安悪化が問題視  
<https://www.bhroadcast.co.jp/news/38882/>

▶ 宇都宮市のまちなかをさらに「ウォーカーブル」にするには何が必要だろうか？

5

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

■ まちを回遊／滞留したくなる目的として「遊び」に着目  
本提案における2通りの「遊び」



回遊したくなる理由としての「遊び」



滞留したくなる余白としての「遊び」

▶ まちなかが「遊び」であふれるとウォーカーブルなまちになるはず！

6

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

■ 本提案の目的

夜遊びに偏り、空き地／風間といった余白が多い「オリオン通り」とその周辺エリアを対象に「回遊／滞留したくなる遊び」であふれるさらに「ウォーカーブル」なエリアへの再編を通じて人と人とのつながりや交流に満ちた「ほっこり」できるまちなか空間を実現すること

7

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

■ 対象地に「遊び」がどのくらいあるか？ ▶ フィールドワークの実施  
日時 | 5月中旬・11月上旬



アーケードで歩きやすいが  
目的がないと楽しめない



余白（空地・川・壁面）が  
居場所に転換されていない



小規模駐車場が点在し、  
回遊を阻害

提案につながる気づき  
▶▶ 「滞在できる空間」が不足している  
○ 余白の再解釈によって広場や集いの場の可能性が広がる

8

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 対象地に「遊び」を設けたら人は遊ぶか？ ▶ イベントの実施</p>				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>〈光の遊び場〉</p> <p>日時   11月13日(木)～14日(金) 11:00～18:00</p> <p>場所   オリオンスクエア</p> <p>内容   光の装飾を使った「昼も夜も楽しめる遊びの空間」 イベント参加者を対象としたアンケート調査</p> <p>※ 「宇都宮市」からの後援あり ※ 「大学コンソーシアムとちぎ」からのご支援あり</p> </div>				

9

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 対象地に「遊び」を設けたら人は遊ぶか？ ▶ イベントの実施</p>				
<p>当日の会場配置図</p>				
<p>① ボール転がし ② 輪投げ ③ スーパーボールすくい ④ サッカー ⑤ ケンケンパ ⑥ ボウリング ⑦ ピンポン玉ゲーム ⑧ 射的 ⑨ トロッコクイズゲーム</p>				

10

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 対象地に「遊び」を設けたら人は遊ぶか？ ▶ イベントの実施</p>				
<p>イベントの活動報告 ▶ 2日間で120名以上の方に来場していただきました！</p>				
		トロッコクイズゲーム		ピンポンゲーム
		射的		ボーリング

11

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 対象地に「遊び」を設けたら人は遊ぶか？ ▶ イベントの実施</p>				
<p>イベントの活動報告 ▶ 家族連れの方々の来場が多く、楽しみながら遊んでもらえた</p>				
		キラキラボール運びで遊ぶ様子		スーパーボールすくい遊ぶ様子
		クイズで遊ぶ様子		



12

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 対象地に「遊び」を設けたら人は遊ぶか？ ▶ イベントの実施</p> <p>イベントの活動報告 ▶ 家族連れの方々の来場が多く、楽しみながら遊んでもらえた</p>				
 <p>キラキラボール運びで遊ぶ様子</p>		 <p>クイズで遊ぶ様子</p>		 <p>スーパースポールすくいで遊ぶ様子</p>

13

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 対象地に「遊び」を設けたら人は遊ぶか？ ▶ イベントの実施</p> <p>イベントの成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 子供・学生・大人が一纏に遊ぶ「交流」の場が生まれた</li> <li>▶ 夜のオリオン通りでも人が「回遊」するきっかけになった</li> <li>▶ 通りを通り過ぎるだけの人が立ち止まり「滞留」していた</li> <li>▶ 来場者が自然に「会話」し始める空間ができた</li> <li>▶ まちなかの「安心感」を高めた</li> </ul> <p>(光の演出で明るさが増えて子供連れの家族が安心して過ごせる・夜の怖さを軽減する効果も)</p>				
				

14

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ ほっこりできるまちなか空間を目指して ▶ 「遊び」であふれるオリオン通りへ</p>				
 <p>子どもから大人まで 楽しむことができる空間</p>				

15

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p>■ 遊びの軸となる3つの要素</p>				
				

16

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

シャッターキーキャンバス  
音のなるベンチ・街灯  
木通り  
武蔵野公園  
つながる星空シネマ  
かまがわパレード  
ARフォトスポット  
まちなか芝生ひろば

17

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

提案① | 「回遊」したくなる「娯楽」のデザイン  
▶ 光・音・水をかけ合わせた、さらにウォーカーカプルのオリエント通りへ

■ 光るピアノストリート  
▶ プロジェクターを使い、ピアノの鍵盤を通りに映す  
▶ 映像の鍵盤を踏むと音となる仕組みを構築  
歩くことそのものが娯楽になり「回遊」を創出

18

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

提案① | 「回遊」したくなる「娯楽」のデザイン  
▶ 光・音・水をかけ合わせた、さらにウォーカーカプルのオリエント通りへ

■ つながる星空シネマ  
▶ まちなかの夜空の下でゆったりと映画鑑賞  
▶ 星を眺めながらゆっくりできる憩いの場  
共通体験がまちに「温かいつながり」を創出

19

要旨 背景・目的 現状分析 事業提案 まとめ

提案① | 「回遊」したくなる「娯楽」のデザイン  
▶ 光・音・水をかけ合わせた、さらにウォーカーカプルのオリエント通りへ

■ かまがわパレード  
▶ 光の装飾と音楽を施す  
▶ 所定の時間でパレード開始  
(人形・オブジェクト出現)  
今よりさらにパワーアップしたイベントで「回遊性」を強化

20

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p><b>提案②   「滞留」したくなる「余白」のデザイン</b>          ▶ 併未利用な時間・空間を居場所と捉え直し、さらにウォーカーカブアルなオリオン通りへ</p> <p><b>空き家・屋間の閑散時間・細い路地などをゆるく過ごせる場所に転換</b></p>				
<p><b>まちなかブックスポット</b></p> <p>使われていないスペースに 本を並べ余白を作る 「よりみち」したくなる やさしい滞留の場</p>		<p><b>木陰のハンモック1人席</b></p> <p>木陰にハンモックを置き 「少しだけ横になれる」 やさしい休憩スペース まちなかでひとりの時間を 静かに味わえる</p>		

21

要旨	背景・目的	現状分析	事業提案	まとめ
<p><b>まとめ</b></p> <p>◆ フィールドワークにより、オリオン通り周辺には活用可能な「余白」が多く存在することを確認          → 「余白」を「過ごせる場」に変えることで、ウォーカーカブアルなまちづくりに寄与</p> <p>◆ 「光の遊び場」は「誰もが直感的に楽しめる」「まちに新しいにぎわいをつくる」取組として寄与          → 遊びが「回遊」と「滞留」を支える仕組みとして有効であることを確認</p>				
<p><b>本提案が実現すれば、オリオン通り周辺がほっこりとした空間に！</b></p>				
<p><b>◆ 今後の私たちの展望</b></p> <p>◆ 「音の遊び場」「水の遊び場」イベント開催</p>				

22

ご清聴ありがとうございました

◆ 本イベントの実施にあたっては「宇都宮市」からご後援をいただいたほか、「大学コンソーシアムとちぎ」から「令和7年度学生活動支援事業」としてご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

◆ 本提案内容は、2025年10月の「宇都宮共和大学すみれ祭 研究発表会」にて開催秀賞を受賞しました。

23

# 飲んで楽しむ方言モクテル

「栃木方言」のイメージ変容と地域資源としての活用可能性

※モクテル＝ノンアルコールカクテル

宇都宮共和大学シテイライフ学部 3年高丸ゼミ

1

## 本研究の概要

- 現状調査を実施
  - 宇都宮市における方言土産の現状
  - 現代の若者の栃木方言に対するイメージ
- 栃木方言を地域資源として活用する実践研究
  - オリジナルモクテルの開発
    - 生成AIを活用したネーミング案とレシピ案の作成
    - 地元のバーテンダーとのレシピ共同開発

※モクテル＝ノンアルコールカクテル

3

## はじめに

- 「方言」は重要な地域資源の一つ
  - 全国には方言土産や方言グッズが多く存在
- 栃木方言は「自己嫌悪型」方言に分類される  
(井上史雄(2011)『経済言語学論考』)
- 近年はお笑いなどの影響でイメージが変化しているのではないか？
- 今こそ、栃木方言を地域資源として活用するときなのではないか？

2

## 方言土産の現状調査

- 調査日:
  - 2025年8月26日
- 調査場所:
  - JR宇都宮駅
  - 宇都宮テラス
- 調査結果:
  - パッケージに方言が書かれた商品は2つのみ



方言が地域資源として積極的に使用されていない

4

## 方言イメージの現状調査

- ・実施期間: 2025年6～7月
- ・調査対象: 宇都宮共和国大学の学生68人
- ・実施方法: Googleフォームによるアンケート

### ・質問内容

- 回答者属性
  - ・ 年齢、性別、居住歴、同居している家族の出身地
- 栃木方言語彙の理解度、使用度
- 好きな栃木方言
- 栃木方言と標準語に対するイメージ
  - ・ 形容詞対を用いたSD法(13項目、5段階評価)

5

カクテルの街  
宇都宮

栃木方言の  
積極的な活用

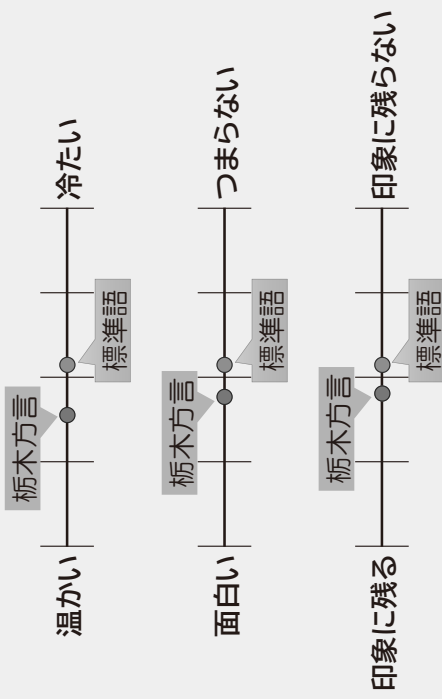


### 方言を飲んで楽しむオリジナルモクテル開発

- ▽ 気軽に楽しんでもらうためにノンアルコールにする。
- ▽ ネーミングに栃木方言を入れる。
- ▽ ネーミング案とレシピ案に生成AIを活用する。
- ▽ 市内のバーのバーテンダーとレシピを共同開発する。

7

## 栃木方言は良い印象を持たれている



6

Gemini

いじやちやったレモン DAIJI  
おぼんでず らいさまスカッシュ  
こでらんねえ〜いちご いいあんべえ  
あっかき上手 でれすけタイム  
いやどろもソーダ ゴじやっペパンチ

8

## Bar Khan(バー・カーン)



9

## モクテルレシピ試作の様子



10

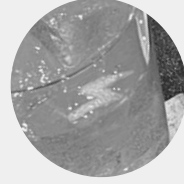
## 試作したモクテルの一部



11

## らいせまスカッシュ

- レシピ
  - 柚子ジュース(40ml)
  - シュガーシロップ(10ml)
  - ジンジャーピエ(100ml)
  - レモンスライス(1片)
  - 氷



12

## ごじゃっペアミルク gojappe + pear + milk

### • レシピ

- 梨ジュース(40ml)
- ガシスシロップ(10ml)
- ミルク(100ml)
- 氷



13



15

## 12月2日 方言モグテル試飲会開催



14

### 栃木を方言あふれる地域にするために！

- 栃木方言の温かさ、面白さを広める！
  - 方言土産、方言グッズを増やしてアピールする！
  - とちまるくんとミヤリーには方言で話してもらおう！
- 企業での活用
  - キャッチコピーや商品説明に方言を積極的に取り入れる！
- ウェブサイトでの活用
  - 栃木弁を理解し、栃木弁で応答することができる  
問い合わせチャットボットを開発する！
- 県や市の施策事業としての展開
  - 県産品への方言の活用を推進・推奨する！

16

## 学生による地域連携活動

2025年度におけるシティライフ学部学生による地域連携活動を紹介します。

### (1) 宮桜祭 2025

日時：2025年4月5日（土）

場所：田川遊歩道（宮の橋の下）

主催：「宮桜祭実行委員会」



### (2) 第29回宇都宮市平和のつどい（ボランティア活動）

日時：2025年7月6日（日）

場所：宇都宮市立南図書館

参加：宇都宮共和大学地域お助け隊（学生6名、教員1名）



### (3) とちぎ子どもの未来創造大学

講座名：集まり宮っ子の森 -ワクワクものづくり体験会-

日時：2025年8月8日（金）

講師：坂口ゼミ学生10名



### (4) 「親子で楽しく SDGs を学ぼう」 イベントにおける学生講師派遣

日時：2025年8月10日（日）・2025年10月12日（日）

場所：「大谷コネクト」・「株式会社つかもと」

参加：三浦ゼミ学生2名（川又実来・樋山美羽（2年））・1名（本橋裕佳（3年））

主催：栃木県

企画・運営：株式会社 五光



(5) 文化的景観に関する視察及び自治体ヒアリング

日時：2025年8月25日（月）～27日（水）

場所：石川県金沢市及び金沢市役所

参加：三浦ゼミ学生9名



(6) 「コザイノカタチ」全3回ワークショップ

日時：2025年9月21日（日）・2025年12月17日（水）・2026年1月24日（土）

場所：大谷コネクト・宇都宮共和大学宇都宮シティキャンパス・大谷コネクト

主催：三浦ゼミ及び学生有志



(7) 築瀬地区文化祭（霜月祭）、スポーツコーナー、大谷石ピザ窯によるピザトースト出店

日時：2025年11月1日（土）

場所：宇都宮市築瀬地区コミュニティセンター、築瀬小学校校庭

参加：陣内ゼミ、出店：宇都宮共和大学地域お助け隊



(8) 「光の遊び場」 イベント

日時：2025年11月13日（木）～14日（金）

場所：オリオンスクエア

主催：宇都宮市創造都市研究センター 魅力都市研究会 まちづくり班

（学生4名・代表者 | 廣田美姫（3年））

後援：宇都宮市



(9) 大学生によるまちづくり提案発表会

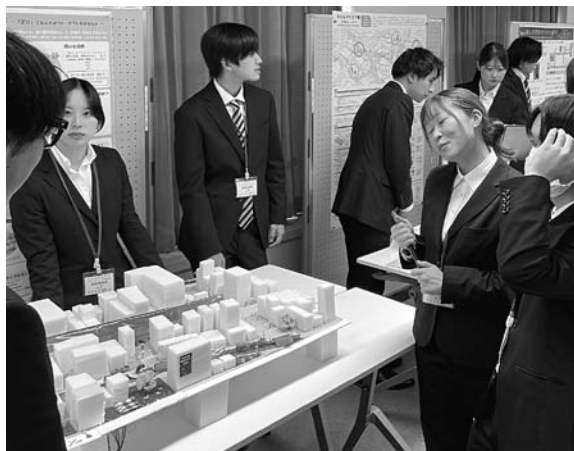
開催日：2025年12月12日（金）

会場：宇都宮市役所

主催：宇都宮市

参加：三浦ゼミ（2年）×「地域お助け隊」連合研究会（代表者 | 植木翔瑛（3年））、  
宇都宮市創造都市研究センター 魅力都市研究会 まちづくり班

（代表者 | 廣田美姫（3年））



(10) 冬渡（おたりや）祭・春渡（おたりや）祭

開催日：2025年12月15日（月）・2026年1月15日（木）

会場：宇都宮二荒山神社

参加：平野心暉（4年）、佐藤龍馬（2年）



(11) とちぎ学生アイデアピッチバトル

日時：2025年12月20日（土）

場所：栃木県総合文化センター

主催：大学コンソーシアムとちぎ

参加：高丸ゼミ（3年）



(12) 田川シダレザクラ復活祭 2026 (ボランティア活動)

日時：2026年2月7日(土)

場所：田川両岸(幸橋～東橋)

主催：栃木県宇都宮土木事務所

参加：宇都宮共和大学地域お助け隊(学生12名、教員1名)



(13) 栃木県大学地域連携活動支援事業

「景観遺産の継承に向けた『県産材再利用アーカイブ化』プロジェクト」成果報告会

日時：2026年2月6日(金)

場所：栃木県庁

主催：栃木県

参加：佐藤琉乃葉(3年)、菊地悠統(3年)



(14) 長野県諏訪市での古材レスキュー活動への参加及び関係者へのヒアリング

日時：2026年2月13日（金）～15日（日）

場所：Rebuilding Center JAPAN

参加：三浦ゼミ及び学生有志6名



## 宇都宮共和大学 都市経済研究センターの主な活動報告

2025年度における都市経済研究センターの主な活動を報告します。

### 1 運営体制

名誉センター長 古池 弘隆  
センター長 田部井信芳  
運営委員長 田部井信芳  
運営委員 大石 和博・高丸 圭一・漆戸 宏宣・渡辺 靖明・坂口 豪・  
三浦 魁斗

### 2 講演会の開催

#### (1) とちぎ圏央まちづくり協議会 「とちぎSHOGUN物語」シンポジウム

～LRT西側延伸で新たな価値あるまちづくり～

開催日 2025年5月13日(火)

会場 宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室

内容

##### ○基調講演「天下人はなぜ宇都宮をめざしたのか？」

宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事 江田 郁夫氏

##### ○パネルディスカッション

・パネリスト

宇都宮市総合政策部（前東京サテライトオフィス所長） 馬場 将広氏

宇都宮観光コンベンション協会常務理事 鈴木 孝美氏

壬生町東京サテライトオフィス所長 落合 正浩氏

壬生町歴史民俗資料館学芸員 藤栄友里絵氏

宇都宮短期大学教授・「よみがえれ！宇都宮城」市民の会理事 江田 郁夫氏

・司会

宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長 須賀 英之

参加者 140名

#### (2) 大学コンソーシアムとちぎ（カーボンニュートラル推進事業委員会）

とちぎのCN推進産官学連携講演会

開催日 2025年11月28日(金)

会場 宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室

講 師	栃木トヨタ自動車株式会社代表取締役 栃木県環境森林部参事 宇都宮大学国際学部教授 宇都宮共和大学子ども生活学部教授	新井 孝則 氏 大橋 禎恵 氏 高橋 若菜 氏 桂木 奈巳 氏
参加者	120 名	

(3) とちぎ圏央まちづくり協議会 第2回「とちぎ SHOGUN 物語」シンポジウム  
～江戸から日光へ 広域連携による歴史軸の物語～

開催日	2026 年 2 月 27 日 (金)	
会 場	宇都宮共和大学 宇都宮シティキャンパス 401 大講義室	
内 容		
	○基調講演①「神君家康公 日光を選ぶ」	
	日光東照宮特別顧問・元禰宜	高藤 晴俊 氏
	②「歴史資源を生かした広域観光振興」	
	日光市長	瀬高 哲雄 氏
	○パネルディスカッション	
	・パネリスト	
	日光市市長	瀬高 哲雄 氏
	鹿沼市市長	松井 正一 氏
	宇都宮市総合政策部振興担当副参事	馬場 将広 氏
	栃木市東京サテライトオフィス所長	野尻 博之 氏
	小山市総合政策部総合政策課 連携・協働調整担当	菅沼美智子 氏
	小山市立博物館学芸員	尾上 仁美 氏
	壬生町東京サテライトオフィス所長	落合 正浩 氏
	壬生町歴史民俗資料館学芸員	藤栄友里絵 氏
	栃木県生活文化スポーツ部文化振興課課長補佐	齋藤 恒夫 氏
	・司 会	
	宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長	須賀 英之
参加者	110 名	

### 3 研究会の開催

・開催日	2025 年 5 月 29 日 (月)	
内 容	「地方都市における中心商店街の構造変容とその要因 —宇都宮市オリオン通りの飲み屋街化の実態から—」	
講 師	駒澤大学文学部地理学科准教授	西山 弘泰 氏
参加者	17 名	

・開催日 2026年3月19日（木）

内 容 「宇都宮のまちづくりに関する合同ゼミナール」

宇都宮共和大学都市経済研究センター・駒澤大学西山ゼミ共催  
宇都宮共和大学地域お助け隊+2年三浦ゼミ「築瀬あったかリンク事業

～地域をひらく、心をつなぐほっこり居場所ネットワーク構想～

宇都宮市創造都市研究センター魅力都市研究会「オリオン・ワンダーランド」

駒澤大学2年西山ゼミ「JR宇都宮駅西口におけるまちなみと土地利用の混沌はなぜ

生まれたのか？～ステークホルダーへのヒアリング調査を中心とした分析から～」

参加者 22名

#### 4 那須塩原市民大学

(1) 2025年度那須塩原市民大学（宇都宮共和大学連携講座）

##### 【第1回】

テーマ 「人間とAIの共存～生成AIとのかかわり方～」

開催日 2025年6月25日（水）

会 場 那須塩原市図書館みるる

講 師 シティライフ学部 教授 高丸 圭一

参加者 31名

##### 【第2回】

テーマ 「リトミックを通して育む親子のコミュニケーション」

開催日 2025年8月2日（土）

会 場 西那須野公民館多目的ホール

講 師 子ども生活学部 准教授 大島美知恵

参加者 20名

(2) 那須塩原市民大学運営委員会

那須塩原市が設置した「2025年度那須塩原市市民大学運営委員会」において、シティライフ学部松田勇一教授が運営委員を務め、2025年8月18日、2026年3月18日に那須塩原市西那須野庁舎での会議に出席しました。

#### 5 栃木県生涯学習課「とちぎ子どもの未来創造大学講座」

テーマ 「あつまれ宮っこの森ーワクワクモノづくり体験会ー」

開催日 2025年8月8日（金）

会 場 宇都宮共和大学シティキャンパス 504 教室

講 師 シティライフ学部 専任講師 坂口 豪

シティライフ学部坂口ゼミ

対 象 栃木県内の小学4～6年生、中学1～3年生

参加者 17名

## 6 講師派遣制度

主 催 高根沢町自治会連合会

期 日 2025年11月9日(日)

テーマ 「命を守る防災まちづくり」

講 師 シティライフ学部 教授 和田佐英子

会 場 高根沢役場

参加者 35名

## 7 まちなか大学2025

主 催 宇都宮市創造都市研究センター

期 日 2025年10月1日(水)

テーマ 「大谷を舞台にしたまちづくりの研究と実践」

講 師 シティライフ学部 専任講師 三浦 魁斗

会 場 オリオンACぷらざ

参加者 約10名

## 8 宇都宮市創造都市研究センター

宇都宮市創造都市研究センターは、宇都宮市内の私立4大学(宇都宮共和大学・作新学院大学・帝京大学宇都宮キャンパス・文星芸術大学)と自治体・産業界等が連携し、宇都宮都市圏の創造都市による発展を目指し2017年10月に設立されたプラットフォームです(センター長:宇都宮共和大学長 須賀英之)。

運営委員 シティライフ学部 教授 田部井信芳(25年8月まで)

シティライフ学部 教授 大石 和博(25年9月より)

## 9 地域産学官連携活動

以下の委員会等において地域産学官連携事業の対外窓口業務を展開しました。

- ・大学コンソーシアムとちぎ とちぎ学生アイデアピッチバトル実行委員会 委員
- ・公益財団法人栃木県産業振興センター とちぎ産業振興ネットワーク推進会議 委員
- ・宇都宮市経済部産業政策課 宇都宮イノベーションコンソーシアム 委員
- ・宇都宮市教育委員会事務局生涯学習課 宇都宮市民大学運営協議会 委員
- ・宇都宮 MICE ネットワーク 委員
- ・宇都宮市創造都市研究センター 運営委員

・大谷グリーン・ツーリズム推進協議会 委員

## 10 刊行物

『宇都宮共和大学都市経済研究センター年報 2025 第 25 号』（2025 年 6 月刊行）

## 11 学生支援

・シティライフ学部 1・2 年生を対象とした合宿交流研修におけるまちあるきの実施方法（フィールドワーク等）を都市経済研究センター運営委員（田部井・高丸・漆戸・渡辺・坂口）が指導した。

日 時 2025 年 4 月 17 日（木）～ 18 日（金）

会 場 栃木県内各所及び日光きぬ川ホテル三日月

・「親子で楽しく SDGs を学ぼう」講師学生を都市経済研究センター運営委員（三浦、渡辺）が指導した。

日 時 2025 年 8 月 10 日（日）・2025 年 10 月 12 日（日）

場 所 大谷コネクト・株式会社つかもと

・「まちづくり提案発表会」及びその前提となるイベント参加学生を都市経済研究センター運営委員（坂口、三浦）が指導した。

発表会日時 2025 年 12 月 12 日（金）

会 場 宇都宮市役所

・「とちぎ学生アイデアピッチバトル」参加学生を都市経済研究センター運営委員（高丸）が指導した。

日 時 2025 年 12 月 20 日（土）

会 場 栃木県総合文化センター

・「栃木県 大学地域連携活動支援事業 中間報告会・成果報告会」参加学生を都市経済研究センター運営委員（三浦）が指導した。

日 時 2025 年 10 月 24 日（金）・2026 年 2 月 6 日（金）

会 場 栃木県庁

## 令和7・8年度 専任教員の社会貢献活動(シティライフ学部)

宇都宮共和大学〔2026(令和8)年5月1日現在〕

職名	氏名	委嘱の内容		
		名称	職位	設置者
学長	須賀 英之	[各種審議会・委員会委員等]		
		栃木県私立学校審議会	会長	栃木県
		栃木県公私立高等学校協議会	委員	栃木県
		栃木県文化振興審議会	会長	栃木県
		栃木県文化功労者選考委員会	委員長	栃木県
		とちぎの元気な森づくり県民会議	会長	栃木県
		栃木県信用保証協会外部評価委員会	委員長	栃木信用保証協会
		うつのみや産業振興協議会	会長	宇都宮市
		那須塩原市社会教育委員	委員	那須塩原市教育委員会
		栃木県私立中学高等学校連合会	副会長	
		[団体兼職]		
		大学コンソーシアムとちぎ	副理事長	
		栃木県交響楽団	会長	
		栃木県楽友協会	会長	
		栃木県オペラ協会	理事	
		栃木県文化協会	常任理事	
		うつのみや文化創造財団	理事	
		宇都宮市文化協会	顧問	
		宇都宮まちづくり推進機構	理事長	
		「よみがえれ！宇都宮城」市民の会	会長	
		宇都宮MICEネットワーク	会長	
		宇都宮市創造都市研究センター	センター長	
		全国音楽療法士養成協議会	理事	
		栃木銀行	社外監査役	栃木銀行
		あしぎん国際交流財団	理事	足利銀行
		あしぎん奨学基金	運営委員	足利銀行
		宇都宮みずほ研修会	会長	みずほ銀行

職名	教員氏名	委嘱の内容		
		名称	職位	設置者
教授	田部井 信芳	栃木県行政改革推進委員会	委員	栃木県
教授	寺内 孝夫	那須塩原市立小中学校等通学区審議会	会長	那須塩原市教育委員会
教授	陣内 雄次	栃木県子ども・子育て審議会	会長	栃木県保健福祉部子ども政策課
		下野市市民活動補助事業選考委員会	会長	下野市総合政策部市民協働推進課
		武蔵野大学サステナビリティ研究所	客員研究員	武蔵野大学
		矢板市まち・ひと・しごと創生総合戦略検証委員会	アドバイザー	矢板市総合政策部
		鹿沼市地域のチカラ協働事業審査会	委員長	鹿沼市市民部
		鹿沼市市民協働モデル事業審査会	委員長	鹿沼市市民部
		那須塩原市都市計画審議会	会長	那須塩原市建設部都市計画課
		那須塩原市まち・ひと・しごと創生推進懇談会	会長	那須塩原市企画部企画政策課
		野木町協働のまちづくり支援事業補助金審査委員会	委員長	野木町町民生活部
		栃木市文化財振興計画推進懇談会	アドバイザー	栃木市教育委員会
		栃木市文化財保存活用地域計画協議会	会長	栃木市教育委員会
		教授	田上 富男	栃木県国土利用計画審議会
教授	和田 佐英子	公益財団法人下野奨学会	評議員	下野新聞社
		栃木県コミュニティ協会研究推進委員会	委員	栃木県コミュニティ協会
		国土審議会専門委員(水源開発)	委員	国土交通省
		利根川水系鬼怒川・小貝川河川整備計画フォローアップ委員会	委員	国土交通省関東整備局
		那珂川水系河川整備計画フォローアップ委員会	委員	国土交通省関東整備局
		久慈川水系河川整備計画フォローアップ委員会	委員	国土交通省関東整備局
		栃木地方最低賃金審議会	委員	厚生労働省栃木労働局
		官民競争入札等管理委員会	専門委員	総務省
		総務省関東管区行政評価局栃木行政監視行政相談センター行政懇談	委員	総務省関東管区行政評価局
		宇都宮市市政研究センター特別アドバイザー	アドバイザー	宇都宮市総合政策部
教授	大石 和博	那須塩原市環境審議会	会長	那須塩原市環境課
		那須塩原市環境影響評価審議会	委員	那須塩原市環境課
		宇都宮市創造都市研究センター運営委員会	委員	宇都宮市創造都市研究センター
教授	松田 勇一	栃木県地域留学生交流推進協議会運営委員会	委員	栃木県国際交流協会
		那須塩原市市民大学運営委員会	委員	那須塩原市教育委員会
教授	高丸 圭一	言語処理学会大会実行委員会	委員	言語処理学会
准教授	薄井 浩信	とちぎ産業振興ネットワーク推進会議	委員	公益財団法人栃木県産業振興センター
准教授	北浦 さおり	宇都宮市もったいない運動市民会議	委員	宇都宮市環境部環境政策課
		宇都宮市環境審議会	委員	宇都宮市環境部環境創造課
		栃木県文化功労者選考委員会	委員	栃木県
専任講師	坂口 豪	宇都宮MICEネットワーク	委員	(一社)宇都宮観光コンベンション協会
		宇都宮ブランド推進協議会	委員	宇都宮市魅力創造部都市ブランド戦略課
		日本地理学会 集会専門委員会	委員(幹事)	(公社)日本地理学会
		平和のつどい実行委員会	委員	宇都宮市多文化共生推進課
専任講師	高津 竜之介	宇都宮イノベーションコンソーシアム	委員	宇都宮市経済部産業政策課
専任講師	三浦 魁斗	大谷グリーン・ツーリズム推進協議会	構成員	大谷グリーン・ツーリズム推進協議会事務局
		土木学会関東支部選奨土木遺産支部選考委員会	委員	土木学会関東支部

都市経済研究センター年報・第26号

発行日	2026年5月31日
編集・発行	宇都宮共和大学都市経済研究センター 〒320-0811 栃木県宇都宮市大通り1丁目3番18号 TEL 028-650-6611 FAX 028-650-6612 E-mail rcenter@kyowa-u.ac.jp Website <a href="https://www.kyowa-u.ac.jp/">https://www.kyowa-u.ac.jp/</a>
印刷	(株)松井ピ・テ・オ・印刷 〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5丁目9番21号
定価	1,000円（消費税込み）